

遺跡発掘調査報告書

下宮遺跡
有田北遺跡
有田東遺跡
有田東1号古墳

平成10年3月

茨城県真壁郡明野町教育委員会

明野町埋蔵文化財発掘調査会

序

明野町は、町内各地から集落跡や古墳が発見され、埋蔵文化財包蔵地が151箇所を数えて、古代から開けていた地として知られています。

このたび、茨城県下館土地改良事務所の観音川流域ほ場整備事業に伴う排水路工事のため、明野町大字押尾・有出地内に所在いたします「下宮遺跡」、「有田北遺跡」、「有田東遺跡」の一部と「有田東1号古墳」を、記録保存のために発掘調査を実施いたしました。3箇所の遺跡は、古墳時代前期から奈良・平安時代に営まれていた集落あり、住居跡が25箇所で見られ、土師器等が多数出土いたしました。「有田東1号古墳」からは、人物埴輪や円筒埴輪が多量に見られました。しかし、今回の発掘調査は幅員2.4mの排水路部分であったために、各遺跡の全貌は確認できませんでした。発掘調査区以外の遺跡は現状保存という形をとりました。

明野町に存在する古代歴史のロマンとも言える重要な埋蔵文化財を保存し、次世代に引き継いでゆくことが、私どもに課せられた責務と考えます。

発掘調査の成果であります本報告書が、郷土の歴史の理解を深める研究材料として活用されますことを切望いたします。

なお、今回の発掘調査にあたりましては、関係機関の皆様方に御高配を賜りましたことを厚くお礼申し上げ、発刊のあいさつといたします。

平成10年3月

明野町教育委員会

教育長 黒 須 勉

例 言

1. 本書は、茨城県真壁郡明野町大字押尾及び大字有田地区で計画された、観音川流域県営ほ場整備事業にともない実施した埋蔵文化財発掘調査報告書である。
2. 埋蔵文化財発掘調査は、観音川流域県営ほ場整備事業地内に所在する下宮遺跡、有田北遺跡、有田東遺跡、有田東1号古墳の4遺跡を行った。
3. 下宮遺跡は茨城県真壁郡明野町大字押尾878番地外、有田北遺跡は同所大字有田313番地外、有田東遺跡は同所大字有田157番地外、有田東1号古墳は同所大字有田に所在する。
4. 埋蔵文化財発掘調査は、明野町教育委員会が主体となり、「明野町埋蔵文化財発掘調査会」が実施した。
5. 埋蔵文化財発掘調査は、下宮遺跡、有田北遺跡、有田東遺跡1次調査、有田東1号古墳の発掘調査を平成8年(1996)10月1日から12月7日まで、有田東遺跡2次調査を平成9年(1997)6月24日から7月4日まで実施した。
6. 発掘調査範囲は、ほ場整備事業地内の水路用地であり、幅2.4mの狭長な調査範囲である。
7. 発掘調査に係わる担当者は、渡邊久生が行った。
8. 本書に係わる遺物整理、執筆等は渡邊久生が担当して行った。
9. 発掘調査の出土遺物は、明野町教育委員会に一括して保管している。
10. 本報告書の図版縮尺は、遺構図を1:60、遺物図を1:3を基本としたが、必要に応じて縮尺を変更しているため、各図版には縮尺を明示しておく。
11. 遺構平面図中の「○印数字」は、遺物の図版遺物番号と出土位置を示す。
12. 遺物観察表のNo欄、「数字—数字」は図版番号と遺物番号を示す。
13. 発掘調査の実施にあたっては、押尾地区及び有田地区の皆様をはじめ、多くの方々に多大なるご協力、ご指導を頂いたことに深く感謝申し上げます。

14. 平成7年度から実施してきた観音川流域県営ほ場整備事業に係わる埋蔵文化財発掘調査も、本報告書の刊行をもって完了する運びとなりなした。3年間にわたり埋蔵文化財発掘調査にご理解とご協力いただいた方々のご氏名を記載し、あらためて感謝の意を表します。

明野町埋蔵文化財発掘調査会組織

会 長	黒 須 勉	明野町教育委員会	教育長
副会長	斉 藤 寛 弐	明野町文化財保護審議会	会長
理 事	成 田 勇 巳	明野町文化財保護審議会	副会長
〃	渡 邊 久 生	明野町埋蔵文化財発掘調査会	調査団長
〃	柴 敏 夫	観音川流域県営ほ場整備事業	
		I 期地区換地第一工区	工事委員長
〃	武 井 道 夫	観音川流域県営ほ場整備事業	
		I 期地区換地第一工区	換地委員長
〃	来 栖 若 佐	茨城県下館土地改良事務所	工務第一課長
〃	坂 入 文 主	明野町役場	産業課長
〃	古宇田 章	明野町教育委員会	教育次長兼いきいき学び課長
監 事	森 作 安 雄	茨城県下館土地改良事務所	次長兼総務課長
〃	酒 入 登	明野町収入役職務代理者	
事務局	尾 見 有 史	明野町教育委員会	いきいき学び課副参事兼課長補佐
	山 形 浩 之	〃	〃 係長 (平成9年3月転任)
	飯 島 ふじ江	〃	〃 係長 (平成9年4月新任)
	飯 村 正 成	〃	〃 主事

平成7年度、押尾古屋敷遺跡、矢尻遺跡、坪内遺跡発掘調査協力者 (敬称は略します。順不動)

諸 藤 時 一	渡 邊 忠 男	中 島 庄 一	中 島 一 郎	岡 野 七 郎
西 村 系 子	高 浜 のり子	豊 田 好 子	日 向 真 砂子	古 沢 とし
細 田 つや子	武 井 た か	武 井 幸 江	西 村 よ志乃	西 村 竹 子
飯 島 とめの				

平成8～9年度、下宮遺跡、有田北遺跡、有田東遺跡、有田1号古墳発掘調査協力者

日 向 真 砂子	豊 田 好 子	西 村 竹 子	飯 島 とめの	細 田 つや子
中 村 佳 子	高 島 ヨシ子	高 島 み よ	荒 井 時 江	柴 シゲ
柴 志げの	熊 倉 し つ	柴 久 江	熊 倉 き み	今 成 まさ子
坂 入 り ん	荒 井 祐 子	島 田 さ く	坂 入 伊 佐男	

目 次

序	
例言	
第一章	発掘調査に至る経過 1
第二章	発掘調査の経過と方法 2
I	発掘調査の経過 2
II	発掘調査の方法 3
第三章	遺跡の地理的環境 4
第四章	下宮遺跡の概要 7
第五章	遺構と出土遺物 8
I	住居跡 8
1.	1-1 住居跡 8
2.	1-2 住居跡 8
3.	1-3 住居跡 10
4.	1-4 住居跡 11
5.	1-5 住居跡 12
6.	1-7 住居跡 14
7.	1-8 住居跡 16
8.	1-9 住居跡 18
II	土 坑 22
III	溝 23
第六章	有田北、有田東遺跡の概要 24
第七章	有田北遺跡の遺構と出土遺物 27
I	住居跡 27
1.	1-4 住居跡 27
2.	1-5 住居跡 27
II	溝 28
1.	1-1 溝 28
2.	1-2 溝 29
3.	1-3 溝 30
4.	1-6 溝 31

第八章 有田東遺跡の遺構と出土遺物	33
I 住居跡	33
1. 1-7住居跡	33
2. 1-9住居跡	35
3. 2-1住居跡	35
4. 2-3住居跡	36
5. 2-5住居跡	37
6. 2-6住居跡	38
7. 2-7住居跡	40
8. 3-1住居跡	41
9. 4-5住居跡	41
10. 4-16住居跡	44
11. 4-18住居跡	44
12. 5-1住居跡	45
13. 5-2住居跡	45
14. 5-4住居跡	46
15. 5-8住居跡	47
II 土坑	49
1. 縄文時代の土坑	50
2. 古墳時代の土坑	50
3. その他の土坑	52
III 溝	52
1. 古墳の周濠	53
2. その他の溝	55
第九章 有田東1号墳	58
I 墳丘と周濠	59
1. 墳丘	59
2. 内部主体	59
3. 周濠	59
II 出土遺物	63
1. 円筒埴輪	63
2. 形象埴輪	63
3. 土師器	67
III その他の遺構	72
第十章 まとめ	73

挿図目次

第1図	周辺の遺跡	5	第40図	2-6住居跡	39
第2図	下宮遺跡	6	第41図	2-6カマド	39
第3図	下宮遺跡全測図	7	第42図	2-6出土遺物	40
第4図	1-1住居跡	8	第43図	2-7住居跡、2-8土坑	40
第5図	1-2住居跡	9	第44図	3-1住居跡	41
第6図	1-2カマド	9	第45図	4-5住居跡	41
第7図	1-3住居跡	10	第46図	4-5カマド	42
第8図	1-4住居跡	11	第47図	4-5出土遺物	43
第9図	1-4カマド	12	第48図	4-16住居跡、4-15土坑	43
第10図	1-5住居跡	13	第49図	4-18住居跡	44
第11図	1-5出土遺物	14	第50図	5-1住居跡	44
第12図	1-7住居跡	15	第51図	5-2カマド	45
第13図	1-7出土遺物	15	第52図	5-2出土遺物	46
第14図	1-8住居跡	16	第53図	5-2、4住居跡	46
第15図	1-8出土遺物	17	第54図	5-4出土遺物	47
第16図	1-9住居跡	18	第55図	5-4カマド	47
第17図	1-9炉	18	第56図	5-8住居跡	47
第18図	1-9出土遺物その1	21	第57図	5-8カマド	48
第19図	1-9出土遺物その2	22	第58図	5-8出土遺物	49
第20図	1-9出土遺物その3	22	第59図	2-4土坑	50
第21図	1-6、2-1土坑	23	第60図	5-1A出土遺物	50
第22図	有田北、有田東遺跡、 有田東1号墳	25	第61図	5-5、6遺構図	51
第23図	有田北遺跡全測図	26	第62図	5-7土坑	51
第24図	1-4住居跡	27	第63図	5-7出土遺物	51
第25図	1-5住居跡	28	第64図	3、4区土坑	53
第26図	1-5出土遺物	28	第65図	1-2、3溝	54
第27図	1-1溝	29	第66図	1-4溝	54
第28図	1-2溝	30	第67図	1-4出土遺物	55
第29図	1-2出土遺物	30	第68図	1-1溝	55
第30図	1-3溝	31	第69図	1、2、4区土坑と溝	56
第31図	1-6溝	31	第70図	4-13、14、19土坑と溝	57
第32図	有田東遺跡全測図	32	第71図	有田東1号墳	60
第33図	1-7住居跡	33	第72図	墳丘土層図	61
第34図	1-8~14遺構図	34	第73図	周濠土層図	62
第35図	1-9出土遺物	34	第74図	円筒埴輪	68
第36図	2-1住居跡	36	第75図	円筒埴輪	69
第37図	2-2土坑、2-3住居跡と炉	37	第76図	形象埴輪	70
第38図	2-5住居跡	38	第77図	土師器	71
第39図	2-5カマド	38	第78図	石塔、蔵骨器	72
			第79図	蔵骨器	72

第一章 発掘調査に至る経過

下宮遺跡、有田北遺跡、有田東遺跡及び有田東1号墳の発掘調査は、観音川流域県営ほ場整備事業に伴い実施されたものである。観音川流域県営ほ場整備事業は、平成7年度から数ヶ年度にわたる事業であり、ほ場整備対象となる農地面積も広大な事業である。観音川流域県営ほ場整備事業区域内には、押尾古屋敷遺跡、矢尻遺跡、坪内遺跡、下宮遺跡、有田北遺跡、有田東遺跡の6カ所の埋蔵文化財が知られ、有田東1号墳は平成8年度の確認調査によって発見された遺跡である。押尾古屋敷遺跡、矢尻遺跡及び坪内遺跡の3ヶ所の遺跡は平成8年(1996)1月～3月に発掘調査が行われ、平成9年(1997)3月に発掘調査報告書が刊行されている。

下宮遺跡、有田北遺跡、有田東遺跡、有田東1号墳は、平成8年10月1日～12月7日まで及び平成9年6月24日～7月4日までの2次に分けて発掘調査が行われた。

発掘調査に先だって、下宮遺跡、有田北遺跡及び有田東遺跡の所在確認等を目的とした確認調査を実施した。確認調査は耕作地の使用されていない時期を選び、平成8年1月10日～1月20日まで実施した。確認調査の成果は概ね次の通りである。但し遺構の調査は実施しておらず、遺構数等は推定された数字である。

下宮遺跡 7ヶ所のトレンチを設定して確認調査を実施し、住居跡約10ヶ所(重複を含む)、土坑約15ヶ所、溝約5ヶ所等の所在が推定された。遺跡の年代は、採取した遺物等から古墳時代～奈良・平安時代に至る集落跡であろう。遺物は土師器が主であり、須恵器も少量採取されている。

有田北遺跡 8ヶ所のトレンチを設定して確認調査を実施した。住居跡約5ヶ所(重複を含む)、土坑8ヶ所、溝10ヶ所等の所在が推定された。遺跡の年代は古墳時代から奈良・平安時代に営まれていた集落跡であると推測される。縄文式土器が数片採取されているが、縄文時代と推定される遺構は確認されていない。他の遺物は土師器が主であるが、その出土量は少ない。

有田東遺跡 9ヶ所のトレンチを設定して確認調査を実施した。住居跡20ヶ所(重複を含む)、土坑15ヶ所、溝7ヶ所等の所在を推定した。第4トレンチで検出された溝からは、埴輪破片が数片出土してこと、溝が湾曲していることなどから古墳の周濠と推定された。遺跡の年代は古墳時代から奈良・平安時代の集落跡であると推定される。出土遺物は土師器が主であり、須恵器、埴輪破片、縄文式土器等も発見されているが、出土量は少ない。

有田東1号墳 有田東遺跡の確認調査において、古墳の周濠と推定される溝が検出されたことから周辺の踏査を行なった。有田地区の北側を集落に沿って東西に延びる堤(旧堤防)が、不自然に屈曲した部分から数片の埴輪破片と、古墳の内部主体に使用されたと思われる切石を発見した。堤の屈曲部は、上部が平坦な座布団状の方形を呈しており、堤の形状とは異なっている。これらの現状から古墳である可能性が高いものと推定した。

以上のような確認調査の成果を踏まえて、関係各機関が埋蔵文化財の取り扱いについて協議を重ねた。協議は、茨城県教育庁文化課の指導のもと、観音川流域県営ほ場整備事業の主体者である茨城県下館土地改良事務所、明野町産業課、そして明野町教育委員会の関係各機関で行われた。協議は、埋蔵文化財の保存方法と、ほ場整備事業工事の施工方法についての協議に多くの時間をさいて行われた。協議に基づいて埋蔵文化財発掘調査の範囲及び時期並びに実施の方法等が決定された。観音川流

域県営ほ場整備事業区域は、全体の高低差が1～2m程の比較的平坦な地形であり、表土は比較的厚く約60～70cmを測る。また低地にはほ場整備区域外から土を搬入する工事計画を策定した。土の移動を極力抑える施工方法を実施することによって、埋蔵文化財への影響を極力少なくすることが可能であると考えられた。以上の理由から発掘調査範囲は、地表から深く掘削する水路用地部分に限定された。但し、有田東1号古墳は農道予定地内に所在しているために、発掘調査を実施するはこびとなった。

発掘調査は明野町教育委員会が調査主体者となり、観音川流域県営ほ場整備事業関係各機関及び関係者による「明野町埋蔵文化財発掘調査会」を設立して発掘調査を実施することとなった。発掘調査は関係各位の御協力を得て、平成8年(1996)10月1日から12月7日までと平成9年(1997)6月24日から7月4日に分けて実施された。

第二章 発掘調査の経過と方法

I 発掘調査の経過

下宮遺跡、有田北遺跡、有田東遺跡1次調査及び有田東1号墳の発掘調査は、平成8年10月1日から12月7日まで、有田東遺跡2次調査は平成9年6月24日から7月4日まで実施された。

10月1日 発掘調査開始にあたり、作業開始上の諸注意等を行い、有田東1号墳の草刈りから作業に着手する。天候が悪く下宮遺跡、有田北遺跡及び有田東遺跡の調査区域を確定する作業や表土掘削作業は延期する。

10月2日 有田東1号墳に交差するトレンチを設定し、東から1～4トレンチと称する。トレンチの掘削に着手する。1～3トレンチで古墳の周濠を確認し、墳丘からは板状の風化した御影石を検出する。周濠からは埴輪片が多数出土する。

10月7日 周濠の調査は湧き水のため中断し、墳丘南部を掘り下げる。近世の石塔に使用された石等を検出するが、内部主体と推定される遺構は確認できなかった。

10月9日 有田東1号墳の調査を中断し、下宮遺跡、有田北遺跡、有田東遺跡の調査区域を確定するとともに、パワーショベルを用いて表土の掘削作業を行う。有田東1号墳は周濠の全体を調査するために周濠部分の表土を掘削した。

10月12日 有田東1号墳の調査を再開する。調査前に関東地方を直撃した台風の影響を受け、湧き水が多く周濠がプール状態になる。有田東1号墳の調査は中断し、水位が下がるのを待つこととする。

10月14日 下宮遺跡の調査に着手する。8ヶ所の住居跡等を確認し、調査区域の東から遺構調査を行う。天候にも恵まれ調査は順調に進行した。

10月24日 下宮遺跡1－9号住居跡は、炭化材が多く検出されるとともに、出土遺物が多く発見されている。1－9住居跡は焼失住居と考えられる。下宮遺跡の空中写真測量を行い、本遺跡の発掘調査は完了した。

10月28日 有田東1号墳の調査を再開する。古墳周濠の確認調査から再開した。周濠東部には規模の大きな溝が南北に走っており、周濠の大半が切られているようである。

11月13日 パワーショベルを用いて、古墳の北側水田を掘削する。水田の表土下から周濠が検出さ

れ、周濠の全体を確認することができた。墳丘に土層観察用のベルトを残して調査したが、古墳に係わる内部主体等の施設は確認できなかった。墳丘からは石塔礎石や蔵骨器が発見された。

11月15日 有田東1号墳北部周濠は湧水のため作業を中断せざるを得ず、有田北遺跡の調査に着手する。有田北遺跡は調査区の中央部で屈曲しているため、調査区東を1区、西を2区と呼称した。有田北遺跡は検出された遺構数が少なく、住居跡2ヶ所、土坑3ヶ所と溝状遺構4ヶ所である。溝状遺構は湧水の影響を受け、調査は困難であった。

11月20日 有田北遺跡の湧水が引けるのを待つ間、有田東遺跡の調査に着手する。有田東遺跡は調査区域内に使用している農地が点在しているため、1次調査と2次調査に分けて発掘調査を行った。1次調査区域は「L」字形に屈曲し、農道等によって分断されているので、1～3区に分けて調査を実施した。調査区1区では、住居跡、溝状遺構、土坑等14ヶ所の遺構を調査した。

11月25日 調査区1区の遺構写真撮影、遺物取り上げを行い、調査区2区の調査を開始する。10ヶ所の遺構を検出する。遺構の掘り込みは浅く、出土遺物も少ないために調査は順調に進行した。調査区3区はほとんど遺構はなく、3区の西に土坑と住居跡の一部を確認した。

11月26日 作業班を2つに分けて、有田東1号墳周濠調査と有田東遺跡1、2区の土層実測及び遺物取り上げの作業を行う。

11月29日 有田東遺跡2、3区の写真撮影とカマド等の調査をし、有田東遺跡1次調査は完了する。

12月2日 有田東1号墳、有田北遺跡の写真撮影を行う。

12月4日 空中写真撮影を行い、各遺跡の発掘調査を完了する。

平成9年6月24日 有田東遺跡2次調査を開始する。2次調査は分割された未調査部分の4～5調査区の調査を行う。調査区域の確認とパワーショベルによる表土掘削作業から着手する。

6月25日 調査区4区の調査に着手する。3ヶ所の住居跡、数カ所の土坑と溝状遺構を調査する。

7月1日 調査区5区の調査に着手する。5区からは5ヶ所の住居跡を検出する。カマド調査、写真撮影等を行う。

7月4日 空中写真を撮影し、すべての発掘調査を完了する。

Ⅱ 発掘調査の方法

観音川流域県営ほ場整備事業区域の水路用地（幅約2.4m）に限定された狭長な範囲であり、遺構の全容を把握することは困難な状況下での発掘調査であった。

発掘調査区域の表土掘削はパワーショベルに法面バケットを装着して行い、遺構の確認作業から人手による作業を行った。遺構番号は遺跡各調査区毎に通し番号で呼称した。発掘調査は各遺構に1～2本の土層観察用ベルトを設定することを基本とし、調査区両側の境界部壁の土層観察も考慮した。遺構内出土遺物は出土位置等を記録して取り上げるとともに、必要に応じて遺物出土状況微細図を作成した。カマドは原則として「キ」印に土層観察用ベルトを残し、カマドの構築方法等を観察することとした。発掘調査の測量は、調査区域内に設定した基本杭（約20mピッチ、公共座標、水準値を設置）を利用し、光波測距儀とデータコレクターを使用して行った。遺構の平面図等は、空中写真測量を活用することとし、その他土層図や遺物出土状況微細図等は現地にて実測した。

第三章 遺跡の地理的環境

下宮遺跡は茨城県真壁郡明野町大字押尾地内に、有田北遺跡、有田東遺跡及び有田東1号墳は明野町大字有田地内に所在する。

明野町は茨城県の南部、関東平野を一望する筑波山の西に位置し、西を利根川へ流入する小貝川、東を霞ヶ浦へ流入する桜川に挟まれた丘陵上に所在する。町の東と西を南流する小貝川や桜川に並行して、低地と丘陵地帯が交互に南北に走る。市街地や農耕地が広がる丘陵と、水田が開ける低地とが交互に展開し、標高20～38mを測る緩やかに起伏を持つ地形を呈している。

遺跡は明野町市街地から約2km東方に位置し、筑波山の麓を南流する桜川西岸に所在する。遺跡は、周囲を水田地帯（標高約23mの低地）に囲まれた微高地上（標高約25m）に所在する。南北に延びる丘陵（標高約38m）の南端から派生した微高地は、桜川と観音川の合流点に向かい南へと延びている。各遺跡は、この微高地先端部に形成された独立した台地状の微高地上に所在している。微高地は耕作地として活用されていることもあり、極めて平坦な地形を形成している。

下宮遺跡 遺跡は標高約25mを測る微高地に所在する。微高地は東を桜川に、西は観音川に面し、北と南は観音川から派生した低地が深く入り込んでいる。微高地は西に突出した小さな舌状台地の様相を呈している。微高地の東部で、有田東遺跡や有田北遺跡等が営まれている微高地と、大きく湾曲しながら連続している。

微高地の中央部はやや高くなり、周囲の低地に向かい緩やかに斜面している。中央部の最も高い場所に墓地が営まれている。今回発掘調査の対象となった場所は、微高地の緩やかな南斜面である。

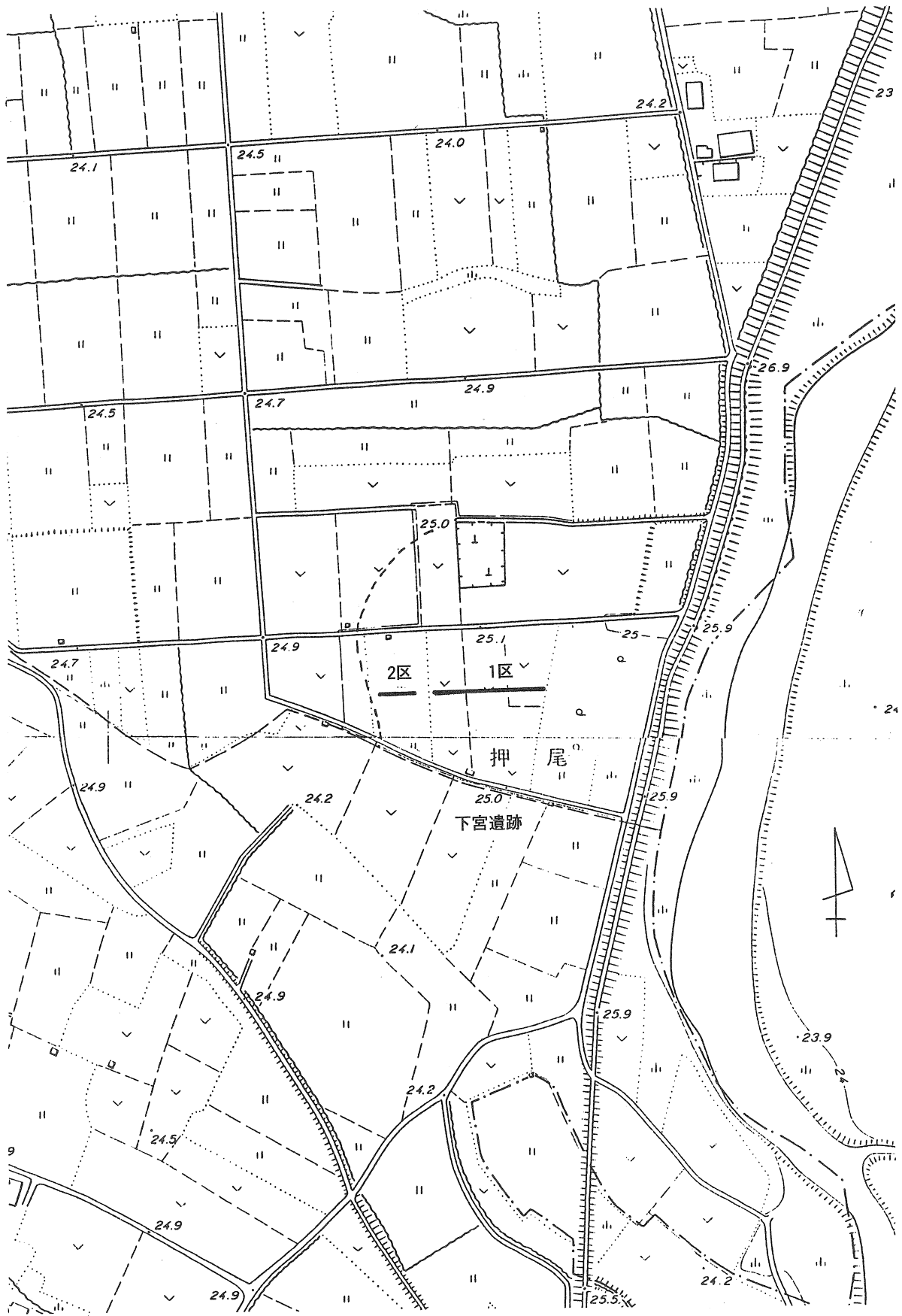
有田北遺跡、有田東遺跡、有田東1号墳 下宮遺跡の南対岸、標高約24～25mを測る平坦な微高地に3ヶ所の遺跡は所在している。微高地の北部に有田北遺跡、微高地の東部に有田東遺跡と有田東1号墳が営まれている。微高地は東を桜川に、西を観音川に、南を桜川と観音川の合流点に、北を東に湾曲して入り込んだ低地に囲まれた独立台地状となっている。桜川堤防は、有田東遺跡等が営まれている微高地の東部を南北に縦断して造られており、微高地は桜川の河川敷にまで広がっている。

表一 周辺の主な遺跡（明野町埋蔵文化財一覧から）

No.	遺跡名	備考	No.	遺跡名	備考	No.	遺跡名	備考	No.	遺跡名	備考
12	中妻遺跡	縄文～中世	41	西後遺跡	古墳～中世	51	陳場遺跡	古墳～中世	61	下宮遺跡	弥生～古墳
14	宮山古墳群	円墳5基	42	新田遺跡	古墳～中世	52	犬馬場遺跡	縄文～平安	76	稲荷塚古墳	方形
15	宮山遺跡	縄文～中世	43	宮後東原遺跡	古墳～中世	53	裕西遺跡	古墳～中世	79	海老が島東原遺跡	古墳～中世
16	海老が島城跡	室町時代	44	天神遺跡	縄文～古墳	54	向台遺跡	古墳～中世	80	館野遺跡	縄文～中世
19	宮山観音古墳	前方後円墳	46	猫内遺跡	古墳～中世	55	裕西南遺跡	古墳～中世	81	赤町遺跡	古墳～中世
34	八坂神社古墳	円墳	47	原山遺跡	古墳～中世	57	山合遺跡	中世	82	有田西遺跡	古墳～平安
35	猫手前遺跡	古墳～中世	48	宮後金井遺跡	古墳～中世	58	矢尻遺跡	古墳～中世	83	有田北遺跡	古墳～中世
38	上ノ台遺跡	古墳～中世	49	駒込遺跡	縄文～古墳	59	坪内遺跡	古墳～中世	84	有田東遺跡	弥生～古墳
39	光御堂遺跡	縄文～中世	50	駒込古墳群	円墳2基	60	押尾古屋敷遺跡	古墳～中世			



第1図 周辺の遺跡



第2図 下宮遺跡 (1 : 2500)

第四章 下宮遺跡の概要

下宮遺跡は、茨城県真壁郡明野町大字押尾878番地外に所在する。

遺跡は微高地上に広範囲に営まれている。微高地は、東を桜川堤防を越えて桜川の河川敷にまで達し、北と南は瘦せた谷が東方へ深く入り込んでいる。微高地は、西方に突出した舌状の台地を形成している。微高地は標高24.5～25mを測り、微高地中央部が僅かに高く、周辺部に向かい緩やかな傾斜を有している。微高地の周囲は、約1mの落差をもって低地へと移行している。

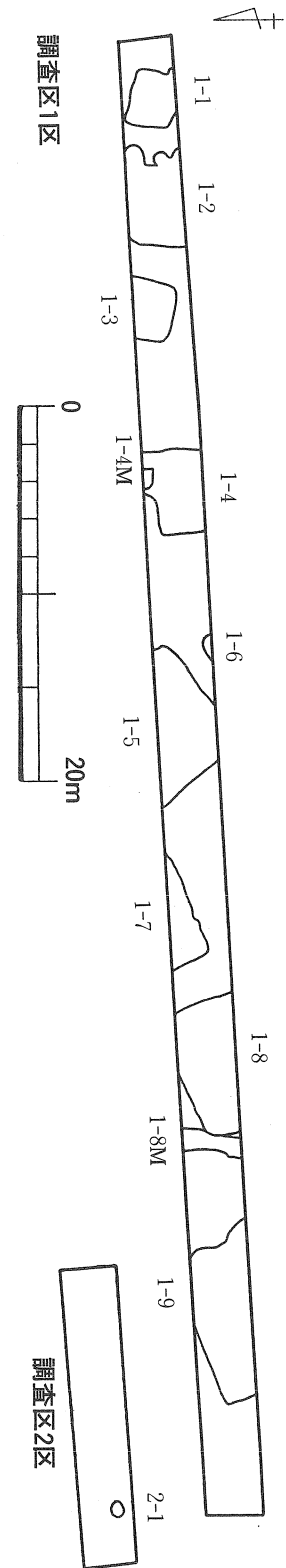
微高地の基本的な土層は、25cm程の耕作土、約20cmの暗褐色土、10cm程の褐色土そしてローム層へと移行している。ローム層の下層は黄褐色粘土層となっている。微高地の北西部は地山（ローム層）が比較的急な傾斜を持って西方に落ち込み、1～1.5m程の厚い黒色土が堆積している。

発掘調査は微高地の南側緩斜面を実施した。ほ場整備事業の水路予定地に限定された調査範囲であり、東西方向に延びる幅2.4m、全長約97mの狭長な範囲である。従って、下宮遺跡の全容はもとより遺構の全体を知ることも困難であった。

微高地には数カ所の土を採取した農地が見られるが、調査区内にも土を採取した農地が所在する。調査区を採土跡地を境にして東と西に分け、東を調査区1区、西を調査区2区と呼称した。調査区1区は全80m長、面積192㎡、調査区2区は全長17m、面積41㎡である。

発掘調査によって確認された遺構の大半が調査区1区に所在する。調査区1区から住居跡8ヶ所、土坑3ヶ所、溝2条が検出されている。住居跡の中で炉を有する住居跡が1ヶ所、カマドを有する住居跡が2ヶ所であり、他の5ヶ所の住居跡は不明である。住居跡は形状や出土遺物等から、古墳時代前期～奈良・平安時代に想定されるであろう。溝が構築された時期は明瞭ではないが、住居を切って溝が掘り込まれており、住居よりも新しいことは明らかである。土坑が造られた時期は不明である。出土遺物はすべて住居跡からであり、1-5、8、9住居跡出土遺物が大半を占める。出土遺物は土師器が主体であり、須恵器等は極めて少ない。1-9住居跡からは土師器とともに、土玉等が10点出土している。1-9住居跡は多量の炭化材等が検出されており、焼失住居であろう。

調査区2区は耕作等による攪乱を多く受けており、土坑1ヶ所を確認したにすぎない。調査区2区から遺物は出土していない。



第3図 下宮遺跡全測図

第五章 遺構と出土遺物

I 住居跡

1. 1-1住居跡 (第4図)

住居跡は調査区1区の最も東に位置する。住居跡南部に攪乱を受けているが、住居跡の大半を調査できた数少ない住居跡である。

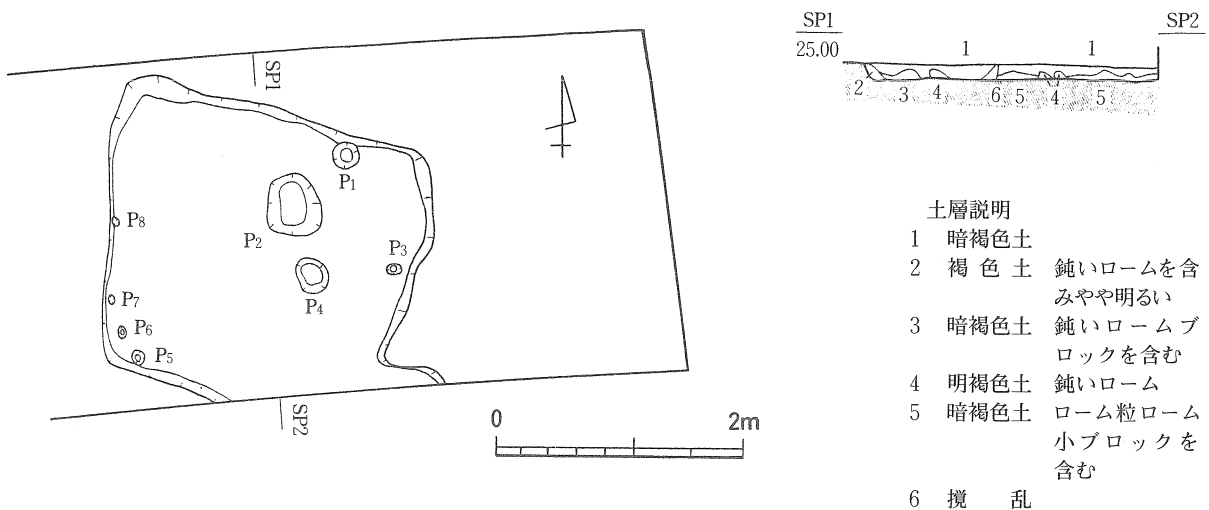
形状 東西2.7m、南北2.3m、掘り込みの深さ22cmを測り、平面形は方形を呈する。主軸方向はN-73°-Wである。床は平坦であるが、やや軟弱な床である。壁は直立する。壁周堀は確認できなかったが、壁柱穴と推定される小ピットが南西コーナー部等から5ヶ所で検出された。小ピットの形状は円形を呈し、規模は径10~15cm、深さ5~10cmである。ピットは3ヶ所で検出されているが、柱穴と推定されるピットは不明である。カマド等は検出できなかったが、住居跡南東部の覆土中に焼土が観察されており、住居跡南東壁にカマドが設置されていた可能性が考えられる。

出土遺物 本住居跡からは9片の土師器小破片が出土しているが、図示できる遺物は出土していない。

1-1住居跡ピット一覧表

(単位=cm)

No.	径	深	形状	備考	No.	径	深	形状	備考	No.	径	深	形状	備考
1	25×25	16	円形		2	48×52	9	方形		3	14×10	12	楕円	
4	28×32	16	楕円	壁柱穴	5	15×14	10	円形	壁柱穴	6	10×12	10	円形	壁柱穴
7	8×10	10	円形	壁柱穴	8	10×10	4	円形	壁柱穴					



第4図 1-1住居跡 (1:60)

2. 1-2住居跡 (第5図)

調査区1区の東側に位置する住居跡である。住居跡北東部と南東部に攪乱を受けている。住居跡南部は調査区域外となっており、住居跡の北部約2/3を調査したものである。

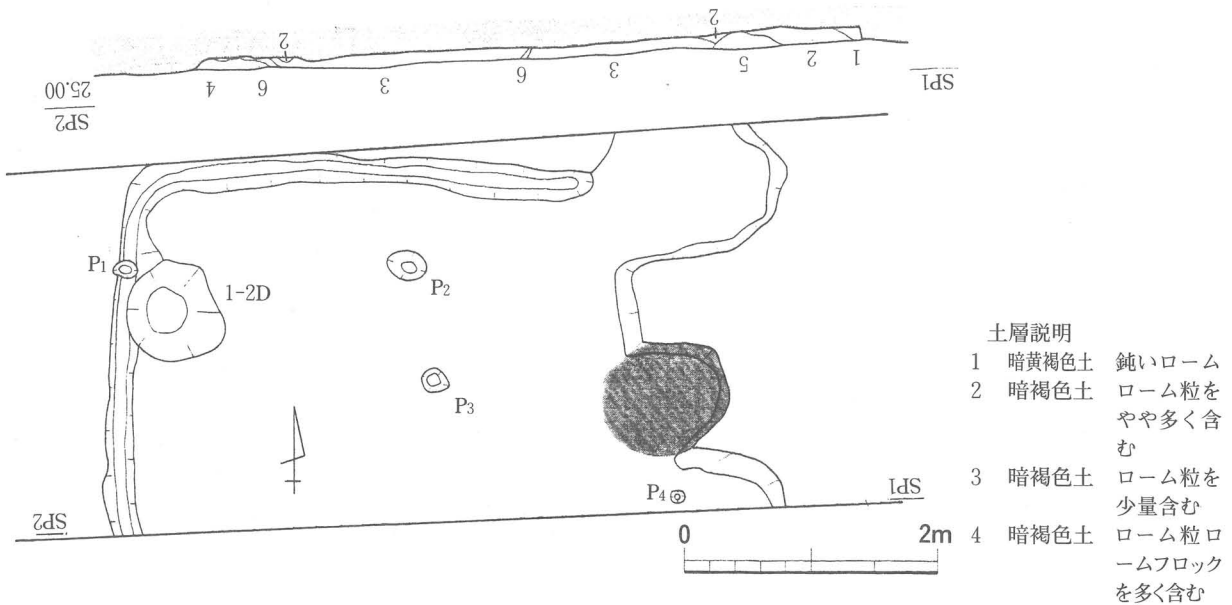
形状 東西4.15m、南北2.8mまで調査した。掘り込みの深さは8cmとやや浅い。平面形は方形を呈し、主軸方向はN-89°-Eである。床は平坦であり、住居跡の中央部からカマド付近は良好に踏

み固められた堅緻な床が観察された。壁は直立する。壁周堀は北と西壁に沿って幅約25cm、深さ約10cmの規模で検出されている。ピットは4ヶ所で検出されているが、支柱穴と推定されるピットは不明である。1-2Dは住居跡の床を切って造られている。

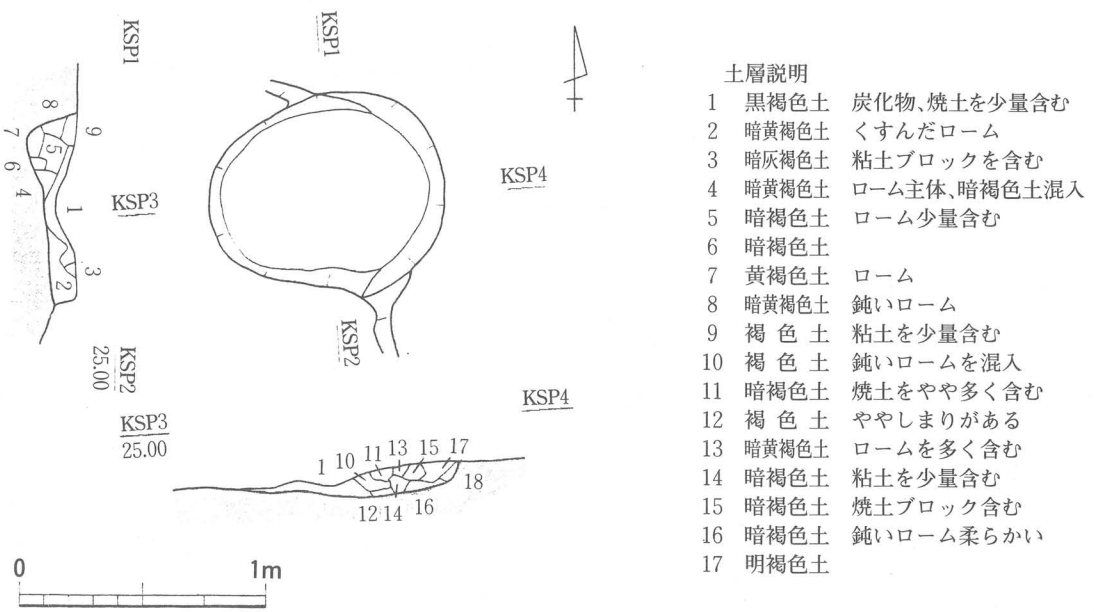
1-2 住居跡ピット一覧表

(単位=cm)

No.	径	深	形状	備考	No.	径	深	形状	備考	No.	径	深	形状	備考
1	20×15	15	楕円		2	32×22	20	楕円		3	28×18	17	楕円	
4	19×11	19	円形											

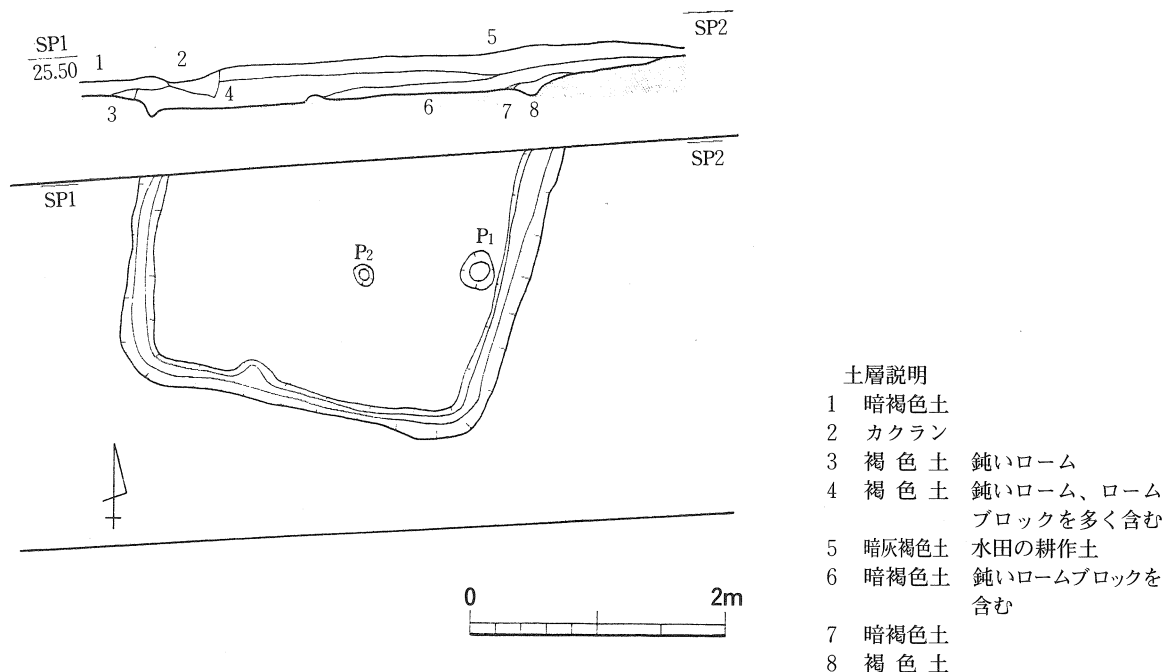


第5図 1-2 住居跡 (1:60)



第6図 1-2 カマド (1:30)

カマド（第6図） 住居跡東壁のほぼ中央部に位置し、東壁に直交して構築されている。カマドの南部は攪乱を受けている。カマドは粘土を構築材として使用しているが、観察される粘土の量は少ない。カマドの保存状態は不良である。カマドの規模は、奥行き96cm、幅84cm、東壁の掘り込みは65cmを測る。燃烧部は住居跡の床から8cm掘り下げ、平坦に煙導部へ至り、煙導部先端で急な立ち上がりを示す。出土遺物 本住居跡からは54片の土師器破片が出土しているが、すべてが小破片であり、図示できる遺物は出土していない。



第7図 1-3住居跡（1：60）

3. 1-3住居跡（第7図）

調査区1区の東部に位置する住居跡である。住居跡の北部は調査区域外であるため、南部約2/3を調査したものである。

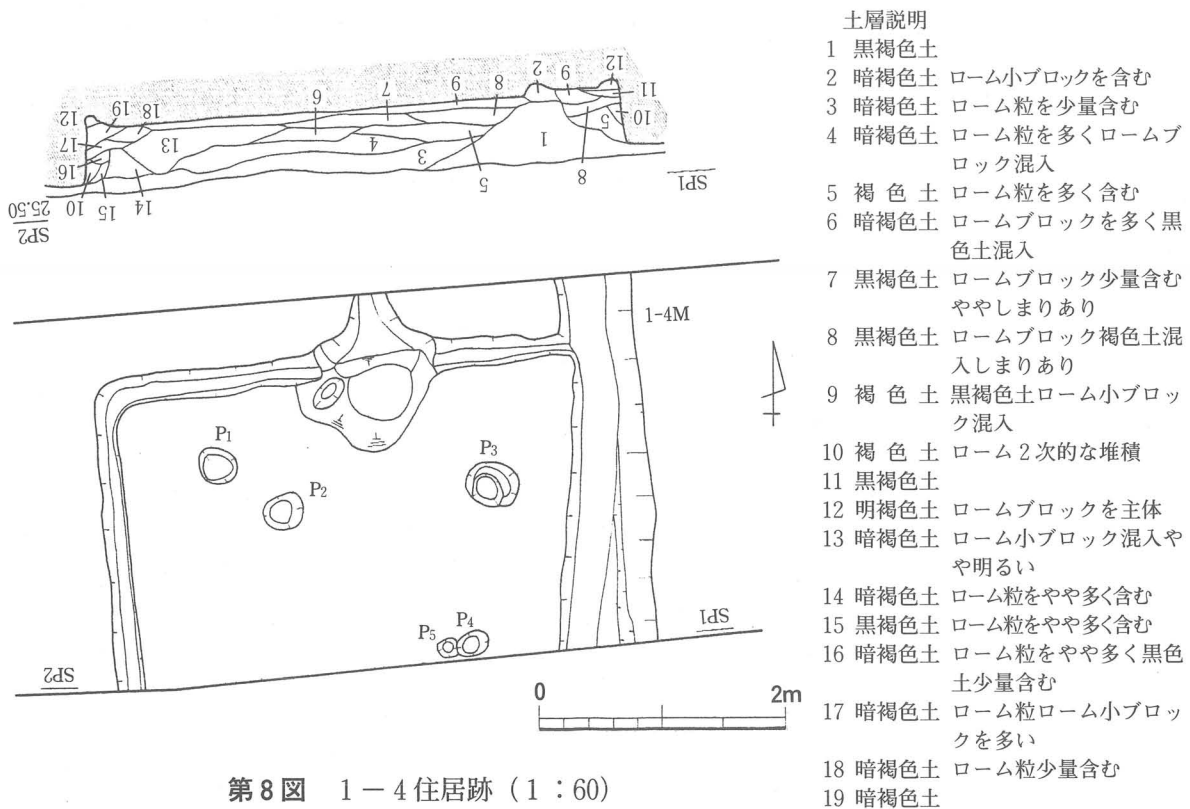
形状 東西3.05m、南北2.35mまで調査し、掘り込みの深さは18cmを測る。平面形は方形を呈し、主軸方向はN-8°-Eである。床は平坦な貼り床であり、良く踏み固められた良好な保存状態である。壁は直立し、壁に沿って壁周堀が幅27~32cm、深さ約5cmの規模で検出された。壁周堀は住居跡を全周するものと推定される。ピットは2ヶ所で検出されているが、柱穴と推定されるピットは確認できなかった。カマド等は検出できなかった。

出土遺物 本住居跡からは12片の土師器破片が出土しているが、いずれも小破片であり、図示できる遺物は発見されていない。

1-3住居跡ピット一覧表

（単位＝cm）

No.	径	深	形状	備考	No.	径	深	形状	備考	No.	径	深	形状	備考
1	27×32	17	円形		2	16×15	27	円形						



第8図 1-4住居跡 (1:60)

- 土層説明
- 1 黒褐色土
 - 2 暗褐色土 ローム小ブロックを含む
 - 3 暗褐色土 ローム粒を少量含む
 - 4 暗褐色土 ローム粒を多くロームブロック混入
 - 5 褐色土 ローム粒を多く含む
 - 6 暗褐色土 ロームブロックを多く黒色土混入
 - 7 黒褐色土 ロームブロック少量含む ややしまりあり
 - 8 黒褐色土 ロームブロック褐色土混入しまりあり
 - 9 褐色土 黒褐色土ローム小ブロック混入
 - 10 褐色土 ローム2次的な堆積
 - 11 黒褐色土
 - 12 明褐色土 ロームブロックを主体
 - 13 暗褐色土 ローム小ブロック混入やや明るい
 - 14 暗褐色土 ローム粒をやや多く含む
 - 15 黒褐色土 ローム粒をやや多く含む
 - 16 暗褐色土 ローム粒をやや多く黒色土少量含む
 - 17 暗褐色土 ローム粒ローム小ブロックを多い
 - 18 暗褐色土 ローム粒少量含む
 - 19 暗褐色土

4. 1-4住居跡 (第8図)

調査区1区の東部に位置する。住居跡の南部は調査区域外となっており、住居跡北部約2/3を調査した。住居跡の東部は南北に延びる溝(1-4M)によって切られている。

形状 東西4.43m、南北2.54mまで、掘り込みの深さは40cmを測る。平面形は方形を呈し、主軸方向はN-8°-Wである。床は平坦であり、良好に踏み固められている。壁は直立し、壁に沿って壁周堀が巡っている。壁周堀は住居を一周すると推定される。壁周堀の規模は幅12cm、深さ約10cmを測る。ピットは5ヶ所で検出されており、ピットの位置等から、P2~P3が主柱穴として利用されたと推定される。本住居跡の覆土は、暗褐色土に多量のロームブロックを混入しており、特異な様相を呈している。かつて住居跡が調査され埋め戻されたような印象を抱いたが、堆積状態は自然の堆積を示している。どのような状況のもとで多量のロームブロックが覆土に混入したかは明瞭ではない。

1-4住居跡ピット一覧表

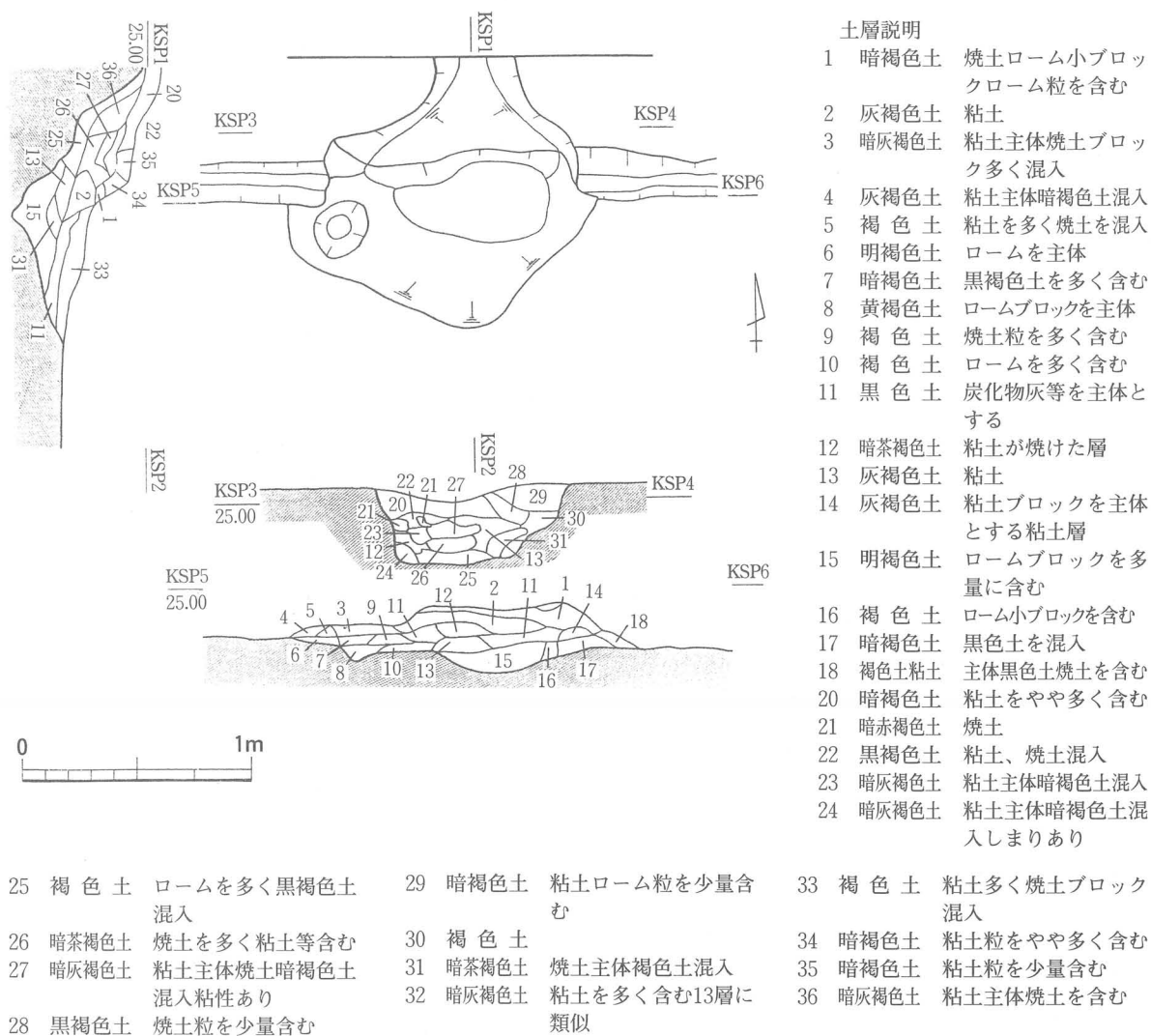
(単位=cm)

No.	径	深	形状	備考	No.	径	深	形状	備考	No.	径	深	形状	備考
1	30×30	30	楕円		2	30×30	28	円形	主柱穴	3	41×37	24	円形	主柱穴
4	25×22	7	楕円		5	15×15	5	円形						

カマド (第9図) 住居跡北壁中央部に位置し、北壁に直交して構築されている。カマドの規模は奥行き118cm、幅105cmまで測る。煙導部は北壁を45cmほど穿ち、その先端は調査区域外まで延びている。燃烧部は床から20cmほど掘り下げ、中段にテラス状の平坦部を有しながら、急激な傾斜を持って煙導部へと移行している。カマドの構築材には粘土を多量に用いており、袖部や天井部等が明確に観察さ

れる。焼土等も多く残存しており、カマドの保存状態は良好である。カマド周辺から土師器の小破片が数点出土している。

出土遺物 本住居跡からは43片の土師器破片が出土しているが、いずれも小破片であり図示できる遺物は出土していない。



第9図 1-4カマド (1:30)

5. 1-5住居跡 (第10図)

調査区1区の中央部に位置する住居跡である。住居跡の北部及び南コーナー部は調査区域外となっており、住居跡の1/3を調査したものである。

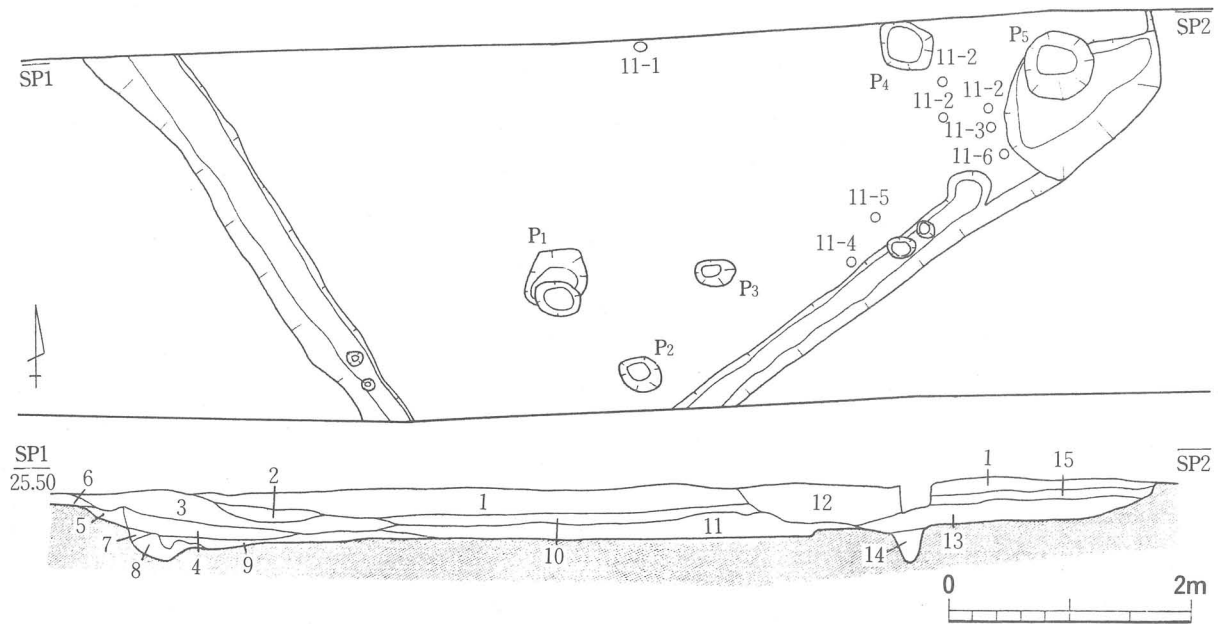
形状 東西6.75m、南北3.95mまで測る。平面形は方形を呈し、掘り込みの深さは50cm、主軸方向はN-55°-Eを示す。床は平坦であり、全体に良好な保存状態であるが、東側が特に良く踏み固められた堅緻な床となっている。壁は直立する。壁周堀は南西壁と南東壁に沿って検出されているが、

南東壁に沿った壁周堀は、北東コーナー部付近で切れている。壁周堀の規模は幅20~35cm深さ5~10cmである。壁周堀の中に径20~40cm深さ5~15cmほどの壁柱穴と推定される小ピットが、4ヶ所で検出されている。ピットは5ヶ所で発見されているが、その形状等からP1とP4が主柱穴、P5が貯蔵穴であると推定される。P1は円形の柱穴に、柱を抜くために掘り込まれたと思われる方形のピット(P1b)が観察される。P5の周囲は、帯状に僅かに高くなった凸帯に囲まれており、貯蔵穴としての特長を有するピットである。P5の上面には粘土がブロック状に堆積していた。本住居跡に伴うカマド等の位置や形状については不明であるが、住居跡北東コーナー部の粘土堆積や、貯蔵穴と推定されるP5の位置などから、北東壁を穿ってカマド等が設置されていると推定される。

1-5住居跡ピット一覧表

(単位=cm)

No.	径	深	形状	備考	No.	径	深	形状	備考	No.	径	深	形状	備考
1a	30×30	30	円形	主柱穴	1b	40×50	10	方形		2	25×30	18	楕円	
3	32×21	21	楕円		4	45×40	52	方形	主柱穴	5	58×55	60	円形	貯蔵穴



土層説明

- | | | |
|---------|---------|----------------------|
| 1 暗褐色土 | 2 暗褐色土 | ロームブロックをやや多く含む |
| 3 暗褐色土 | 4 暗褐色土 | ローム粒を多量に含みやや明るい |
| 5 褐色土 | 6 暗褐色土 | 耕作土 |
| 7 暗褐色土 | 8 暗黄褐色土 | ロームブロック主体、黒色土混入しまりあり |
| 9 暗褐色土 | 10 暗褐色土 | ローム粒を含む |
| 11 褐色土 | 12 暗褐色土 | |
| 13 褐色土 | 14 褐色土 | |
| 15 暗褐色土 | | ローム粒を少量含む |

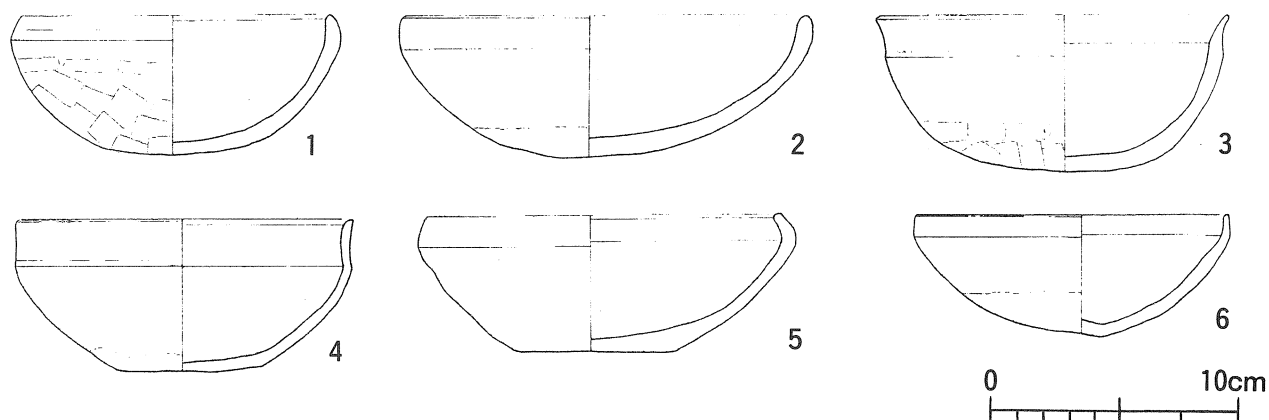
第10図 1-5住居跡 (1:60)

出土遺物(第11図) 本住居跡からは約60点の遺物が出土している。出土遺物は土師器の破片が多く、須恵器はほとんど発見されていない。図示した出土遺物はすべて環形土器である。

表-2 1-5 住居跡出土遺物観察表

(単位=cm)

No	器種	法量	形態・成形手法	調整方法	胎土・色調	備考
11-1	土師器 坏	口径 12.0 器高 5.6		口縁、内面ヨコナデ 胴部ヘラ削り	小石を多く、雲母を少量含む 内面褐色、外面橙褐色	焼成は良
11-2	土師器 坏	口径 16.4 器高 5.8	口縁部に歪み 器表面に凹凸有り	口縁部から胴部ヨコナデ 内面、底部ヘラ磨き	小石を多く、雲母を少量含む 色調は橙褐色	焼成は良
11-3	土師器 坏	口径 14.2 器高 6.2	口縁部僅かに外反 する	口縁部指頭によるナデ 底部ヘラ削り	小石を多く、雲母を少量含む 色調は橙褐色	1/2欠損 焼成は良
11-4	土師器 坏	口径 13.7 器高 6.1	口縁部僅かに外反 しながら直立す る。底部は平底	口縁部から胴部はナデ 底部はヘラによるナデ	小石を多く含む 内面橙褐色・黒褐色、外面 橙褐色	小石を多く含む。 焼成やや良全体に 摩耗する
11-5	土師器 坏	口径 14.4 器高 5.6	口縁部内湾する 底部は平底	口縁部内面指頭によるナデ、 口縁から胴部はナデ、胴部下 半底部ヘラミガキ	小石を多く、雲母を少量含む 色調は明褐色	焼成は良
11-6	土師器 坏	口径 12.9 器高 4.8	口縁部は小さく直 立する	口縁部内面指頭によるナデ、 胴部上半はナデ、胴部下半底 部ヘラ削り後ヘラミガキ	小石を多く、雲母を少量含む 色調は明橙褐色	焼成は良 2/3欠損



第11図 1-5 出土遺物 (1:3)

6. 1-7 住居跡 (第12図)

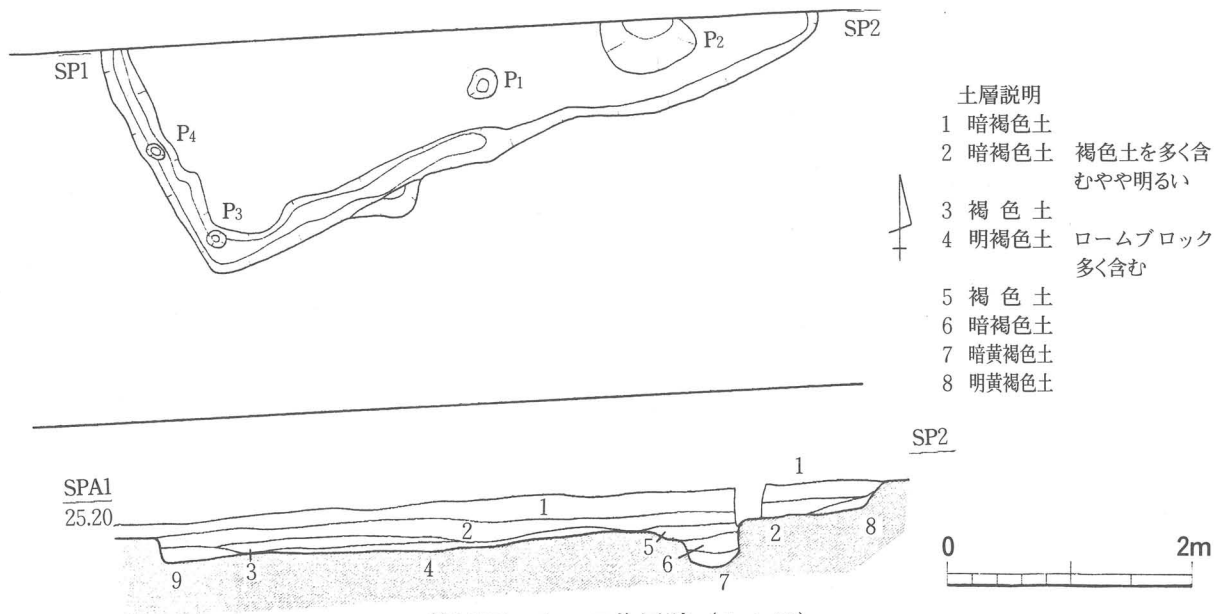
調査区1区の中央部に位置する。住居跡北部の大半が調査区域外になり、住居跡南部約1/4が調査可能であった。

形状 東西5.33m、南北1.85mまで、掘り込みの深さは約10cmを測る。平面形は方形を呈し、主軸方向はN-69°-Eである。床は平坦であり、比較的良好に踏み固められている。住居跡西及び南壁に少量の焼土がブロック状に堆積しているのが観察される。南壁には粘土がブロック状に堆積している。壁は直立する。壁周堀は西壁と南壁の中央部まで検出される。壁周堀は幅25cm深さ10~13cmの規模で巡り、壁柱穴と推定される小ピットが2ヶ所で発見されている。ピットは2ヶ所で検出された。P2は南東コーナーに位置し、ピットの規模や、覆土中より坏形土器が出土している事などから、貯蔵穴として利用したピットと推察される。住居跡に伴うカマド等の位置については明瞭ではないが、貯蔵穴と思われるP2の所在等から、住居跡北東壁にカマドは穿たれているものと思われる。

1-7住居跡ピット一覧表

(単位=cm)

No.	径	深	形状	備考	No.	径	深	形状	備考	No.	径	深	形状	備考
1	24×23	28	円形	柱穴	2	77×40	33	方形	貯蔵穴	3	12×18	17	円形	壁柱穴
4	17×13	16	円形	壁柱穴										



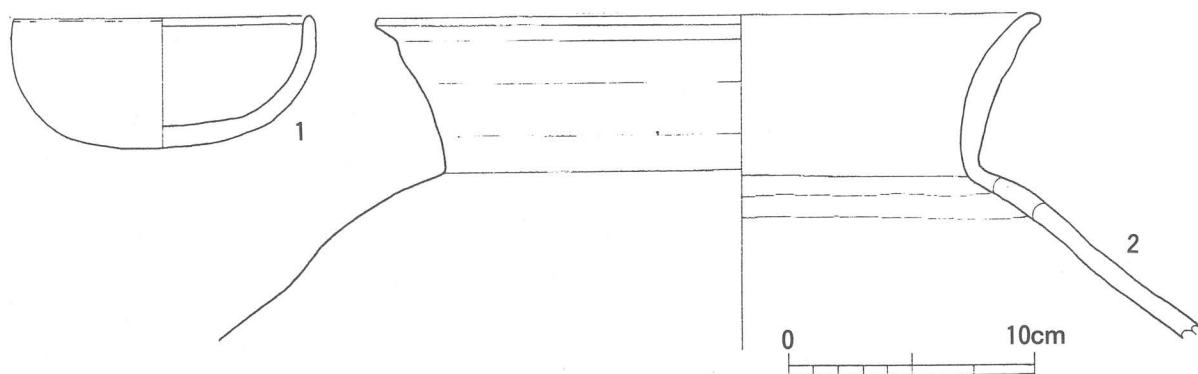
第12図 1-7住居跡 (1:60)

出土遺物(第13図) 本住居跡からは19点の土師器破片が出土している。図示した遺物は、坏形土器と大型の壺形土器である。

表-3 1-7住居跡出土遺物観察表

(単位=cm)

No.	器種	法量	形態・成形手法	調整方法	胎土・色調	備考
13-1	土師器 坏	口径 12.4 器高 5.3		口縁、内面ヨコナデ 胴部から底部へラ磨き	小石を多く、雲母を少量含む 色調は橙褐色	焼成は良
13-2	土師器 壺	口径 26.4 器高 -	胴部内面に輪積痕 が観察される。	口縁部ヨコナデ	小石を多く、雲母を少量含む 色調は褐色	焼成は良 口縁部1/2欠損



第13図 1-7出土遺物 (1:3)

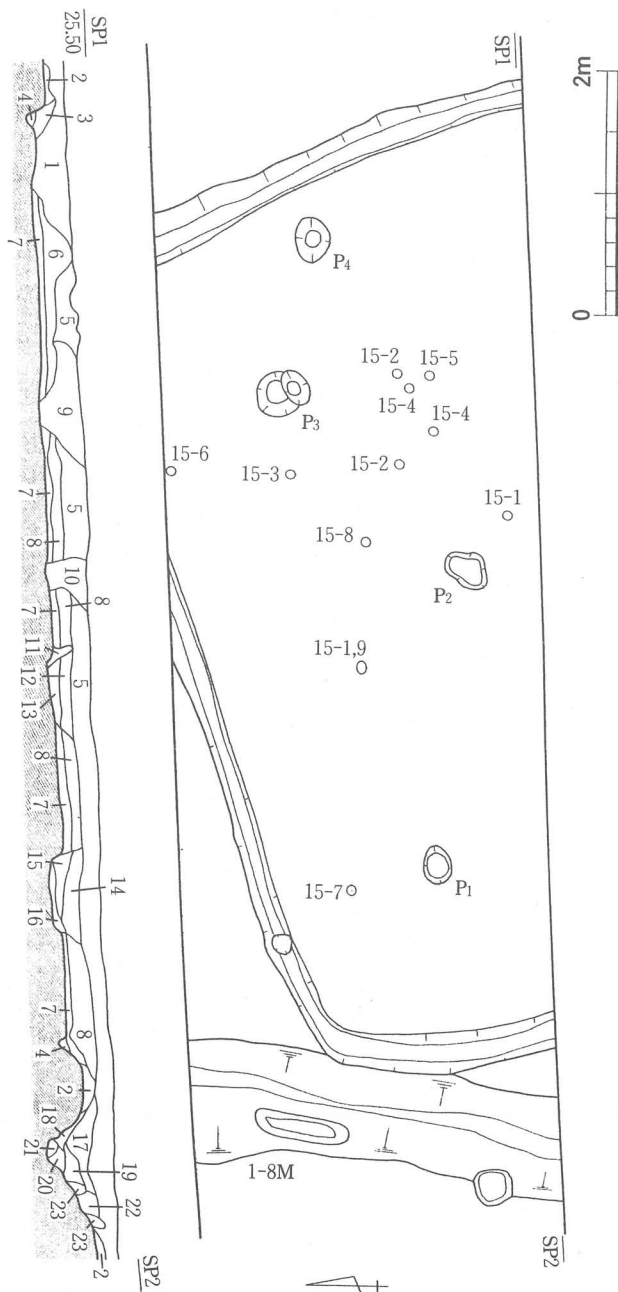
7. 1-8住居跡 (第14図)

調査区1区南側に位置する。住居跡北東コーナー部と南部が調査区域外となり、住居跡の北側約1/4を調査したものである。住居跡北西コーナー部は、南北に走る溝(1-8M)と接している。

形状 東西7.06m、南北3.20mまで測る。平面形は方形を呈し、掘り込みの深さは13cm、主軸方向はN-68°-Eを示している。床は小さな凹凸が観察されるが概して平坦であり、良く踏み固められて堅緻である。壁は直立している。壁周堀は幅35~45cm、深さ16~20cmの規模で住居跡を一周する。ピットは4ヶ所で検出されている。ピットの位置からP1とP3が支柱穴となるであろう。本住居跡に伴う炉或いはカマドの位置等に関しては不明である。

土層説明

- 1 暗褐色土 褐色土をシミ状に混入 2 褐色土
- 3 暗褐色土 鈍いロームを含む
- 4 暗黄褐色土 鈍いローム主体暗褐色土含む
- 5 暗褐色土 やや暗く均一の層
- 6 暗褐色土 鈍いローム、ロームブロック、焼土含む
- 7 暗褐色土 ロームを多く含むややしまりあり
- 8 暗褐色土 鈍いロームを含む 9 黒褐色土
- 10 黒褐色土 ロームブロックを多く含む
- 11 褐色土 鈍いローム
- 12 暗褐色土 褐色土をシミ状に少量含む
- 13 暗褐色土 鈍いロームを多く含む
- 14 暗褐色土 ローム粒少量含む
- 15 暗褐色土 褐色土をやや多く含む
- 16 褐色土 ローム2次的堆積



第14図 1-8住居跡 (1:60)

1-8住居跡ピット一覧表

(単位=cm)

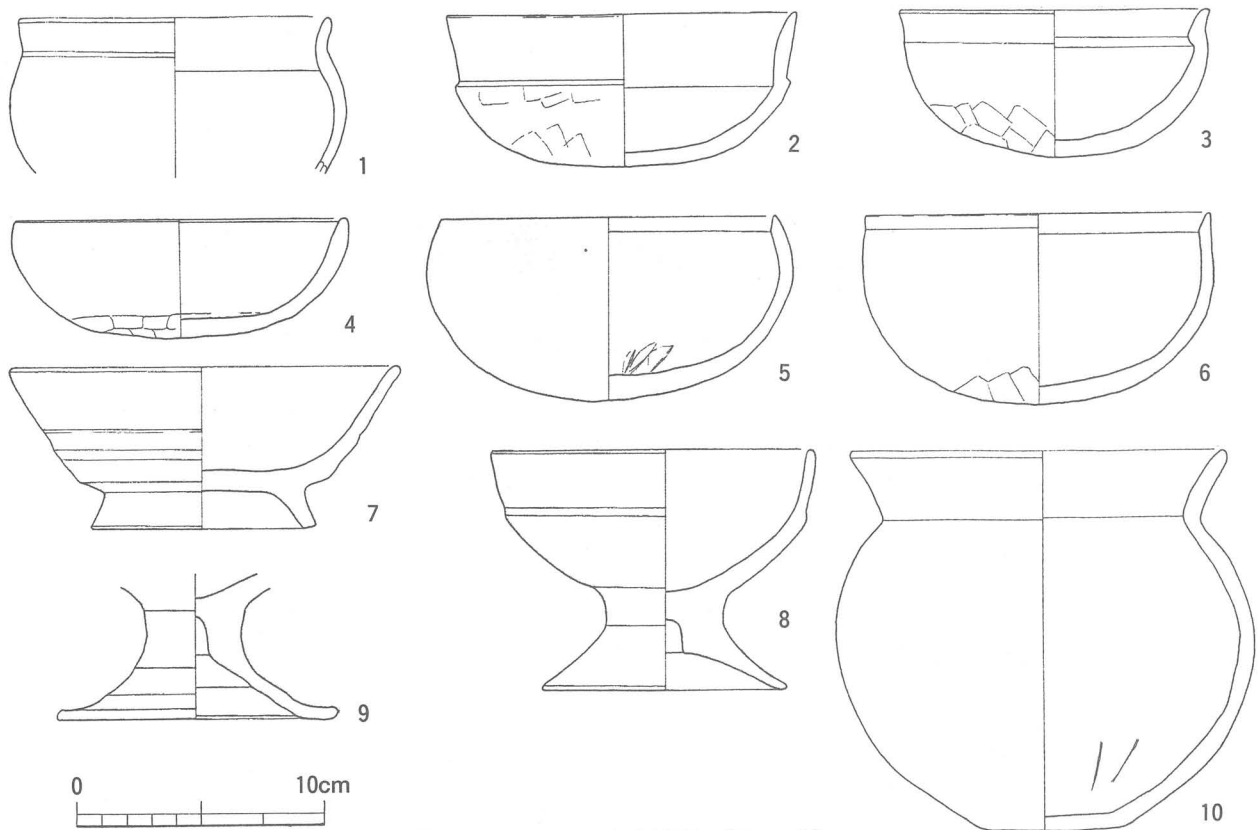
No.	径	深	形状	備考	No.	径	深	形状	備考	No.	径	深	形状	備考
1	30×25	14	円形	支柱穴	2	28×32	19	不整		3	38×45	19	円形	支柱穴
4	40×30	12	楕円											

出土遺物 (第15図) 本住居跡からは40片の土師器が出土している。甕形土器等の破片も出土しているが、小破片であり図示できるものではない。図示した遺物は、坏形土器や坏部が深く、脚部が低く脚部の開きが坏部より小さい高坏形土器等である。

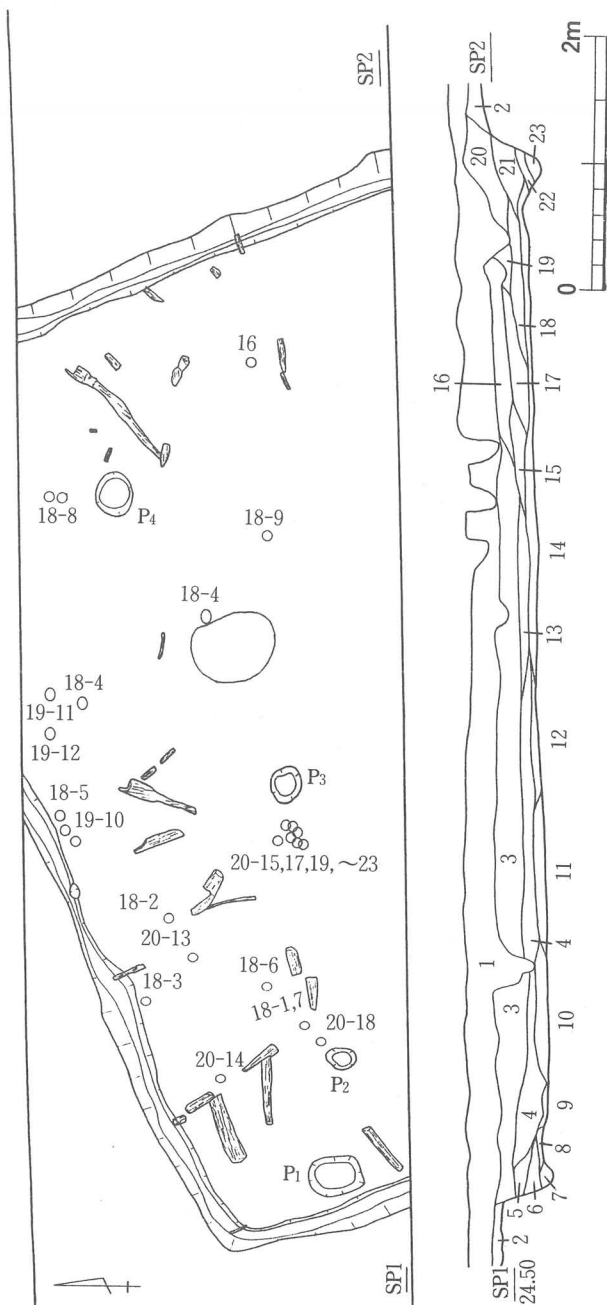
表-4 1-8住居跡出土遺物観察表

(単位=cm)

No	器種	法量	形態・成形手法	調整方法	胎土・色調	備考
15-1	土師器甕	口径 12.4 器高 ー		口縁ヨコナデ 内外面ともに丁寧な仕上げ をしている	小石を少量含む 内、外面明橙褐色	焼成は良、1/2 欠損、外面黒褐色 あり、スス付着?
15-2	土師器坏	口径 13.9 器高 6.2	口縁部外面から内 面に赤色塗彩 口縁部に稜を持つ	口縁部ヨコナデ、内面ヘラ 磨き、胴部から底部ヘラ削 り	小石を含む 色調は茶褐色から明褐色	1/2欠損 焼成は良
15-3	土師器坏	口径 12.4 器高 4.8	口縁部僅かに外反 する 内面に稜あり	口縁部ヨコナデ 底部上半ヘラ磨き、胴部下 半ヘラ削り	小石を含む、雲母を少量含む 色調は橙褐色	内面やや摩耗する 焼成は良
15-4	土師器坏	口径 13.2 器高 4.8		口縁部から胴部はナデ、丁 寧な整形 底部はヘラ削り	小石、雲母を少量含む 色調は明褐色	
15-5	土師器坏	口径 13.2 器高 7.4	口縁部内湾する 底部は丸底、凹凸 が観察される	口縁部ヨコナデ、胴部下半 から底部は雑なヘラ削り	小石を多く、雲母を少量含む 内面暗褐色、外面黒褐色	焼成は良 外面は摩耗してい る
15-6	土師器坏	口径 13.7 器高 7.6		口縁部ヨコナデ、胴部上半 はヘラ削り後ナデ、底部ヘ ラ削り	小石を多く、雲母を少量含む 内面外面ともに橙褐色黒斑 あり	焼成は良
15-7	土師器高台碗	口径 15.7 器高 6.4 底部径 9.0 高台高 1.5	ロクロ使用、糸切 り		小石を含む 内面黒色塗彩 外面明褐色	覆土上層 住居跡に伴なわな い
15-8	土師器高坏	口径 13.9 器高 9.6 脚部径 9.8 脚部高 4.0	坏部に稜を持つ、 坏部が深く、脚部 が低い	口縁部ヨコナデ、坏胴部ヘ ラミガキ 脚部ヨコナデ	小石を少量含む 色調は橙褐色	坏部1/4欠損 焼成は良
15-9	土師器高坏	脚部径 11.2 脚部高 5.8	脚部先端が開く	脚部ハケ状工具による磨き 色調褐色	小石をやや多く、雲母を少 量含む 色調褐色	坏部欠損、脚部1/3 欠損、焼成は良
15-10	土師器壺	口径 15.3 器高 15.2 胴部径 16.8	口縁部は頸部括れ から「く」字形に立ち 上がる。胴部最大 径は中央部にある	口縁部はナデ、胴部はヘラ ミガキ	小石を多く、雲母を少量含む 焼成は良好、色調は外面が 橙褐色～黒褐色、内面は褐 色～黒褐色	



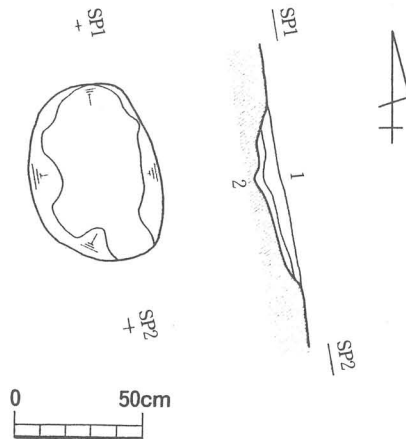
第15図 1-8出土遺物(1:3)



第16図 1-9住居跡 (1:60)

土層説明

- | | |
|----------|-------------------|
| 1 黒褐色土 | 2 褐色土 |
| 3 暗褐色土 | ローム粒をやや多く含む |
| 4 暗褐色土 | ローム粒ローム小ブロックを多く含む |
| 5 暗褐色土 | 鈍いロームを少量含む |
| 6 暗褐色土 | 鈍いロームやや多く含む |
| 7 暗黄褐色土 | ロームブロック主体 |
| 8 褐色土 | ロームブロック少量含む |
| 9 黒褐色土 | |
| 10 黒褐色土 | ロームを混入 |
| 11 暗黄褐色土 | ロームブロック多く含む |
| 12 黒褐色土 | 9層に類似する |
| 13 暗褐色土 | やや暗い |
| 14 暗黄褐色土 | 11層に類似する |
| 15 暗褐色土 | ローム粒ロームブロックを多く含む |
| 16 褐色土 | ローム粒を多量に混入 |
| 17 暗褐色土 | ロームブロック炭化物を混入 |
| 18 暗褐色土 | 炭化物を少量含む |
| 19 暗褐色土 | ローム粒を含む |
| 20 暗褐色土 | ローム粒を多量に含む |
| 21 暗褐色土 | ローム粒を含む |
| 22 暗褐色土 | 鈍いロームを含む |
| 23 暗褐色土 | 鈍いロームローム粒を混入 |



土層説明

- | | |
|--------|--------------|
| 1 暗褐色土 | 焼土粒を多く炭化物を含む |
| 2 赤褐色土 | 良く焼けた焼土 |

第17図 1-9炉 (1:30)

8. 1-9住居跡 (第16図)

本住居跡は調査区の西側に位置する。住居跡北コーナー部及び南部は調査区域外となっており、住居跡の約1/3が調査可能であった。

形状 東西7.63m、南北3.0mまで調査した。住居跡の掘り込みは42cmを測り、平面形は方形を呈する。住居跡の主軸方向はN-27°-Wである。床は多少の凹凸が観察されるが概して平坦であり、床全体が良好に踏み固められている。壁は直立し、壁に沿って壁周堀が住居跡を一周する。壁周堀の規模は、幅32~36cm深さ5~7cmを測る。ピットは4ヶ所で検出された。ピットの位置等からP2、

P3、P4が柱穴として利用されたピットであろう。P1は住居跡の床を切って掘られている。

本住居跡の床から多くの炭化材が検出されている。住居跡の中央部よりも住居跡壁に沿って検出された炭化材が多く観察される。炭化材は住居跡の壁に直交するように横たわって検出され、柱等が焼け落ちた様相を物語っている。炭化材の大きさには大小の差があるが、長さ20～110cm幅10～15cmを測る。覆土は床付近に焼土含む層が観察されるがその量は少なく、自然の堆積を示している。

炉(第17図) 炉は住居跡の中央部、P3とP4の間に造られている。炉は地床炉であり、東西40cm、南北55cm、深さ6～7cmである。炉の形状は南北に長軸を持つ楕円形をし、緩やかな傾斜を持った「皿」状の掘り込みを呈している。炉床は良く焼けた状態である。

1-9 住居跡ピット一覧表

(単位=cm)

No.	径	深	形状	備考	No.	径	深	形状	備考	No.	径	深	形状	備考
1	41×43	12	円形		2	21×24	18	不整	柱穴	3	25×25	29	円形	柱穴
4	25×28	34	楕円	柱穴										

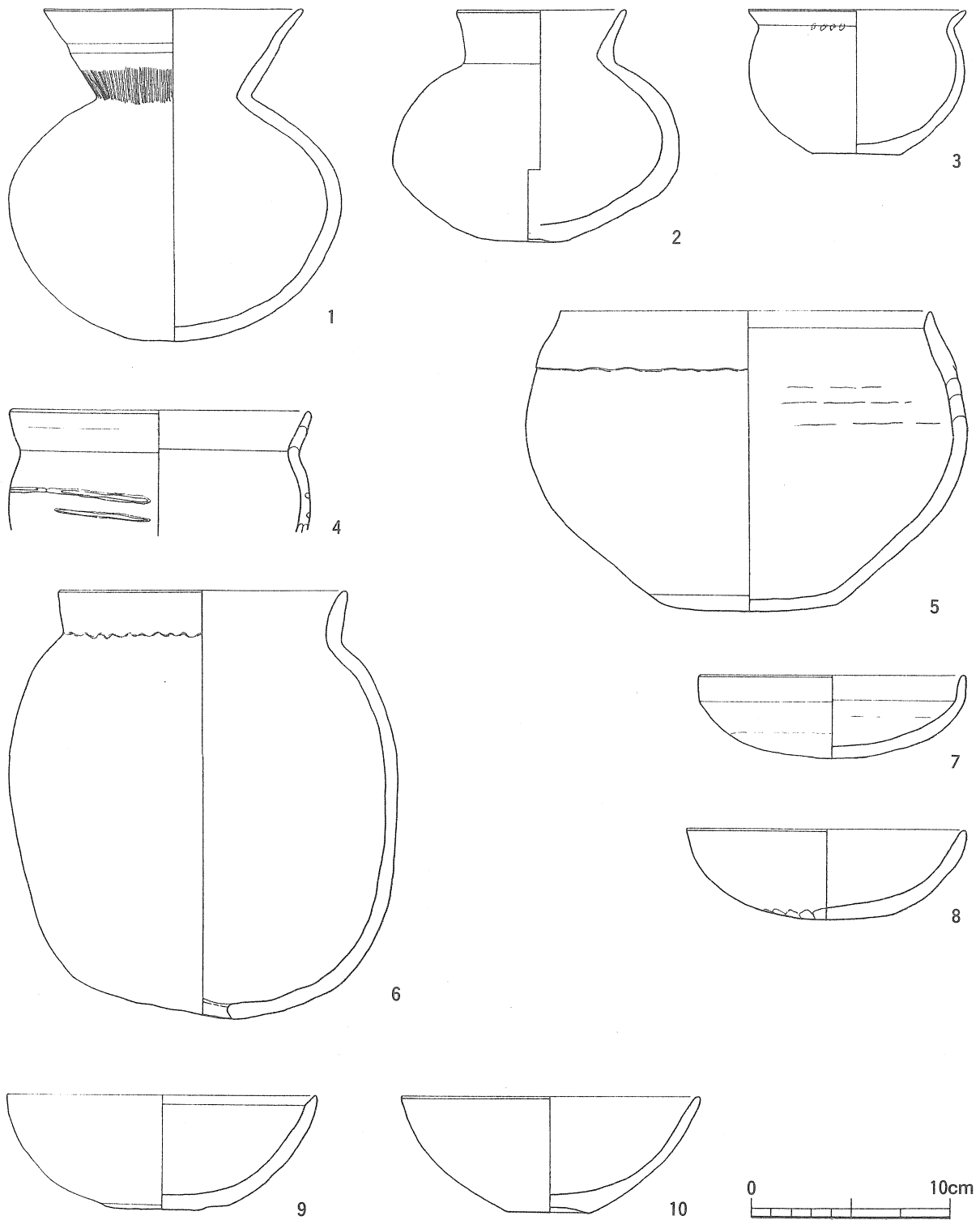
出土遺物(第18～20図) 本住居跡は焼失した住居であるためか、41点の土師器等が出土している。遺物は、壺、甕、坏、高坏、甑形土器が出土しているほか、9個の土玉と2個の土錘が発見されている。7個の土玉は床面直上から集中して出土している。他の土玉や土錘、土器も床面直上から出土している。土玉はいずれもが粗雑な造りである。

表-5 1-9 住居跡出土遺物観察表

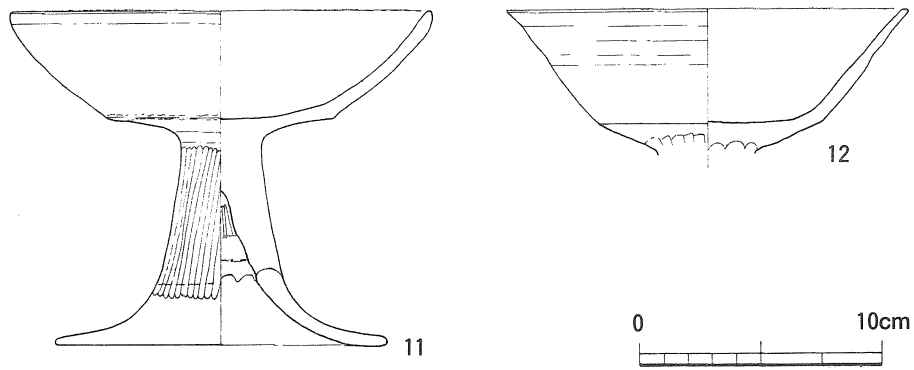
(単位=cm)

No.	器種	法量	形態・成形手法	調整方法	胎土・色調	備考
18-1	土師器壺	口径 13.0 器高 16.5 頸部径 7.7 胴部径 16.4	口縁部中段に稜を持つ 胴部最大径は中央部にある	口縁内外ヨコナデ、胴部ヘラ磨き、頸部に櫛状工具による整形、内外面ともに丁寧な仕上げをしている	雲母を少量含む 外面橙褐色、黒色斑1ヶ所あり 内面明褐色、一部に黒色	焼成は良
18-2	土師器壺	口径 8.4 器高 11.6 頸部径 7.5 胴部径 14.2	底部は小さな平底で、僅かにくぼみを持つ。胴部最大径は中央部よりやや下半にある	全体に丁寧な磨きであるが、器表面が摩耗し明瞭ではない	精選された粘土を用いている 小石を少量含む 色調は褐色、一部に黒褐色あり	焼成は良
18-3	土師器甕	口径 11.0 器高 7.2 頸部径 10.8	0.9の高さで外反する口縁底部は平底、僅かに歪みある	口縁部ヨコナデ、頸部ヘラによる圧痕の上にミガキ、胴部ヘラ磨き	小石をやや多く含む、雲母を少量含む 色調は明褐色から褐色	底部内外面やや摩耗する 焼成は良
18-4	土師器甕	口径 14.8 器高 - 頸部径 13.8	口縁部輪積跡あり。胴部に2条の条痕、長さ6.1深さ0.2	内面ナデ 外面摩耗する	小石を多く含む 色調は褐色	3/5欠損 焼成は良
18-5	土師器鉢	口径 18.6 器高 14.8 胴部径 22.0	折り返し口縁部、口縁やや外反する。胴部最大径は中央部。底部はやや丸みのある平底	口縁部ヨコナデ、胴部はヘラ削り後ナデ 内面はヘラ磨き	小石を含む 色調は暗褐色	底部の一部欠損 焼成は良
18-6	土師器甑	口径 14.3 器高 22.3 頸部径 13.8 胴部径 19.2 孔径 4.5	頸部に折り返し口縁部の粘土の稜が波状にある。底部孔は中心をはずれている。底部に歪みが観察される	口縁部ヨコナデ胴部はヘラ削り後磨き 内面はナデ、 底部孔はヘラ切り 全体としてやや雑な整形	小石を多く、雲母を少量含む 色調は外面が黒褐色、内面が暗橙褐色	焼成は良

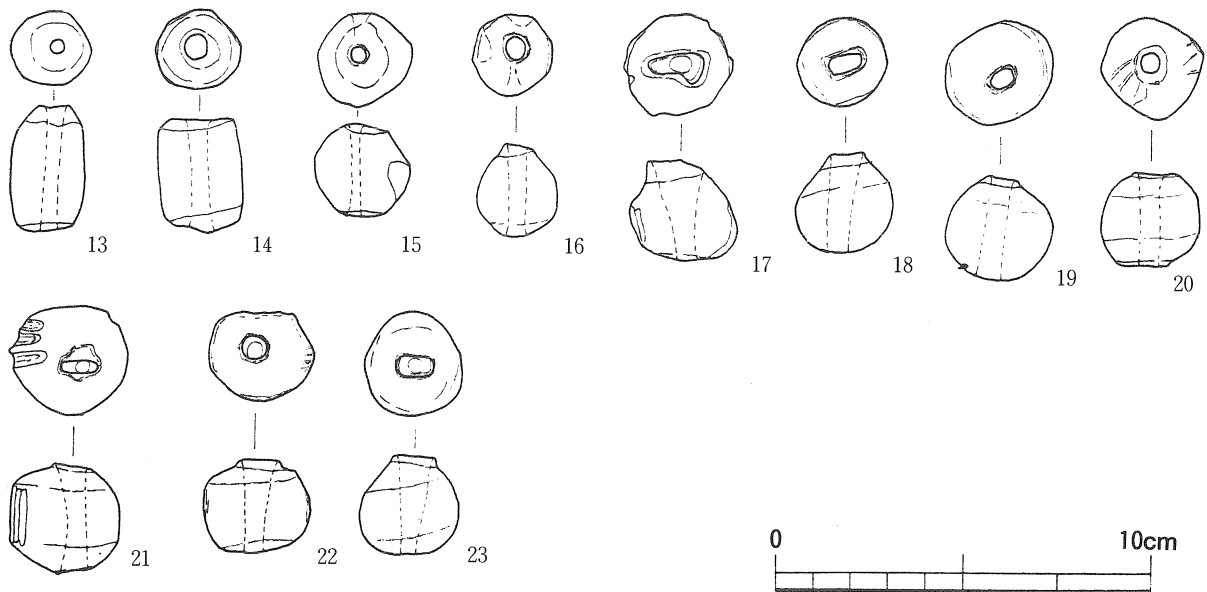
No	器種	法量	形態・成形手法	調整方法	胎土・色調	備考
18-7	土師器 坏	口径 13.4 器高 4.1	口縁部稜を持ち、直立する	口縁部ヨコナデ、坏部ヘラ削り後磨き	小石を含む、雲母少量含む褐色	1/3欠損色調明等焼成は良
18-8	土師器 坏	口径 14.0 器高 4.5	口縁部緩やかに立ち上がる	坏底部ヘラ削り	小石を少量、雲母を微量含む色調は暗褐色	焼成は良
18-9	土師器 坏	脚部径 15.4 脚部高 5.7	口縁内面に稜を持つ、底部は小さく高台状となり平底	口縁内面は磨き、摩耗があり調整跡は明瞭でない	小石をやや多く、雲母を少量含む色調は黒褐色	焼成はやや良
18-10	土師器 坏	口径 15.0 器高 5.7	底部は僅かに凹む	口縁部ヨコナデ、内面ヘラ磨き、外面ミガキ	小石、雲母を少量含む褐色、一部に黒色あり	1/2欠損色調は褐色焼成は良
19-11	土師器 高坏	口径 17.6 器高 13.9 脚部径 13.8 脚部高 8.8	坏底部に稜がある。脚部裾は大きく開く。坏部と脚部の接合はホゾ型式	坏部の口縁部から内面ヨコナデ、坏部及び脚部ヘラ磨き、脚部裾はヨコナデ、脚部内面はヘラ削り	小石、雲母を少量含む色調は暗橙褐色	焼成は良好
19-12	土師器 高坏	口径 16.8 坏部高 6.4	坏底部に稜をもつ	坏部はヘラ磨き、坏部と脚部の接合部はヘラ削り。内面はヨコナデ或いはナデ	小石をやや多く含む色から暗褐色	脚部欠損色調は明褐焼成は良好
20-13	土 錘	長さ 3.3 径 2.3 孔径 0.5			胎土は良い	焼成は良色調は褐色
20-14	土 錘	長さ 3.1 径 2.4 孔径 0.6			小石をを少量含む色	焼成は良色調は暗褐
20-15	土 玉	径 2.8 高 2.4 孔径 0.4	表面に長さ1.1cm幅1.5cm深さ0.6cmの木片が混入したと思われるキズあり	調整はやや雑である	小石、雲母を少量含む色調は黒褐色	焼成は良
20-16	土 玉	径 2.2 高 2.5 孔径 0.5		調整はやや雑である	色調は褐色から暗褐色	焼成は良
20-17	土 玉	径 2.9 高 2.6 孔径 0.6~1.4	全体に歪みを持つ、上部は棒状工具により孔径を広げている	調整は極めて雑である	小石、雲母を少量含む色調は暗褐色	焼成は良
20-18	土 玉	径 2.4 高 2.6 孔径 0.6~0.8			胎土は良色調は褐色	焼成は良
20-19	土 玉	径 2.8 高 2.7 孔径 0.6			胎土に雲母を混入	焼成は良色調は褐色
20-20	土 玉	径 2.6 高 2.5 孔径 0.5		棒状工具による擦痕ある	胎土に雲母を混入	焼成は良色調は褐色
20-21	土 玉	径 2.9 高 2.9 孔径 0.5~0.8		棒状工具による圧痕が3ヶ所ある	胎土に雲母を混入色	焼成は良色調は黒褐
20-22	土 玉	径 2.5 高 2.2 孔径 0.4~0.8			胎土に雲母を混入色	焼成は良色調は黒褐
20-23	土 玉	径 3.0 高 2.6 孔径 0.5			胎土に雲母を混入色調は褐色から黒褐色	焼成は良



第18図 1-9 出土遺物その1 (1:3)



第19図 1-9 出土遺物その2 (1:3)



第20図 1-9 出土遺物その3 (1:2)

II 土坑

土坑は調査区1区で2ヶ所、調査区2区で1ヶ所が検出されている。いずれの土坑も遺物等は伴わず、土坑の時期や性格等は明瞭ではない。

表-6 土坑観察表

(単位=cm)

No.	形状	規模	備考
1-2D	円形を呈し、底部はやや丸みを帯びる、壁は直立する	東西70 南北82 深さ72	1-2住居跡と重複し、住居跡の床を切って彫り込まれている。覆土は暗褐色土であり、自然の堆積を示している。 第5図
1-6	方形を呈するであろう。底部は平坦で、壁は直立する。	東西150 南北50 深さ12.5	調査区南境界に沿って三角形状に検出された。方形を呈するであろうが、大半は調査区域外である。覆土は暗褐色土、自然堆積。 第21図
2-1	円形を呈し、底部は平坦であり、壁は直立する。	東西72 南北70 深さ79	覆土は柔らかく、黒色土、暗褐色土が観察され、自然の堆積を示す。 第21図

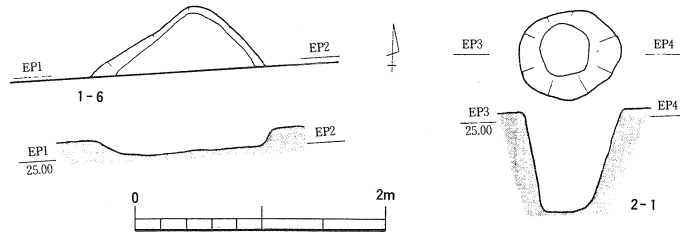
Ⅲ 溝

溝は調査区1区から2ヶ所検出されている。溝はいずれも南北方向に走り、住居跡と重複している。溝の時期や性格を推定できる遺物等は出土していない。溝はいずれも住居跡を切って掘り込まれている。

表-7 溝観察表

(単位=cm)

No.	形 状	規 模	備 考
1 - 4 M	南北方向へ直線的に走る。壁は緩やかに立ち上がり、断面形は「U」字形を呈する。	幅66~70、 深さ55~60	1-4住居跡と重複し、住居跡の東壁を切って彫り込まれている。覆土は暗褐色土であり、自然の堆積を示している。 第8図
1 - 8 M	南北方向へ直線的に走る。壁は緩やかに立ち上がり、断面形は「U」字形を呈する。	幅105~120、 深さ30~38	1-8住居跡北西コーナー部と重複し、住居跡を切って掘り込まれている。覆土は暗褐色を呈し、自然堆積を示している。 第14図



第21図 1-6、2-1土坑 (1:60)

第六章 有田北、有田東遺跡の概要

有田北遺跡は、茨城県真壁郡明野町大字有田313番地外に、有田東遺跡は同所157番地外に所在する。有田北遺跡と有田東遺跡の2遺跡は同一の微高地に営まれており、2遺跡は連続する同一の遺跡として把握することが妥当であると考えている。

両遺跡は、下宮遺跡の南対岸に広がる微高地に営まれている。微高地は標高24～25mを測り、平坦な地形である。微高地の北は北西方向から入り込んだ小さな谷に、西は南流する観音川に、南は観音川と桜川の合流部に、東は桜川に面している。微高地の周囲を河川や谷に囲まれた、独立した小さな台地を形成している。微高地の周辺の低地は標高22～23mを測る。

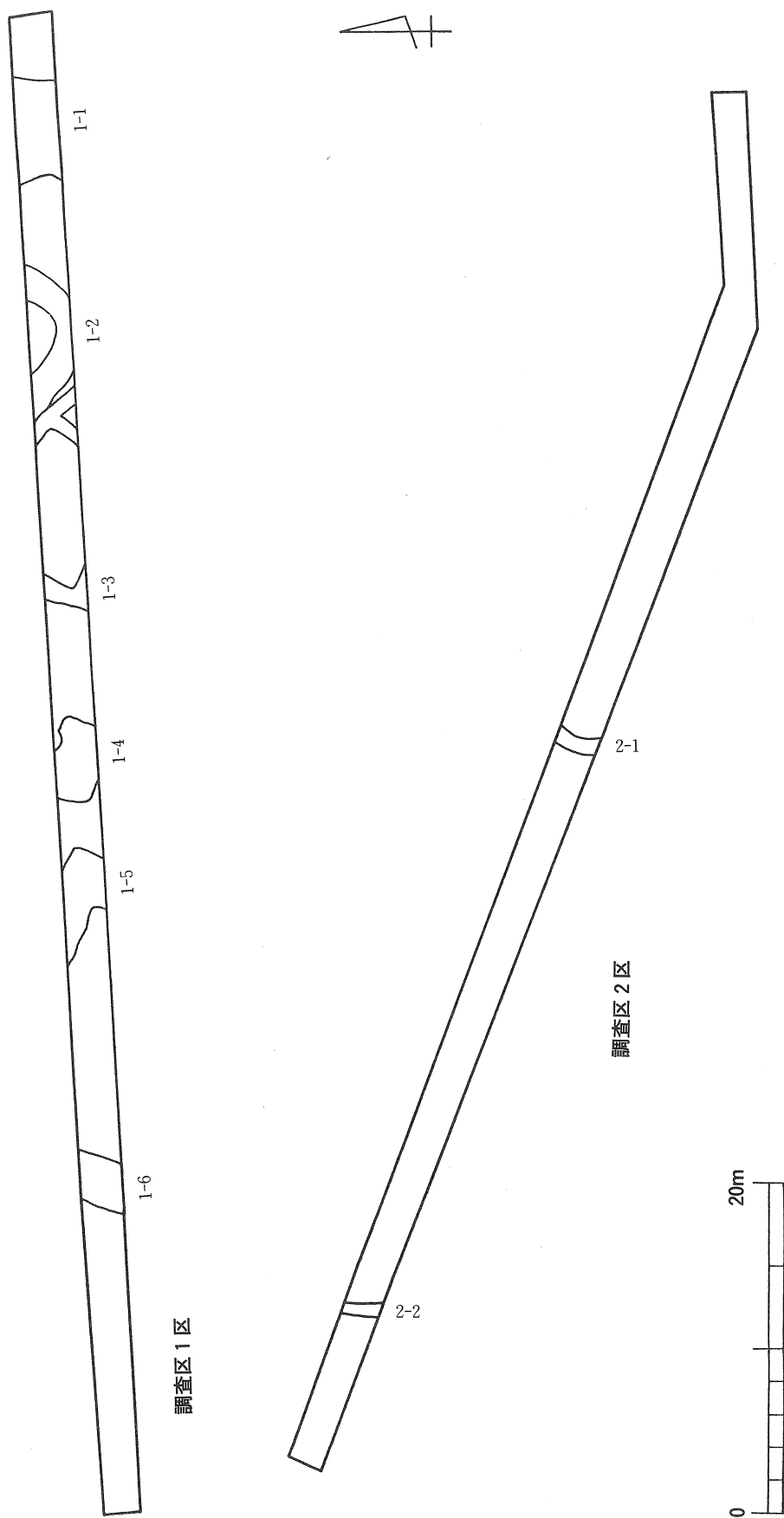
微高地の中央部には有田地区の集落が営まれており、集落の周辺部と低地には畑や水田が広がっている。微高地の北縁部に沿って、有田地区を水害から守る小規模な「堤」（旧堤）が南北に走り、微高地と低地を分けている。有田地区は河川の合流部に近く、上流の雨水等が集中することから、水害に合うことが多くあったようである。

微高地の基本的な土層は、25～30cm程の耕作土、約20cmの暗褐色土、数cmの褐色土そしてローム層へと移行している。ローム層はやや浅く70～100cm程であり、ローム層の下部は粘性の強い黄褐色土となり、ローム層の下層は灰褐色粘土層さらに礫層へと連続する。

有田北遺跡 本遺跡は微高地の北部に位置する。本遺跡は調査区域が「く」字形に屈曲しているために、微高地を北東に縦断する調査区を1区、南北に横断する調査区を2区と呼称して調査を実施した。調査区1区は全長90m、調査区2区は88mを測る。調査区1区からは、住居跡2ヶ所、4条の溝が、調査区2区からは2条の溝が検出されている。調査区1区からは、古墳の周濠と推定される溝が2条検出されている。調査区2区から検出された2条の溝は、覆土中からビニール片が発見されるなど、水田耕作時に掘られた新しい溝であろう。有田北遺跡の出土遺物は少なく、ポリ袋数袋にすぎない。

有田東遺跡 本遺跡は微高地の東部に位置する。調査区域は微高地の東部を、桜川の堤防に沿って南北に縦断する調査区と、微高地の中央部を東西に横断する調査区が「L」字形に屈曲している。また農地の利用状況等から、調査は2年度に分割して実施しなければならなかった。発掘調査区を1区から5区に分割して調査を実施した。調査区1区は南北に設定された全長61m、調査区2区及び3区は東西に設定された長さ48mと38mの調査区であり、平成8年(1996)の第1次調査区域である。調査区4区は調査区1区と2区に挟まれて「L」字形に屈曲している。調査区5区は調査区3区の西に位置し、東西に設定された区域であり、農道によって東部と西部に分割されている。調査区4区は全長88m、5区は全長37mの区域であり、平成9年(1997)に実施した第2次調査の対象区域である。

発掘調査によって、住居跡15ヶ所、土坑24ヶ所、溝16条等が検出された。住居跡は炉を有するもの1ヶ所、カマドを有するもの6ヶ所であり、住居跡の平面形は方形を呈するものと推定される。土坑や溝は、出土遺物等も少なく、時期や性格等が不明なものが多数を占めている。その中で、縄文時代の「落とし穴」と思われる土坑(2ヶ所)や、古墳の周濠と推定される溝(3条)等が発見されている。



第23図 有田北遺跡全測図

第七章 有田北遺跡の遺構と出土遺物

I 住居跡

1. 1-4住居跡 (第24図)

調査区1区の中央部に位置する住居跡である。住居跡の北西部と南東部が調査区域外となり、住居跡の約2/3を調査したものである。

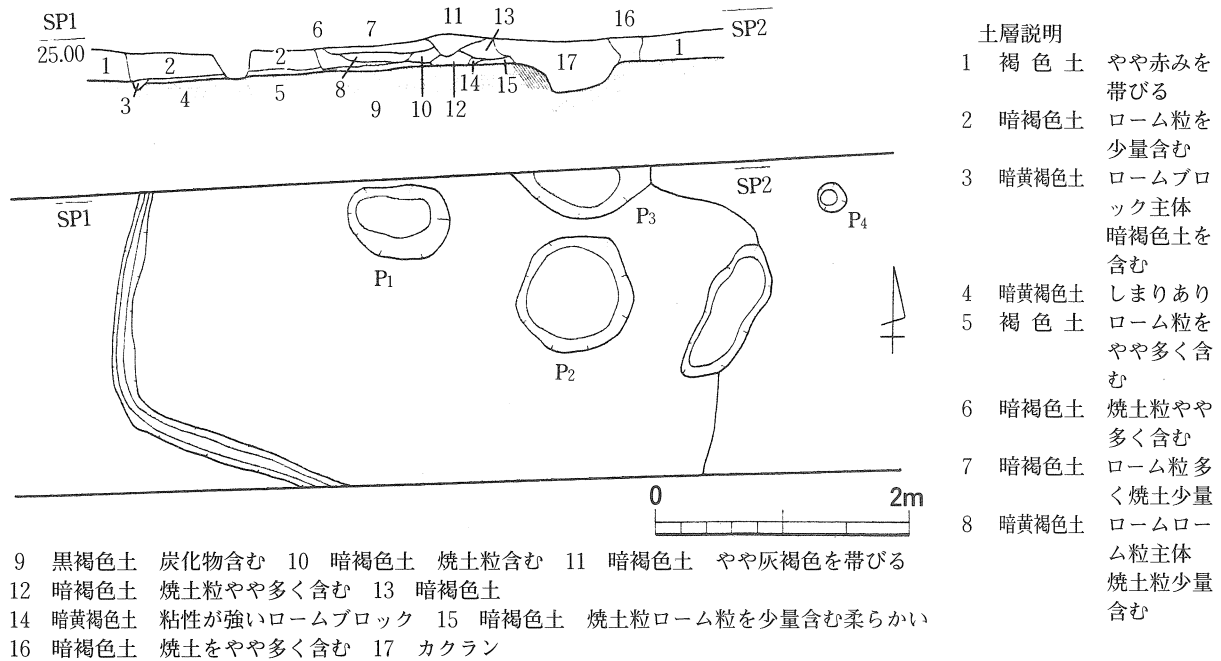
形状 東西4.75m、南北2.40mまで調査した。住居跡の掘り込みは見られず、遺構確認面が住居跡の床である。床は部分的に良く踏み固められているが、全体としてはやや軟弱である。ピットは4ヶ所で発見されているが、いずれも本住居跡に伴うものではない。覆土は暗褐色土を主体とするが、新しい焼土も観察されるなど、後世の攪乱を多く受けている。

1-4住居跡ピット一覧表

(単位=cm)

No.	径	深	形状	備考	No.	径	深	形状	備考	No.	径	深	形状	備考
1	82×60	20	楕円		2	92×93	22	楕円		3	105×40	19	楕円	1/2調査
4	40×30	12	楕円											

出土遺物 本住居跡からの出土遺物は、土師器破片が数点出土しているが、図示できる遺物は発見されていない。



第24図 1-4住居跡 (1:60)

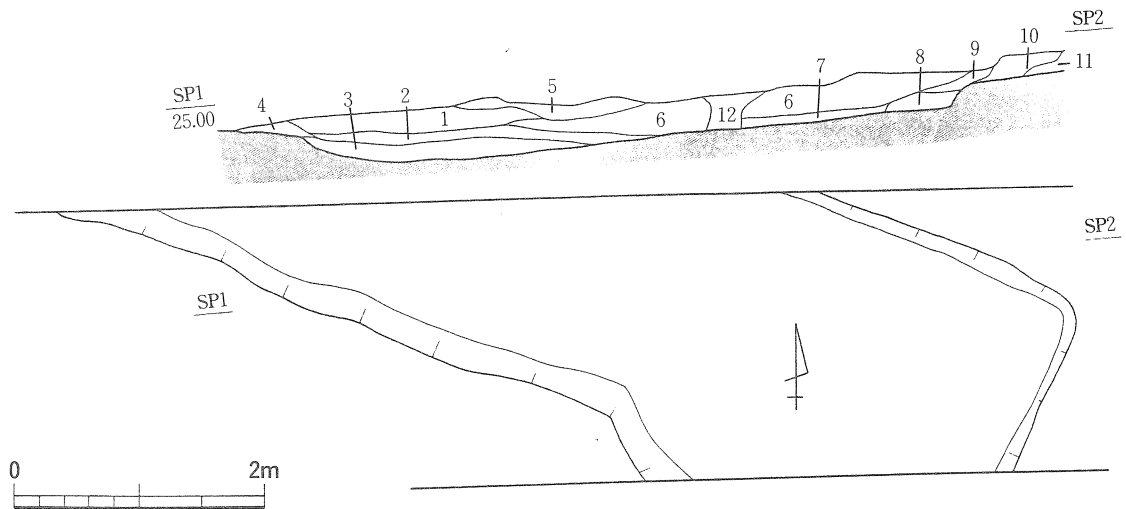
2. 1-5住居跡 (第25図)

調査区1区の中央部に位置する。住居跡(1-5)と溝(1-5A)が重複しており、住居跡は溝によって切られている。住居跡南部は調査区域外となり住居跡の約2/3が調査された。

住居跡を切っている溝状遺構は、南から北西方向に鋭角に屈曲しているものと思われる。

形状 東西2.95m、南北3m 深さ10cmを測る。平面形は方形を呈する。壁は直立する。床は平坦

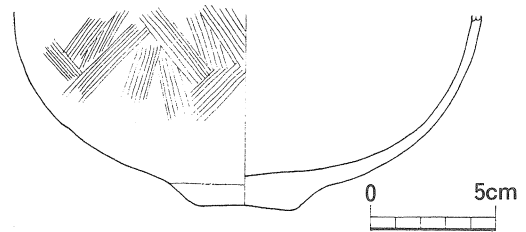
であるが、溝の影響を受けているためであろうか、軟弱である。壁周堀、柱穴やカマド等は検出できなかった。



土層説明

- 1 暗褐色土 ローム粒を少量含む
- 2 暗褐色土 ローム粒を少量含みややしまりがある
- 3 暗褐色土
- 4 暗褐色土 ロームブロックを少量含む
- 5 暗褐色土 僅かに灰褐色をおびる
- 6 暗褐色土 鈍いロームブロックを含みややしまりがある
- 7 暗褐色土 やや暗い
- 8 暗褐色土 鈍いロームを含みやや暗い
- 9 暗褐色土 ロームをやや多く含む
- 10 暗褐色土 鈍いロームロームブロックをやや多く含む
- 11 褐色土
- 12 カクラン

第25図 1-5住居跡 (1:60)



第26図 1-5出土遺物 (1:3)

出土遺物 (第26図) 住居跡と溝状遺構からは24点の土師器破片が出土している。図示した遺物は住居跡の覆土から出土した、壺形土器の口縁部破片である。口縁部約2/3、胴部下半は欠損している。

表-8 1-5住居跡出土遺物観察表

(単位=cm)

No.	器種	法量	形態・成形手法	調整方法	胎土・色調	備考
26-1	土師器壺	胴部径 18.8 器高 -		外面 クシ状工具による整形 内面 ヘラミガキ	外面黒褐色、内面褐色 胎土 小石を多く含む、焼成良	胴部下半

II 溝

有田北遺跡1区から4条の溝が検出されている。多くの溝は、その性格や時期を推察できる遺物等が発見されておらず、性格等が不明であるが、その形状等から古墳の周濠であろうと考えられる溝も2条発見されている (1-1、2)。

1. 1-1溝 (第27図)

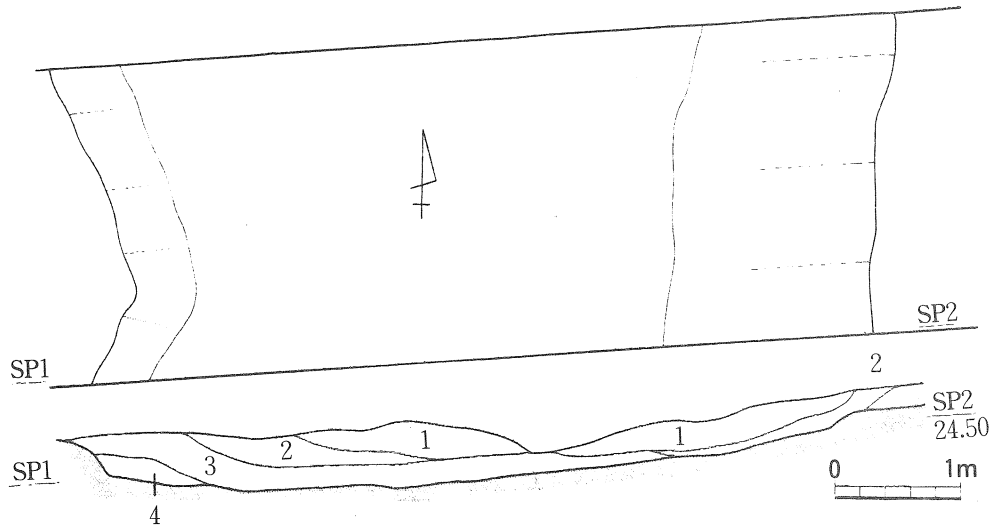
調査区1区の最も東に位置する溝である。

形状 幅5.68~5.72m、深さ32~73cmを測る。壁は緩やかに立ち上がり、形状は「U」形を呈する。溝肩の東部は直線的であるが、西部は「く」字形に屈曲する。溝底は南部が浅く、北部に向かい緩や

かな傾斜をもって深くなっており、その高低差は約40cmを測る。覆土は暗褐色土或いは黒褐色土が主体であり、自然の堆積を示している。

溝は形状等から古墳周濠のブリッジに相当すると推定されるが、本溝に対応する溝は調査区域内では検出されていない。本溝に対応する溝は、調査区の東に構築されている可能性を残している。溝の東肩部から土師器破片が数点出土している。

出土遺物 本溝からは土師器小破片が数点出土しているが、図示できる遺物は発見されていない。



土層説明

1 黒褐色土 2 暗褐色土 ローム粒を多く含むやや明るい 3 暗褐色土 ローム粒を多量に含む2層より明るい 4 暗褐色土 ローム粒を混入する

第27図 1-1溝 (1:60)

2. 1-2溝 (第28図)

調査区1区の東に位置する溝である。溝の北部は調査区外となり、溝の約1/2を調査したものである。溝は調査区域内に半円形を描いて検出され、溝の南西部は2条の溝によって攪乱を受けている。

形状 幅1.75~1.93m、深さ40~47cm、東西の溝内径4.7mを測る。壁は直立し、溝底が平坦な「コ」字形を呈する。溝底は厚さ約20~30cmのロームブロックを敷き詰めて形状を整えている。

溝は半円形を描いて検出されており、溝底はロームブロックを用いて形状を整えているなど、古墳の周濠である要件を備えている。図示した遺物は溝の覆土中から出土したものである。

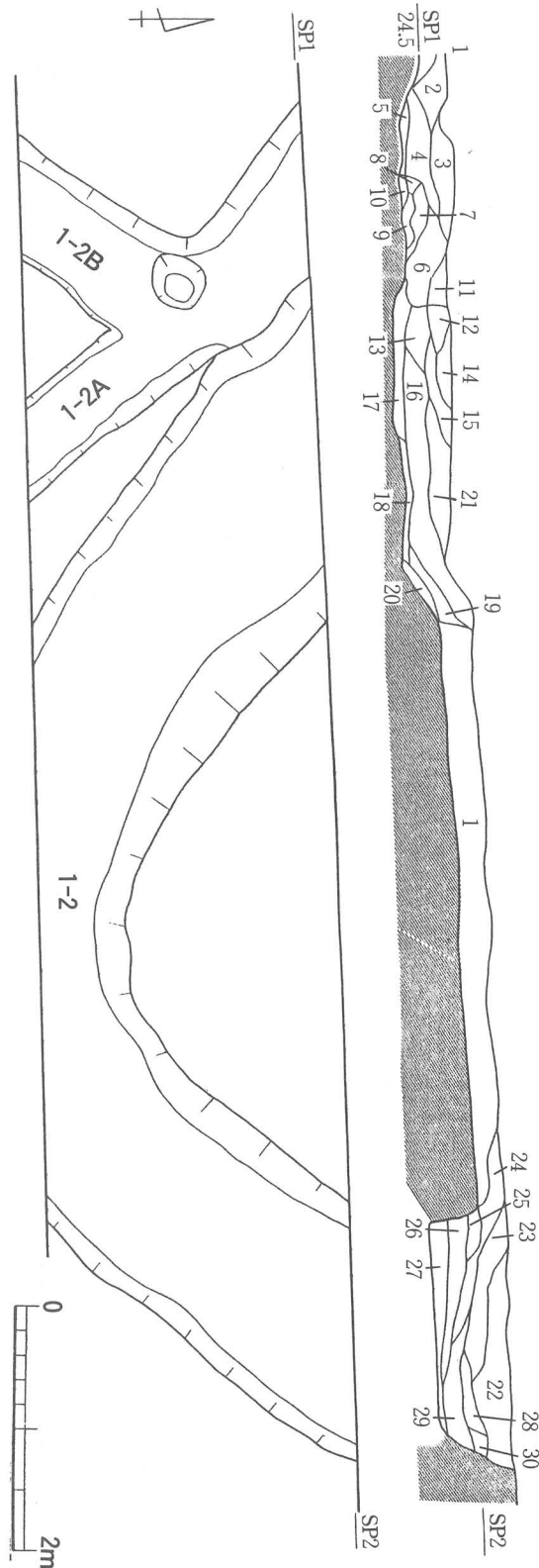
溝の南西部で重複する溝は、北西方向に直線的に延びる溝(1-2A)と、直角に屈曲する溝(1-2B)との2条が観察される。1-2Aは幅67cm、深さ15cm、1-2Bは幅82cm、深さ20cmを測る。1-2Aは1-2Bを切って掘り込まれている。覆土は暗褐色土を主体とし、自然な堆積を示している。

出土遺物 (第29図) 土師器小破片が数点出土し、図示した遺物は壺形土器の胴部破片である。

表-9 1-2溝出土遺物観察表

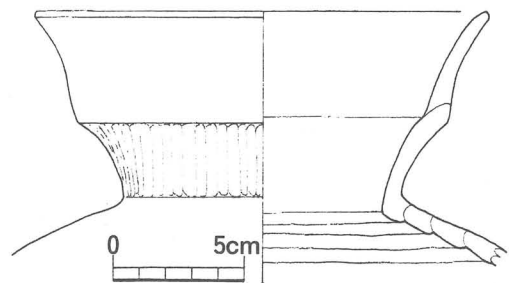
(単位=cm)

No.	器種	法量	形態・成形手法	調整方法	胎土・色調	備考
29-1	土師器壺	口径 17.6	複合口縁 胴部内面に輪積み痕が明瞭に観察される	外面 ナデ、ヘラミガキ 内面 ヘラミガキ	外面明橙褐色 外面 褐色 胎土 良好	口縁部2/3、 胴部下半欠損



第28図 1-2溝 (1:60)

- 土層説明
- | | |
|----------|--------------------|
| 1 褐色土 | 2 黒褐色土 |
| 3 黒褐色土 | ローム粒を含むやや軟弱 |
| 4 黒褐色土 | ローム小ブロックを含む |
| 5 暗褐色土 | ロームブロックを含むやや硬い |
| 6 暗褐色土 | |
| 7 暗褐色土 | 鈍いロームを少量含む |
| 8 褐色土 | 鈍いロームブロック |
| 9 暗褐色土 | ロームブロックを含む、やや軟弱 |
| 10 暗褐色土 | ローム粒を多く含みややしまりがあ |
| 11 暗褐色土 | やや暗い暗褐色土 |
| 12 暗褐色土 | 鈍いロームを含みやや明るい |
| 13 暗褐色土 | 鈍いロームローム粒を含む |
| 14 暗褐色土 | |
| 15 暗褐色土 | 黒褐色土を混入 |
| 16 暗褐色土 | 鈍いロームローム粒を多量に含む |
| 17 暗褐色土 | 鈍いロームを少量含むやや軟弱 |
| 18 褐色土 | ロームブロックを含む |
| 19 暗褐色土 | |
| 20 暗黄褐色土 | ロームロームブロックを含む |
| 21 黒褐色土 | |
| 22 暗褐色土 | 鈍いロームを多量に含み明るい暗褐色土 |
| 23 暗褐色土 | ローム粒を少量含む |
| 24 暗褐色土 | 鈍いロームをやや多く含む |
| 25 暗褐色土 | ローム小ブロックを多く含みやや軟弱 |
| 26 黄褐色土 | ロームブロック |
| 27 暗褐色土 | 鈍いロームロームブロックを含む |
| 28 暗褐色土 | ローム粒黒色土を混入 |
| 29 暗褐色土 | やや明るい |



第29図 1-2出土遺物 (1:3)

3. 1-3溝 (第30図)

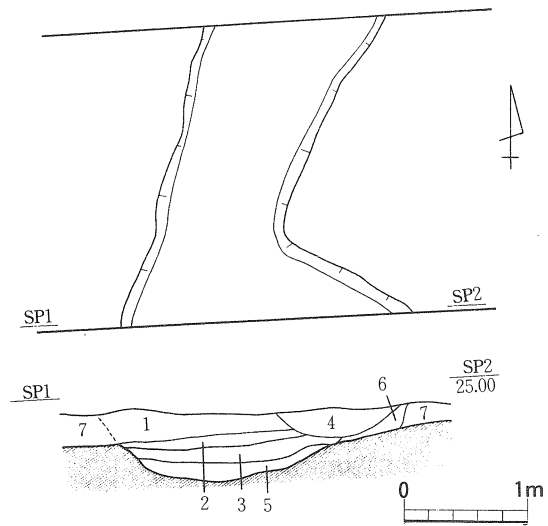
調査区の中央部に位置する。溝の南部で扇形に開き、2条の溝が重複していることが推察される。

形状 幅1.07~1.21m、重複部分では2.21m、深さ16~20cmを測る。壁は直立し、底部は平坦である。溝の形状等から1-2B溝との関わりを想像することができるが明瞭ではない。

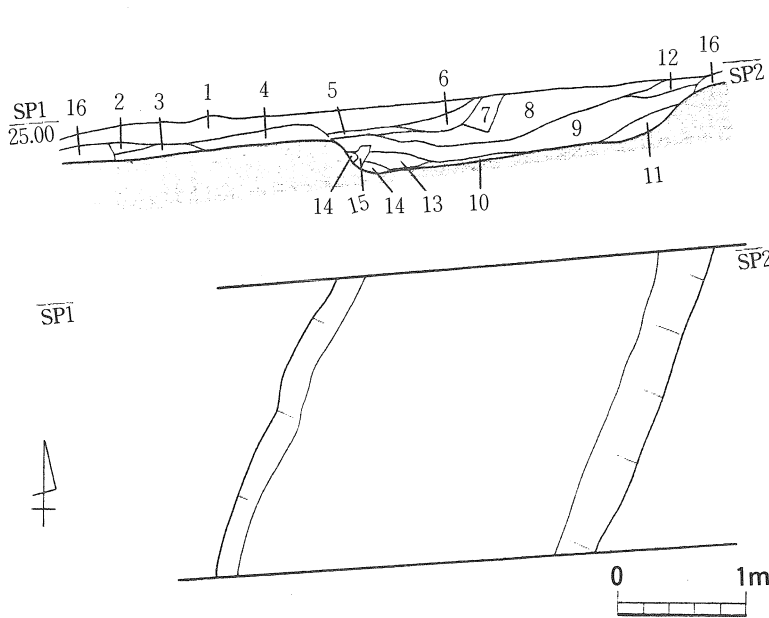
出土遺物 本溝からの遺物は出土していない。

土層説明

- 1 暗褐色土
- 2 暗褐色土 ローム粒を多く含みややしまりがある
- 3 黒褐色土 ローム粒を多く含み硬い
- 4 暗褐色土
- 5 暗黄褐色土 ロームブロックを主体とする柔らかい
- 6 褐色土 鈍いロームを多く含む
- 7 褐色土



第30図 1-3溝 (1:60)



土層説明

- 1 暗褐色土 鈍いロームブロックを少量含む
- 2 暗褐色土 ローム粒を多く含むやや軟弱
- 3 暗褐色土 ロームを多量に含む軟弱
- 4 暗褐色土 鈍いロームを含む やや暗い
- 5 暗褐色土 ロームを多く含みやや明るいしまりがある
- 6 暗褐色土 ローム粒を多く 焼土を少量ふくむ
- 7 暗褐色土 やや灰褐色をおびる
- 8 暗褐色土 ローム粒を少量含む
- 9 暗褐色土 ローム粒を多く含みやや明るい
- 10 暗褐色土 ロームを含む
- 11 暗褐色土
- 12 暗褐色土 ローム粒を多く含む やや暗い
- 13 暗褐色土
- 14 暗褐色土 鈍いロームを多く含む
- 15 黄褐色土
- 16 褐色土

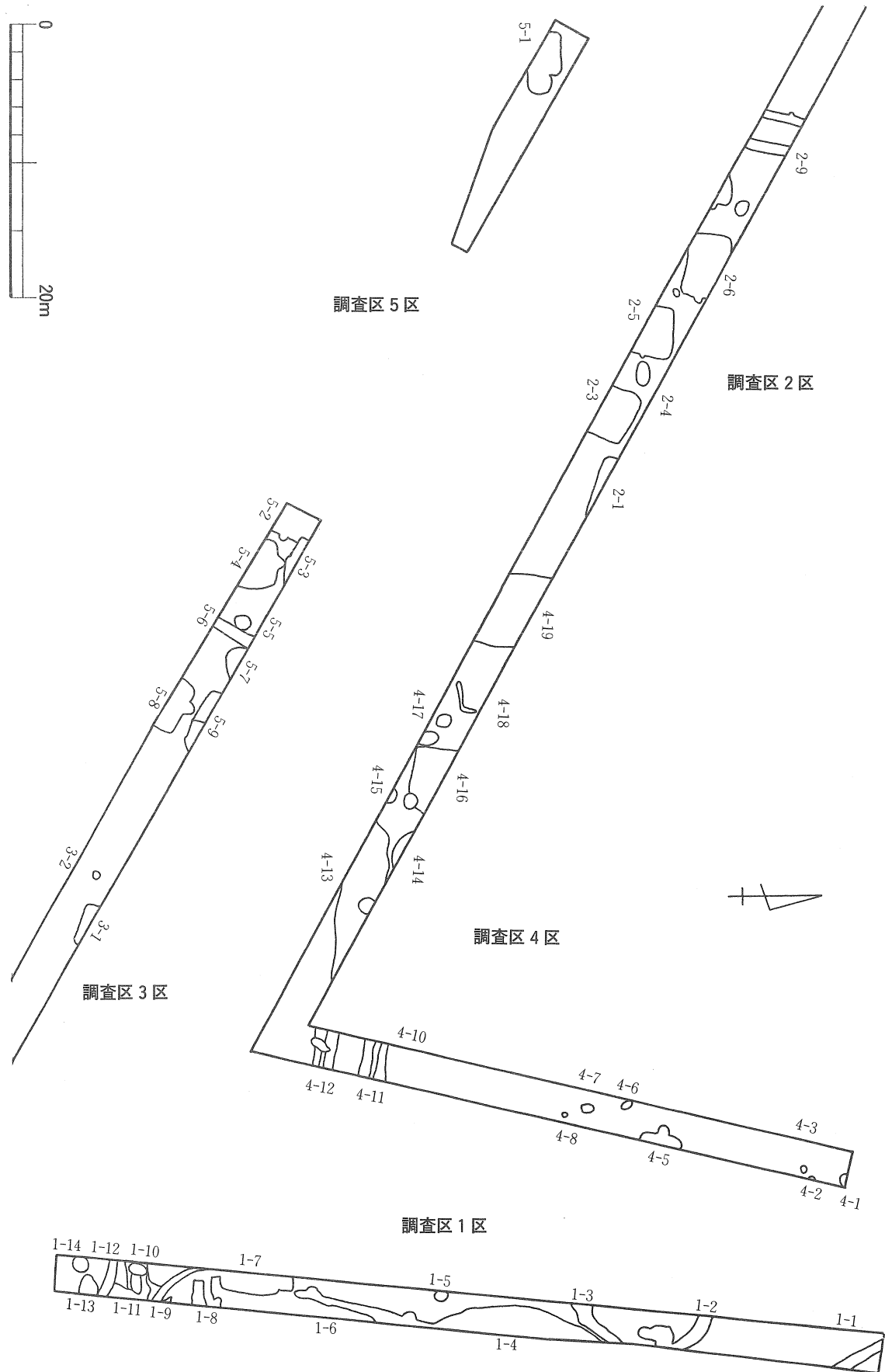
第31図 1-6溝 (1:60)

4. 1-6溝 (第31図)

調査区1区の西部に位置する溝である。

形状 幅2.88m、深さ42~50cmを測る。溝は北東方向に延びる。壁は傾斜を持って立ち上がり、底部は平坦な「U」字形を呈する。覆土はロームブロックを多く混入しているが、自然の堆積を示している。

出土遺物 本溝からの遺物は出土していない。



第32図 有田東遺跡全測図

第八章 有田東遺跡の遺構と出土遺物

I 住居跡

有田東遺跡からは16ヶ所の住居跡が検出されているが、調査区域が狭長であるために、住居跡の全容を把握することは不可能であった。炉を伴う住居跡は1ヶ所、カマドを伴う住居跡が5ヶ所で確認されている。出土遺物は土師器が多数を占め、須恵器等の出土は少ない。

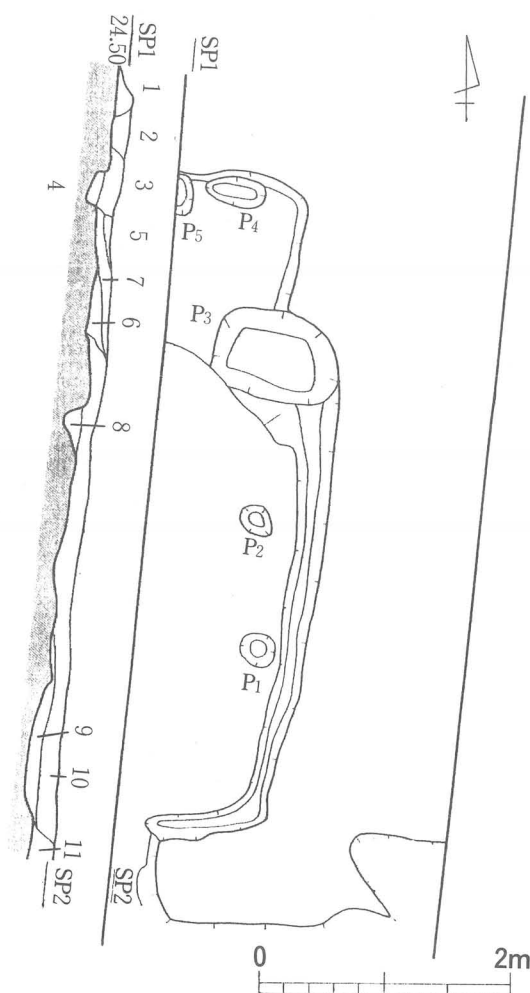
1. 1-7住居跡 (第33図)

南北に延びる調査区1区の南部に位置する住居跡である。住居跡の西部は調査区域外となっており、住居跡東部約1/3を調査したものである。住居跡の北と南部は攪乱を受けている。

形状 東西1.38mまで、南北4.20m、掘り込みの深さは約3cmを測る。平面形は方形を呈し、東壁の方向はN-11°-Eを向いている。床はやや軟弱であり踏み固められた痕跡は観察されなかった。壁は直立する。壁周堀は南壁の一部と東壁に沿って検出されている。壁周堀の規模は、幅15~26cm、深さ10cmである。ピットは5ヶ所で検出されているが、住居跡に伴うかは不明である。住居跡に伴うカマド等は発見されていない。
出土遺物 住居跡からは土師器小破片が数点出土しているが、図示できる遺物はない。

土層説明

- 1 暗褐色土 柔らかい
- 2 暗褐色土 ローム粒を多く含む
- 3 暗褐色土 ローム小ブロックを含む
- 4 黒褐色土
- 5 暗褐色土
- 6 暗褐色土 鈍いローム灰褐色土を混入
- 7 暗褐色土 ローム小ブロックを多く混入ややしまりがある
- 8 黒褐色土
- 9 暗褐色土 ローム粒を少量含む
- 10 暗褐色土 ローム粒、灰褐色土を混入
- 11 暗褐色土 ローム粒を混入

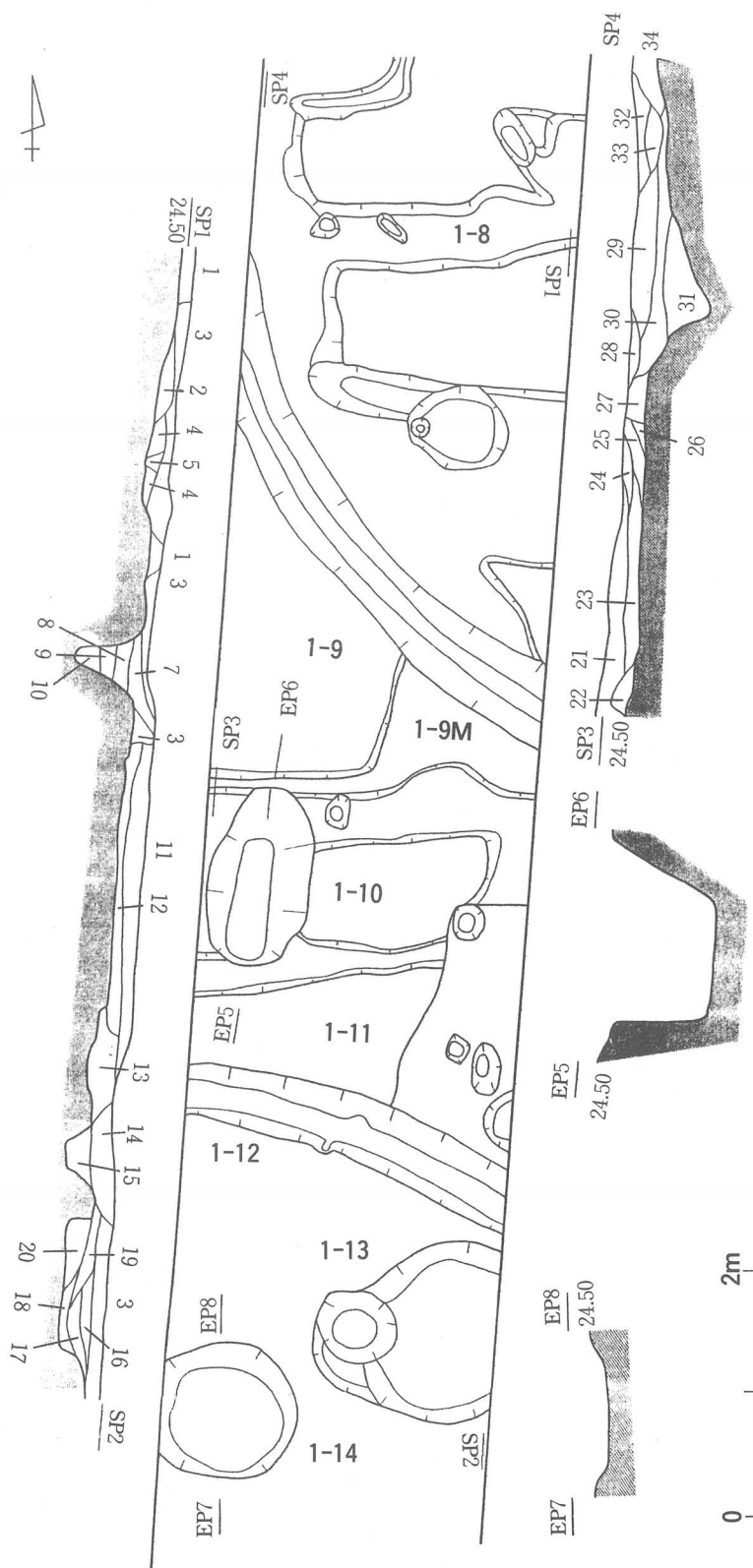


第33図 1-7住居跡 (1:60)

1-7住居跡ピット一覧表

(単位=cm)

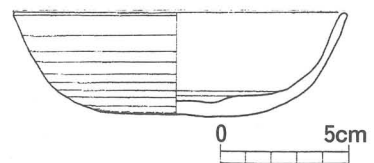
No.	径	深	形状	備考	No.	径	深	形状	備考	No.	径	深	形状	備考
1	28×28	12	円形		2	28×24	10	円形		3	103×73	31	方形	攪乱?
4	50×24	12	楕円	攪乱	5	15×33	6	方形	1/2調査					



第34図 1-8~14遺構図 (1:60)

土層説明

- 1 明褐色土
- 2 暗褐色土 よくしまっている
- 3 暗褐色土
- 4 暗褐色土 ロームを多く含む
- 5 暗褐色土 柔らかくサラサラする
- 6 暗黄褐色土
- 7 暗褐色土 焼土小ブロックを含む
- 8 暗褐色土
- 9 暗褐色土 ロームを含む
- 10 暗褐色土 ローム、ローム粒を多く含む
含む柔らかい
- 11 暗褐色土 焼土粒を少量含む
- 12 暗褐色土 鈍いロームを多く含む
柔らかい
- 13 暗褐色土 明褐色土を含みややしまりがある
- 14 暗褐色土 鈍いロームを少量含む
- 15 暗褐色土 ローム粒をやや多く含む
- 16 暗褐色土 ローム粒、焼土粒を含む
- 17 暗褐色土 ローム粒を多く含む
やや明るい
- 18 暗褐色土 ロームブロックを含みややしまりがある
- 19 暗褐色土 ローム粒、焼土粒をやや多く含む
- 20 暗褐色土 焼土粒を多くローム粒を含む
- 21 暗褐色土 焼土小ブロックを含む
- 22 暗褐色土 灰褐色粘土を多く含む
- 23 暗褐色土 ロームブロック焼土粒を少量含む
- 24 暗褐色土
- 25 暗褐色土 ローム粒を含む
- 26 暗褐色土 しまりがある
- 27 暗褐色土 硬くしまっている
- 28 暗褐色土 ロームブロックを含む
- 29 暗褐色土 褐色土を混入
- 30 暗褐色土 ローム粒を含む
- 31 暗褐色土 ロームブロックを多く含む、
柔らかい
- 32 暗褐色土 鈍いロームを混入する
- 33 暗褐色土 鈍いロームブロックを多く含む
- 34 暗褐色土 ローム粒を混入



第35図 1-9出土遺物 (1:3)

2. 1-9住居跡 (第34図)

南北に延びる調査区1区の南部に位置する。僅かに遺存する床によって確認された住居跡である。住居跡西部は調査区域外となり、北部は溝(1-9M)、北東部は浅い溝によって切られている。形状 東西1.30m、南北2mまで測り、掘り込みの深さは5cmを測る。平面形は方形を呈するであろう。南壁はN-90°-Eを向いている。床は一部に堅緻な部分が観察されるが、全体としては軟弱である。壁は直立する。壁周堀やピット及びカマド等は検出されていない。

出土遺物 (第35図) 住居跡からは数点の土師器破片が出土している。図示した遺物は、住居跡床面から出土したものである。

表-10 1-9住居跡出土遺物観察表

(単位=cm)

No.	器種	法量	形態・成形手法	調整方法	胎土・色調	備考
35-1	土師器 坏	口径 13.1 器高 4.0	ロクロ使用、ヘラ 切り 底部は平底	底部やや雑な整形 内面ヘラミガキ	外面褐色、内面黒褐色~暗褐色、胎土小石、雲母少量含む、焼成良	1/4欠損

3. 2-1住居跡 (第36図)

東西に延びる調査区2区の最も東に位置する住居跡である。住居跡の北部は調査区域外となり、僅かに南部の1/5を三角形に調査したものである。

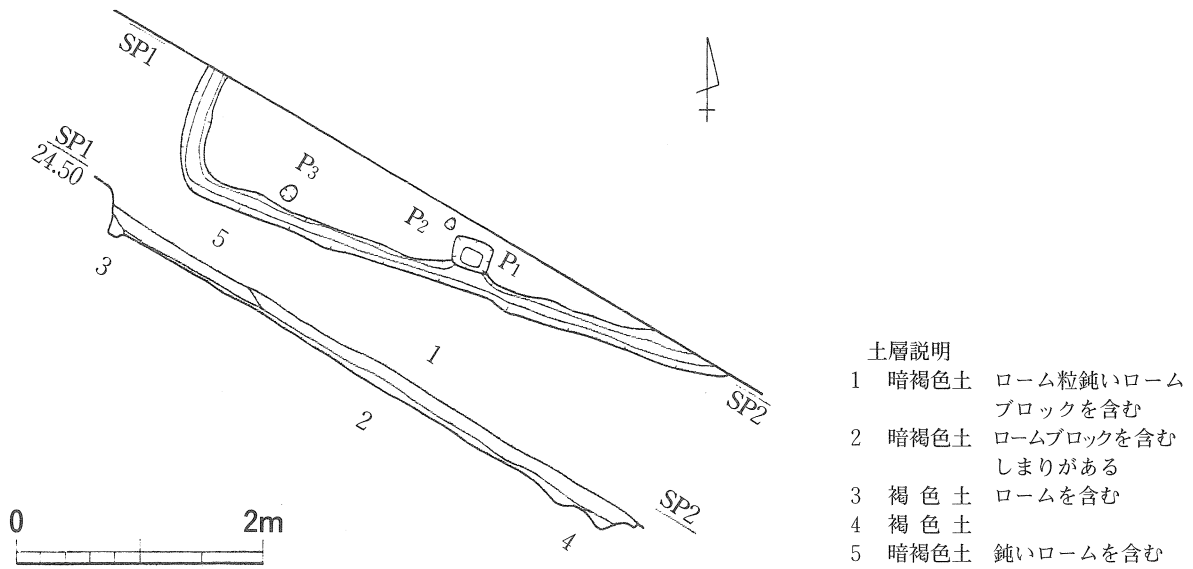
形状 東西4.82m、南北1mまで、掘り込みの深さは15cmを測る。平面形は方形を呈する。南壁の方向はN-110°-Eを向いている。床は良好に踏み固められているが、木の根の痕跡であろうか多数の小さなピットが観察される。壁は直立する。壁周堀は西壁と南壁に沿って検出されているが、住居跡を一周するものと推定される。壁周堀の規模は幅15~18cm、深さ11cmを測る。ピットは3ヶ所で検出されている。P1は方形を呈し住居跡を切って掘り込まれ、P2とP3は攪乱であろう。住居跡に伴うカマド等は発見されていない。

出土遺物 本住居跡に伴う遺物は出土していない。

2-1住居跡ピット一覧表

(単位=cm)

No.	径	深	形状	備考	No.	径	深	形状	備考	No.	径	深	形状	備考
1	33×24	36	方形	攪乱	2	10×11	10	楕円	攪乱	3	12×14	9	方形	攪乱



第36図 2-1住居跡 (1:60)

4. 2-3住居跡 (第37図)

東西に延びる調査区2区の東部に位置する住居跡である。住居跡の南部約1/3は調査区域外である。住居跡の掘り込みは見られず、床を確認して調査した住居跡である。

形状 東西4.35m、南北2.35mまで測る。住居跡の掘り込みは見られない。平面形は方形を呈し、主軸方向はN-24°-Eである。床は堅く良好な保存状態であった。壁周堀は東と西壁に沿って検出され、幅20~30cm、深さ6~10cmを測る。ピットは7ヶ所で検出されている。P1、P3、P6、P7が、ピットの位置や形状等から住居跡に伴う柱穴であろう。

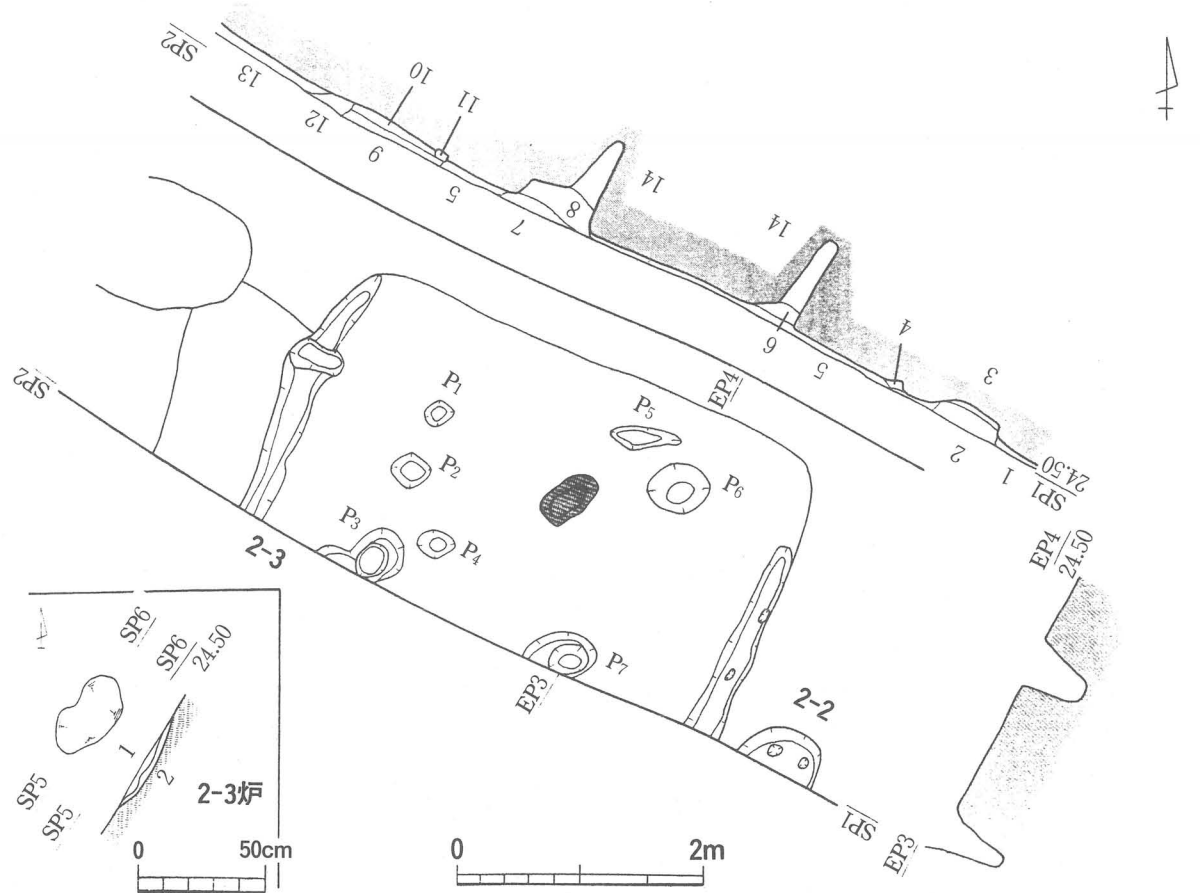
炉 (第37図) 炉は住居跡の北部、やや東に偏って発見されている。炉は地床炉である。炉の規模は東西25cm、南北40cmを測り、床面から5cmほど掘り下げている。炉の覆土から焼土は多く観察されていないが、炉床は良好に焼けている。

出土遺物 本住居跡に伴う遺物は出土していない。

2-3住居跡ピット一覧表

(単位=cm)

No.	径	深	形状	備考	No.	径	深	形状	備考	No.	径	深	形状	備考
1	18×22	43	円形	柱穴	2	27×26	10	方形		3	40×48	36	不整	柱穴
4	27×22	23	楕円		5	45×21	15	不整		6	40×40	53	円形	柱穴
7	45×36	53	円形	柱穴										



- 土層説明 (炉)
- 1 暗褐色土 焼土ブロックを多量に含む、サラサラしている
 2 明黄褐色土 生焼けのローム
- 土層説明
- 1 褐色土 ロームを含む
 2 黒褐色土 鈍いロームブロックを少量含む
 3 黒褐色土 ロームブロックを多く含む
 4 褐色土 ロームブロックを混入
 5 暗褐色土 ややしまりがある
 6 暗褐色土 ロームを多く含む
 7 暗褐色土
 8 暗褐色土 ローム粒を多く含むしまりあり
 9 暗褐色土 ローム粒、鈍いロームを多く混入
 10 暗褐色土 褐色土を少量含む
 11 褐色土 ロームを多く含むやしまりがある
 12 暗黄褐色土 ローム粒、ロームを多量に含む
 13 暗褐色土 ロームブロックを含む
 14 明黄褐色土

第37図 2-2土坑、2-3住居跡 (1:60) と炉 (1:30)

5. 2-5住居跡 (第38図)

東西に延びる調査区2区の中央部に位置する住居跡である。住居跡の南部は調査区域外であり、住居跡北側の約2/3が調査対象となった。

形状 東西3.70m、南北2.80mまで、掘り込みの深さは3~5cmを測る住居跡である。平面形は方形を呈し、主軸方向はN-97°-Eである。床は良く踏み固められている。壁周堀は西と北壁に沿って巡っている。壁周堀の規模は幅18~24cm、深さ8cmである。ピットは3ヶ所で検出されている。P1は住居跡の北西コーナー部に位置し、壁が緩やかに立ち上がる円錐形を呈する。P3は住居跡の中央部に位置し、直立する壁を持った円筒形を呈する。いずれのピットも住居跡に伴うかは明瞭ではない。

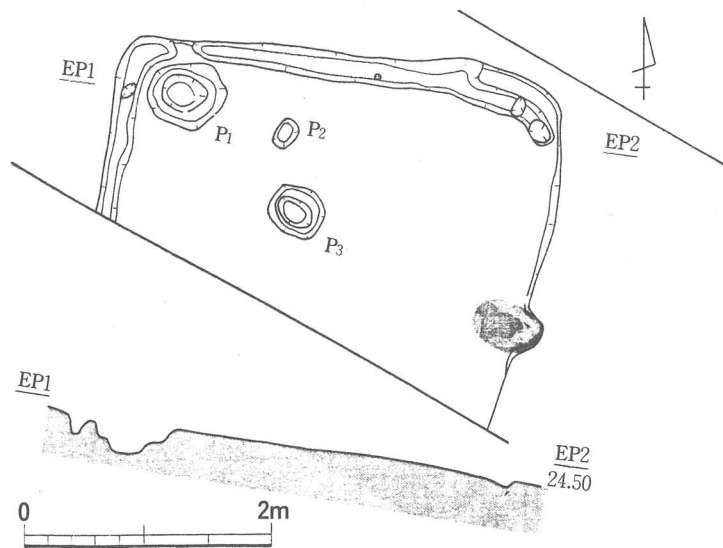
2-5 住居跡ピット一覧表

(単位=cm)

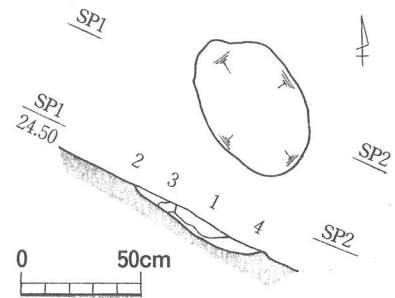
No.	径	深	形状	備考	No.	径	深	形状	備考	No.	径	深	形状	備考
1	62×56	30	円形		2	18×27	16	方形		3	47×42	44	円形	

カマド (第39図) カマドは住居跡東壁の中央部に造られている。掘り込みが浅い住居跡であるために、カマドの遺存状態は不良である。カマドは全長58cm幅40cmを測り、東壁を21cm掘り込んで構築されている。燃焼部は床面を約4cm掘り下げ、緩やかな傾斜を持って煙導部へと移行している。カマドは粘土を主な構築材として用いていると思われるが、粘土等が観察される量は少ない。カマドから遺物は出土していない。

出土遺物 住居跡からは土師器小破片が数点出土しているが、図示できる遺物は出土していない。



第38図 2-5 住居跡 (1:60)



土層説明

- 1 暗茶褐色土 焼土ブロック焼土粒を多く含む
- 2 暗褐色土 ローム粒を多く含む
- 3 明褐色土 鈍いローム
- 4 明黄褐色土 ローム

第39図 2-5 カマド (1:30)

6. 2-6 住居跡 (第40図)

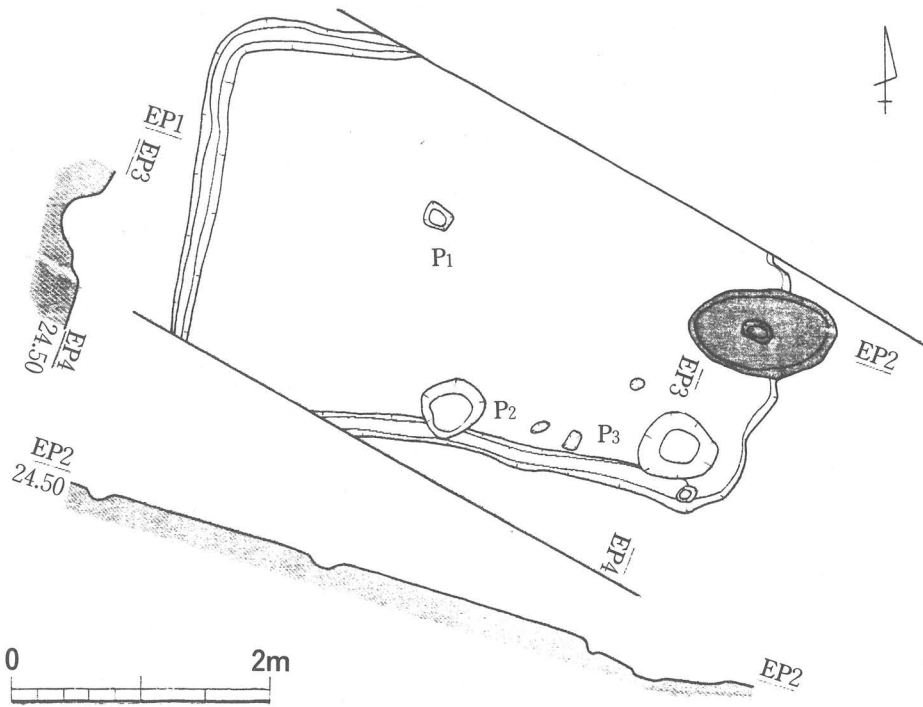
東西に延びる調査区2区の中央部、2-5住居跡の西に隣接する住居跡である。住居跡の南西及び北東コーナー部が調査区域外となっており、住居跡の約4/5を斜に縦断するように調査した。

形状 東西4.75m、南北3.15mを測る。掘り込みは見られず、ローム層上面が住居跡の床である。平面形は東西に長い長方形を呈し、主軸方向はN-105°-Eである。床は良好な保存状態である。壁周堀はカマド周辺を除いて住居跡を一周している。壁周堀の規模は幅15~18cm深さ7~10cmである。ピットは3ヶ所で検出されている。P3は南東コーナー部、カマドの南に掘り込まれている。P3の位置や形状等から考慮すると貯蔵穴であろう。

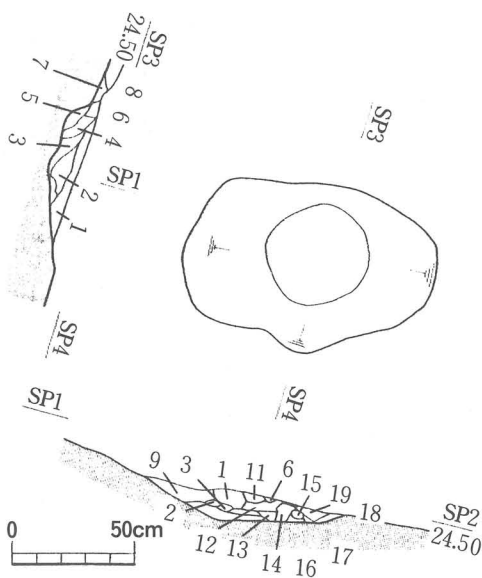
2-6 住居跡ピット一覧表

(単位=cm)

No.	径	深	形状	備考	No.	径	深	形状	備考	No.	径	深	形状	備考
1	23×18	8	方形		2	52×50	23	円形		3	58×52	26	円形	貯蔵穴



第40図 2-6住居跡 (1:60)



第41図 2-6カマド (1:30)

土層説明

- | | | |
|----|-------|-----------------|
| 1 | 暗褐色土 | ローム粒、粘土粒を含む |
| 2 | 暗灰褐色土 | ローム粘土を主体 |
| 3 | 暗茶褐色土 | 焼土を主体 |
| 4 | 暗褐色土 | 粘土を多く含む柔らかい |
| 5 | 褐色土 | 鈍いローム柔らかい |
| 6 | 灰褐色土 | 粘土 |
| 7 | 暗褐色土 | 粘土粒を含む柔らかい |
| 8 | 暗褐色土 | 焼土粒粘土粒を多く含む |
| 9 | 黒褐色土 | 10 赤褐色土 焼土 |
| 11 | 暗茶褐色土 | 焼土ブロック主体暗褐色土混入 |
| 12 | 暗褐色土 | ローム、粘土粒を多く含む |
| 13 | 褐色土 | 鈍いロームブロック主体 |
| 14 | 黄褐色土 | ローム柔らかい |
| 15 | 暗黄褐色土 | 鈍いローム暗褐色土混入 |
| 16 | 暗褐色土 | 黒か埴土ローム混入 |
| 17 | 黒褐色土 | |
| 18 | 暗灰褐色土 | 粘土主体 |
| 19 | 暗茶褐色土 | 焼土ブロックを主体黒色土を混入 |

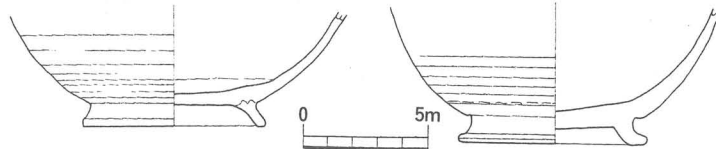
カマド (第41図) 住居跡東壁の中央部に位置する。掘り込みが見られない住居跡であるため、カマドの多くが削平されており、良好な保存状態ではない。カマドの規模は全長103cm幅70cm、東壁を45cm掘り込んで構築されている。燃烧部は床面から10cm掘り込み、緩やかな傾斜を持って煙導部へ続いている。カマドは灰褐色粘土を主な構築材として利用している。

出土遺物 (第42図) 住居跡からは、数点の土師器破片が出土している。図示した遺物は、カマド周辺から出土した高台付碗形土器である。

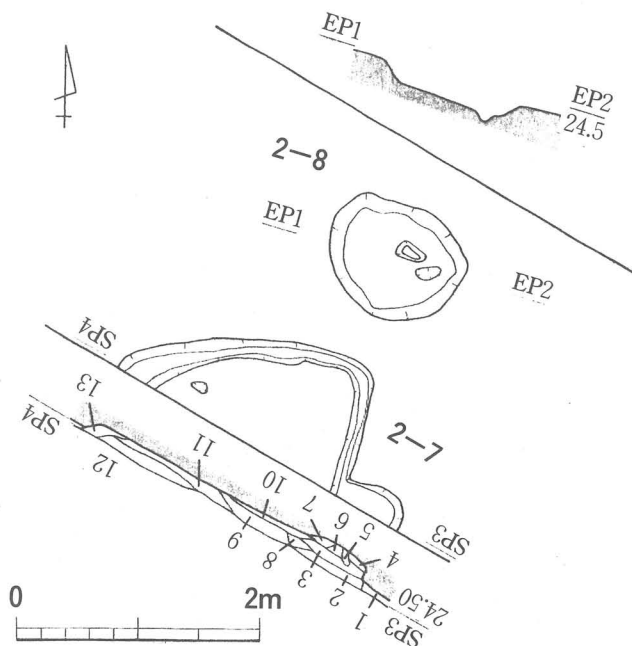
表-11 2-6 住居跡出土遺物観察表

(単位=cm)

No.	器種	法量	形態・成形手法	調整方法	胎土・色調	備考
42-1	土師器 高台椀	口径 — 高台径 7.5 高台高 0.7	ロクロ使用、 ヘラ切り	内面ヘラミガキ	内外面 褐色 胎土 雲母少量含む 焼成良	カマド内出土 口縁部欠損
42-2	土師器 高台椀	口径 — 高台径 7.4 高台高 0.9	ロクロ使用、 糸切り	内面ヘラミガキ	外面 褐色～暗橙褐色 内面 黒色 胎土 雲母混入 焼成 良	カマド付近出土 口縁部、坏部 1/2 欠損



第42図 2-6 出土遺物 (1:3)



土層説明

- 1 明黄褐色土 ローム
- 2 暗褐色土 粘土粒焼土粒を含む
- 3 褐色土 焼土粘土ブロックを多く含む、炭化物を混入
- 4 褐色土 粘土を多く含む
- 5 黄褐色土 ロームブロック
- 6 暗褐色土 黒褐色土を多く含む
- 7 褐色土
- 8 暗褐色土 鈍いロームローム粒を多く含む
- 9 暗褐色土 ローム粒を多く含む
- 10 暗褐色土 ローム粒を含むしまりがある
- 11 暗褐色土 ローム粒を少量含むややしまりがある
- 12 暗褐色土 鈍いロームブロックを混入
- 13 明褐色土

第43図 2-7 住居跡、2-8 土坑 (1:60)

7. 2-7 住居跡 (第43図)

東西に延びる調査区2区の中央部に位置する。北西コーナー部を三角形に調査した住居跡である。住居跡の東部は攪乱を受けている。形状は明瞭でない落ち込みであるが、床の状態や壁周堀の存在等から住居跡であろうと推定した遺構である。

形状 東西2.10mまで、南北1.05mまで測り、掘り込みの深さは浅く4cmである。平面形は方形を呈する。床は軟弱である。壁周堀は北及び東壁に沿って検出されている。壁周堀の規模は幅14~30cm、深さ7cmである。ピットや炉或いはカマド等は発見されていない。

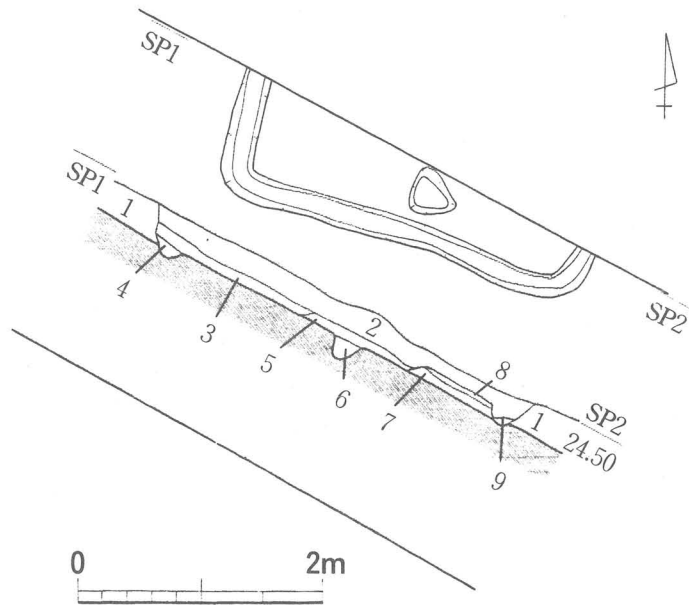
出土遺物 住居跡から遺物は発見されていない。

8. 3-1 住居跡 (第44図)

東西に設定された調査区3区の中央部に位置する。住居跡の北部約2/3が調査区外である。

形状 東西3.18m、南北1mまで測り、掘り込みはほとんど見られず、壁周堀と床をもって確認した住居跡である。平面形は方形を呈し、南壁の方向はN-108°-Eを示している。床はやや軟弱である。壁周堀は三方向の壁に沿って検出されており、規模は幅20~25cm深さ8~10cmを測る。南壁に沿ってP1が検出されているが、住居跡を切っており本住居跡に伴うピットではない。P1の形状は40×35cm、深さ20cmを測り方形を呈する。カマド等は発見されていない。

出土遺物 本住居跡から遺物は発見されていない。



土層説明

- 1 褐色土
- 2 暗褐色土 焼土粒を含む
- 3 暗褐色土 鈍いロームを含むやや明るくしまりがある
- 4 暗褐色土 褐色土を混入
- 5 暗褐色土 ロームブロックを含みややしまりがある
- 6 暗黄褐色土 ロームブロックを多量に含む
- 7 暗褐色土 やや暗い
- 8 暗褐色土 褐色土ブロック粘土ブロックを含むしまりがある
- 9 褐色土

第44図 3-1 住居跡 (1:60)

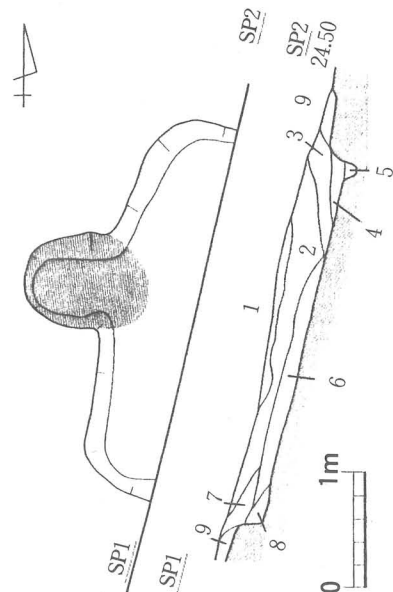
9. 4-5 住居跡 (第45図)

南北に延びる調査区4区の中央部に位置する住居跡である。住居跡の東2/3は調査区域外となっており、住居の北側部分を調査したものである。

形状 東西0.70mまで、南北3.08m、掘り込みの深さ33cmを測る。平面形は方形を呈し、主軸方向はN-7°-Wである。床は比較的良く踏み固められている。壁は直立する。壁周堀やピットは検出されなかった。覆土は暗褐色土を主体とし、自然の堆積状態を示している。

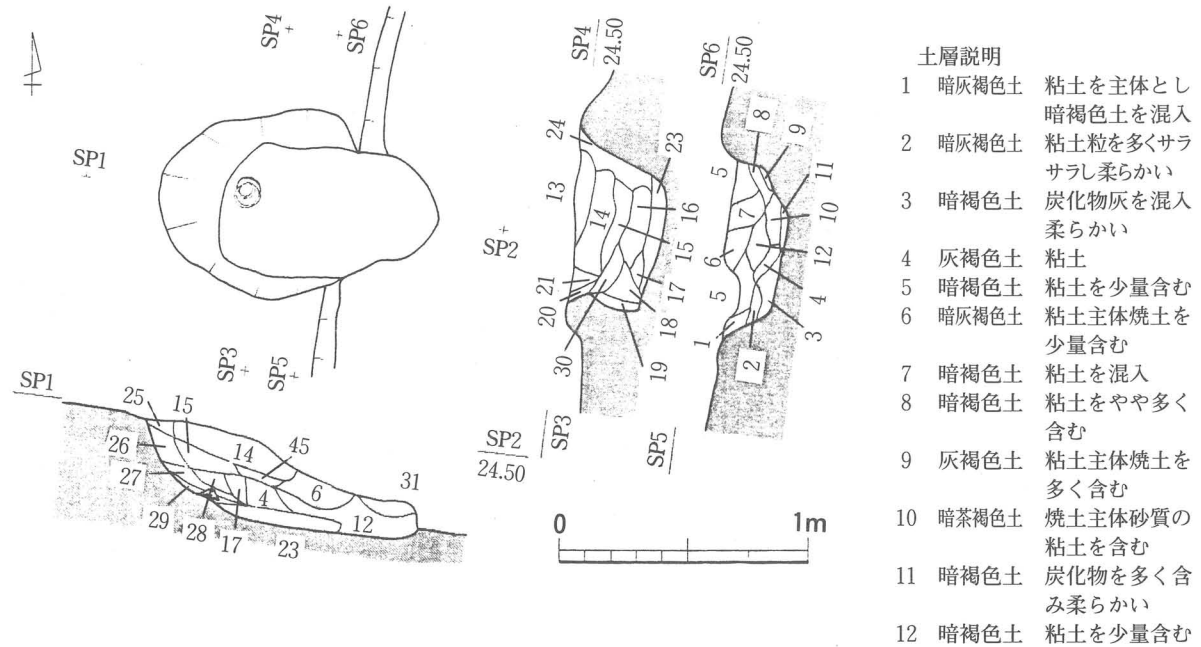
土層説明

- 1 暗褐色土
- 2 暗褐色土 ローム粒をやや多く含む
- 3 暗褐色土 鈍いロームを少量含む
- 4 暗褐色土 ローム粒を少量含む
- 5 褐色土 ロームを多く暗褐色土を少量混入
- 6 暗褐色土 ローム粒鈍いロームを少量含む
- 7 暗褐色土 ローム粒を混入
- 8 暗褐色土 ローム粒を含むやや暗い
- 9 褐色土 やや赤みを帯びるしまりがある



第45図 4-5 住居跡 (1:60)

カマド (第46図) カマドは西壁の中央部に設置されている。カマドの規模は全長114cm幅78cmを測り、西壁を75cm穿って構築されている。燃烧部は住居床よりも8cm掘り下げ、緩やかに立ち上がりながら煙導部へと移行している。カマドは粘土を用いて造られ、袖部や煙導部等の遺存状態は良好である。カマド中央部やや西から支脚として利用されたであろう高台付椀形土器が、伏せられた状態で出土している。



- | | | | | | | | | | | |
|----|-------|----------------------|----|-------|-------------|------|----------|------------|-------|----------|
| 13 | 黒褐色土 | 焼土粒を多く含む | 14 | 暗灰褐色土 | 粘土を主体 | 15 | 黒褐色土 | 16 | 暗灰褐色土 | 粘土主体柔らかい |
| 17 | 暗茶褐色土 | 焼土 | 18 | 暗褐色土 | 粘土粒焼土粒を含む | 19 | 暗褐色土 | 粘土粒を含み柔らかい | | |
| 20 | 暗茶褐色土 | 焼土粒を多く含みしまり粘性がある | 21 | 黒褐色土 | 22 | 灰褐色土 | 粘土焼土柔らかい | | | |
| 23 | 黒褐色土 | 炭化物を含み柔らかい | 24 | 暗茶褐色土 | 焼土を主体とする | 25 | 暗茶褐色土 | 焼土ブロック主体 | | |
| 26 | 暗褐色土 | 焼土を含み柔らかい | 27 | 暗褐色土 | 焼土ブロックを多く含む | | | | | |
| 28 | 暗褐色土 | 焼土ブロックを多く含むサラサラし柔らかい | 29 | 暗褐色土 | 焼土粒を少量含む | | | | | |
| 30 | 暗褐色土 | 粘土粒焼土ブロックを多く含むサラサラする | 31 | 灰褐色土 | 粘土 | | | | | |

第46図 4-5カマド (1:30)

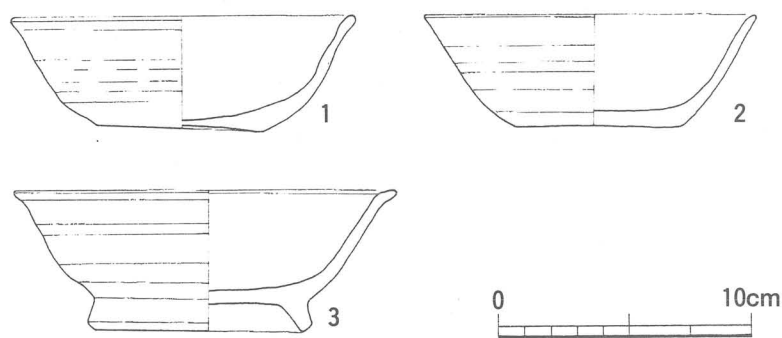
出土遺物 (第47図)

住居跡からは土師器破片が十数点出土している。図示した遺物はカマド及びその周辺から出土したものである。

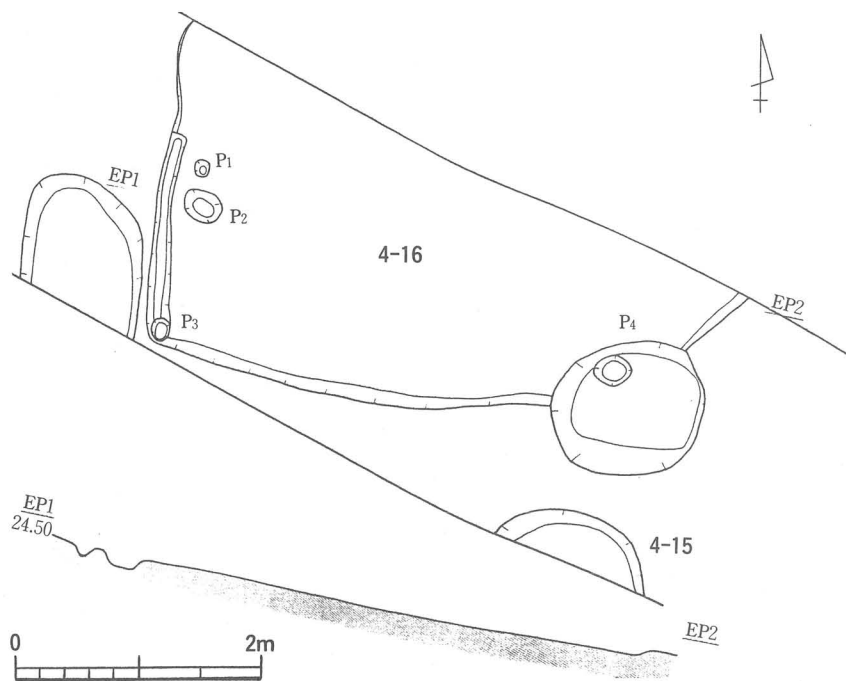
表-12 4-5 住居跡出土遺物観察表

(単位=cm)

No	器種	法量	形態・成形手法	調整方法	胎土・色調	備考
47-1	土師器 坏	口径 14.1 器高 4.7	ロクロ使用、ヘラ切り	内面ヘラミガキ 外面やや風化している	外面暗橙褐色黒色斑有り、 内面口縁部褐色、底部黒色、 胎土雲母少量含む、焼成良	カマド内出土 1/3 欠損
47-2	土師器 坏	口径 13.2 器高 4.6	ロクロ使用、ヘラ切り		外面橙褐色、黒斑有り、 内面黒色 胎土小石雲母混入 焼成良	カマド付近出土 1/4 欠損
47-3	土師器 高台付 椀	口径 15.7 器高 5.9 高台高 1.2	ロクロ使用 口縁部外反する	内外面ともに丁寧な調整	褐色 雲母を少量混入 焼成は良好	坏部 1/2 欠損



第47図 4-5 出土遺物 (1:3)



第48図 4-16住居跡、4-15土坑 (1:60)

10. 4-16住居跡 (第48図)

東西に延びる調査区に位置する住居跡である。住居跡の掘り込みはほとんど見られず、遺構確認が住居跡の床であった。住居跡の北側約1/4は調査区域外である。南東コーナー部と東部及び西部には後世の攪乱と思われる楕円形の落ち込みが、住居跡の床を切って掘り込まれている。

形状 東西4.75m、南北2.6mを測る。平面形は方形を呈するであろうが、東壁がやや北東に開いている。主軸方向はN-7°-Eである。床は比較的良好な遺存状態である。壁は観察できない。壁周堀は西壁の一部から検出され、幅15~20cm、深さ12cmを測る。ピットは4ヶ所で検出されているが、住居跡に伴うかは不明である。P4は、東西110cm南北128cm深さ15cmを測るの後世の掘り込みに、25×25cm-9cmのピットが掘り込まれている。カマド等は検出されていない。

出土遺物 住居跡からは少量の土師器小破片が出土しているが、図示できる遺物は出土していない。

4-16住居跡ピット一覧表

(単位=cm)

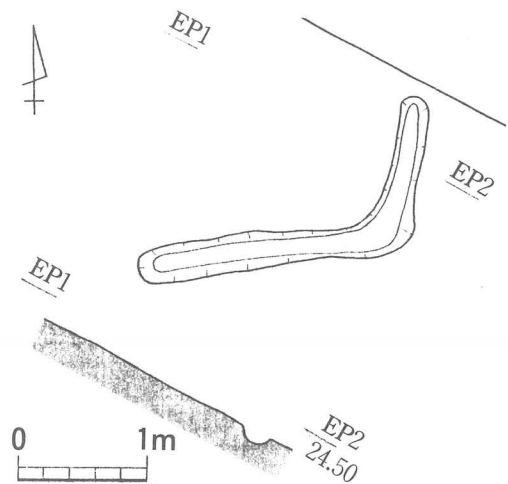
No	径	深	形状	備考	No	径	深	形状	備考	No	径	深	形状	備考
1	14×16	16	楕円		2	36×30	12	楕円		3	20×22	12	楕円	
4	110×128	15	円形											

11. 4-18住居跡 (第49図)

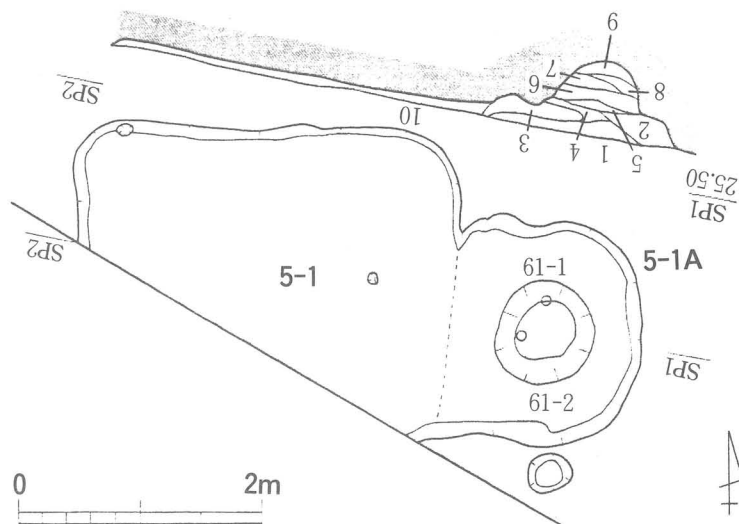
東西に延びる調査区4区の西部に位置する。住居跡の掘り込みは見られず、南東コーナー部の屈折した壁周堀の一部と、比較的良好に踏み固められた床の一部を検出して住居跡と判断したものである。

形状 東壁1.20m、南壁2.15mを測る。平面形は壁周堀の形状から方形を呈するであろう。良好な保存状態の床が、部分的にはあるが検出されている。ピットやカマド等は発見されていない。

出土遺物 本住居跡に伴う遺物は出土していない。



第49図 4-18住居跡 (1:60)



第50図 5-1住居跡 (1:60)

土層説明

- 1 褐色土 ローム粒鈍いロームを多く含む
- 2 暗褐色土 鈍いロームをごく少量含む
- 3 暗褐色土 ローム粒を少量含む
- 4 暗褐色土 ローム小ブロックローム粒を多量に含む
- 5 暗褐色土 鈍いロームブロックを含む
- 6 暗褐色土 ロームブロックを多く含みややしまりがある
- 7 黒褐色土
- 8 暗褐色土 ロームブロックを含みしま、粘性がある
- 9 暗褐色土 ローム粒混入やや粘性がある
- 10 暗褐色土 ローム焼土粒を含みややしまりがある

12. 5-1 住居跡 (第50図)

東西に延びる調査区の最も西に位置する住居跡である。住居跡の南側約1/3は調査区域外となり、住居跡の北側部分を調査したものである。住居跡の東は土坑と重複している。

形状 東西3.10m、南北2.30mまで、掘り込みの深さは5cmを測る。平面形は方形を呈し、主軸方向はN-88°-Eを示している。床は良く踏み固められており、遺存状態は良好である。壁は直立する。壁周堀やピット及び炉やカマド等は検出されなかった。住居跡の東部には、住居跡の壁や床を切って土坑(5-1A)が掘り込まれている。この土坑内から土師器坏形土器等が出土している。

出土遺物 本住居跡に伴う遺物は出土していない。

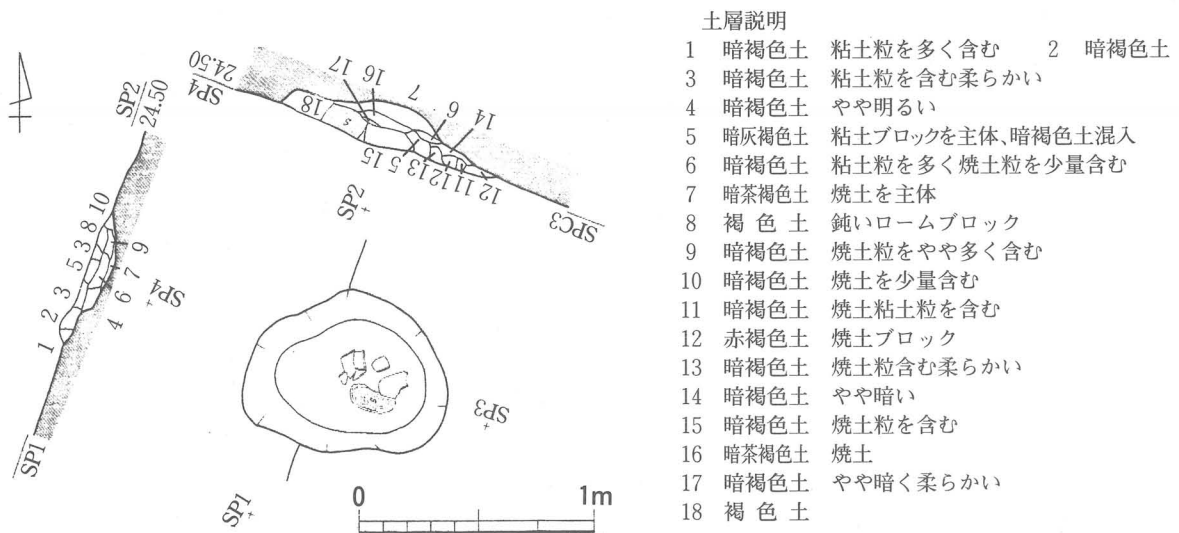
13. 5-2 住居跡 (第53図)

東西に延びる調査区の西部に位置する住居跡である。住居跡の西部と南部及び北部は調査区域外となっているために、住居跡の東壁に沿った僅かな部分を調査したものである。

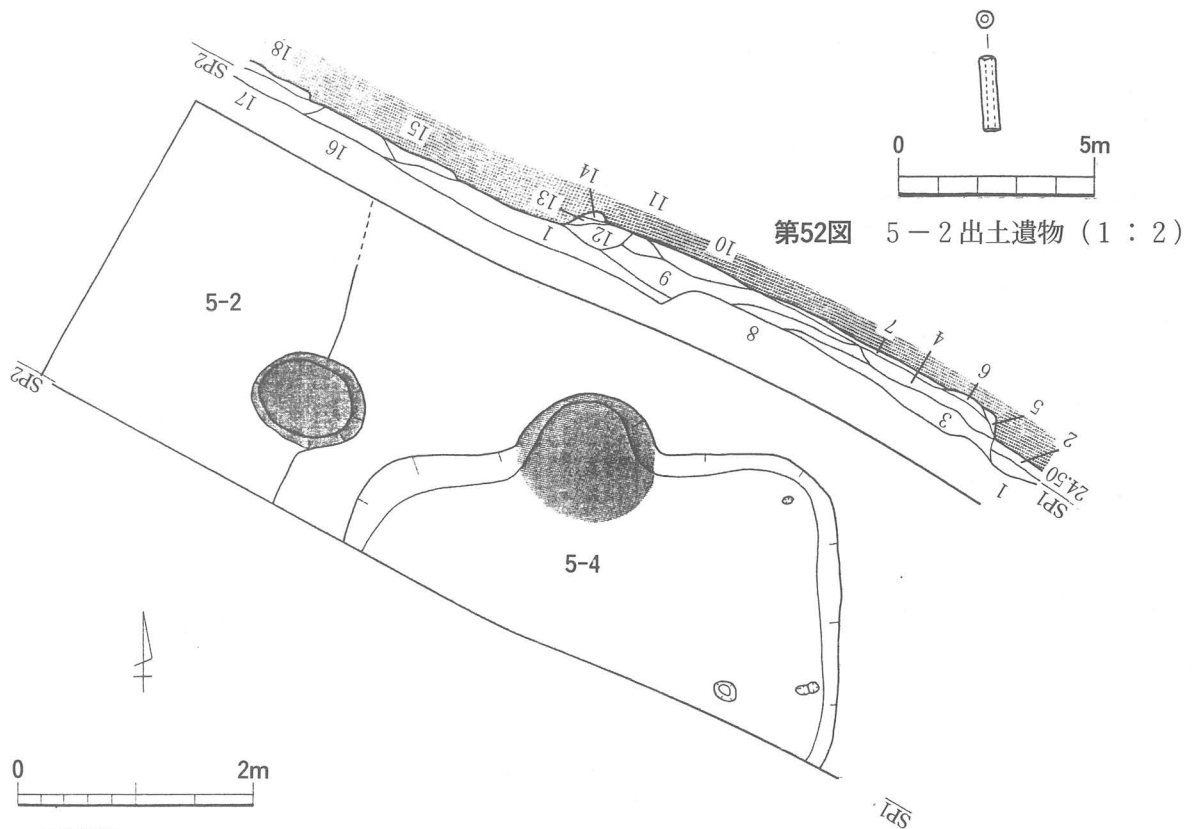
形状 住居跡の規模は不明であるが、東西1.5m南北2.4mまで調査した。平面形は東壁の状況から方形を呈するであろう。主軸方向はN-91°-Eである。床は比較的良好な遺存状態であるが、壁周堀やピット等は検出されていない。

カマド (第51図) カマドは住居跡東壁を穿って構築されている。カマドの規模は全長86cm、幅71cmを測り、東壁を53cm掘り込んでいる。燃烧部は床を7cm掘り下げ、緩やかな傾斜を持って煙導部へと続いている。カマドの保存状態は良好とは言えないが、粘土を主な材料としてカマドは構築されると推定される。カマドの中央部からは、支脚に使用されたであろう、焼けた長方体の石(高さ20cm、底辺10×8cm)が出土している。カマドからは数点の甕形土器胴部破片とともに石製管玉が1点出土している。

出土遺物 (第52図) 本住居跡から数片の土師器破片と石製管玉が出土している。土師器は小破片であり接合等が不可能であったために、図示できる土師器は出土していない。図示した石製管玉は、長さ2cm径4mmを測り、管玉の中心部に径2mmの孔が貫通している。



第51図 5-2 カマド (1:30)



第52図 5-2出土遺物 (1:2)

土層説明

- 1 暗褐色土 2 褐色土 3 暗褐色土 ローム粒焼土粒を少量混入 4 暗褐色土 ローム粒焼土粒をやや多く含む
 5 褐色土 鈍いロームブロック 6 暗褐色土 鈍いロームブロックを多く含む柔らかい 7 黒褐色土 硬くしまっている
 8 暗褐色土 焼土ブロックを少量含む 9 暗褐色土 鈍いロームブロックを少量含む
 10 暗褐色土 焼土粒を含みややしまりがある 11 暗褐色土 焼土粒をやや多く鈍いローム粘土を少量含む
 12 暗褐色土 焼土粒粘土粒をやや多く含む 13 褐色土 鈍いローム 14 褐色土 鈍いロームを少量含みやや暗い
 15 暗褐色土 粘土粒を多く含む 16 暗褐色土 鈍いロームを混入 17 暗褐色土 焼土ブロック焼土粒を少量含む
 18 暗褐色土 粘土粒を含むややしまりがある

第53図 5-2、4住居跡 (1:60)

14. 5-4住居跡 (第53図)

本住居跡は東西に延びる調査区の西部に位置する。住居跡の南部約1/2は調査区域外である。

形状 東西3.65m、南北2.45mまで測り、掘り込みの深さは14cmである。平面形は方形を呈し、主軸方向はN-3°-Eである。床は比較的良く踏み固められている。壁は直立する。壁周堀は検出されていないが、壁に沿って小さな凹凸が巡っている。ピットは3ヶ所で検出されている。P2とP3は壁柱穴の一部であろう。

5-4住居跡ピット一覧表

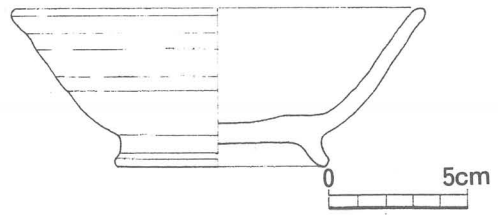
(単位=cm)

No.	径	深	形状	備考	No.	径	深	形状	備考	No.	径	深	形状	備考
1	18×14	11	不整		2	20×10	10	楕円	壁柱穴	3	10×10	10	円形	壁柱穴

カマド (第55図) カマドは住居跡の北壁の中央部を穿って構築されている。規模は全長92cm、幅71cmを測り、住居跡北壁を65cm掘り込んでいます。燃烧部は床面から5cm掘り下げ、緩やかな傾斜を持つ

て煙導部へと移行している。カマドは粘土を構築材として用い、カマド左袖部には甕形土器の胴部を中心に据えて補強している。カマドの保存状態は良好である。

出土遺物 (第54図) カマド及びカマド付近から土師器破片が出土しているが、いずれも小破片である。図示した遺物は、カマドから出土した、高台付椀形土器である。

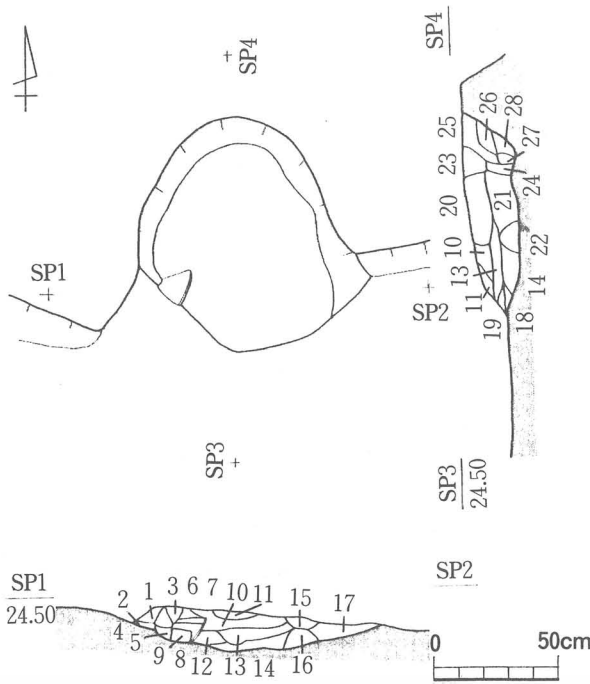


第54図 5-4 出土遺物 (1:3)

表-13 5-4 住居跡出土遺物観察表

(単位=cm)

No.	器種	法量	形態・成形手法	調整方法	胎土・色調	備考
54 -1	土師器 高台付 椀	口径 14.7 器高 5.8 高台径 7.6 高台高 0.9	ロクロ使用、ヘラ切り	内面ヘラミガキ 外面やや風化している	外面、褐色から暗褐色黒色 班有り 内面口縁部褐色底部黒色 胎土雲母少量含む 焼成良	カマド内出土 1/3欠損



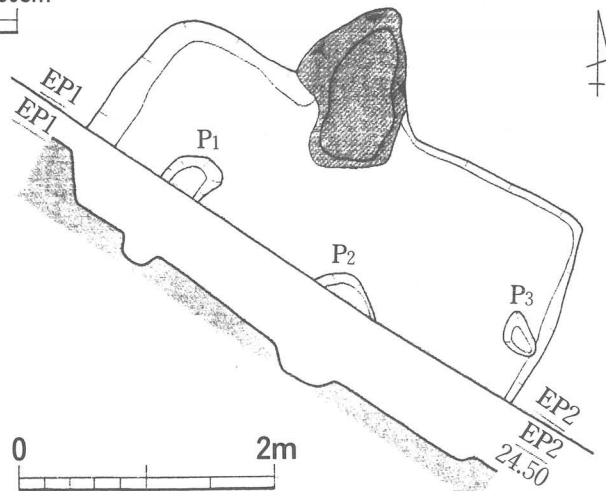
第55図 5-4 カマド (1:30)

土層説明

- 1 暗褐色土 焼土を少量含むややしまりがある
- 2 暗褐色土 3 暗褐色土柔らかい
- 4 褐色土 粘土を少量含む
- 5 暗褐色土 軟弱
- 6 褐色土 粘土多く焼土少量含む
- 7 褐色土 粘土多く含む
- 8 灰褐色土 粘土 9 灰褐色土 焼土少量含む
- 10 暗褐色土 やや暗い 11 赤褐色土 焼土
- 12 暗褐色土 焼土多い 13 暗灰褐色土 粘土多い
- 14 暗灰褐色土 粘土暗褐色土混入
- 15 暗褐色土 焼土粒を少量含む
- 16 暗灰褐色土 粘土を主体とする
- 17 暗灰褐色土 粘土を主体とし焼土を混入
- 18 暗褐色土 19 暗褐色土 粘土を混入
- 20 暗褐色土 焼土やや多く粘土混入ややしまりがある
- 21 暗褐色土 焼土混入 22 暗褐色土 焼土多い
- 23 暗褐色土 粘土やや多い
- 24 暗黄褐色土 鈍いローム
- 25 暗褐色土 焼土ブロック含む
- 26 暗褐色土 27 暗褐色土 柔らかい
- 28 暗黄褐色土 鈍いローム

15. 5-8 住居跡 (第56図)

東西に設定された調査区5区の東に位置する。住居跡の南部を調査区域外としており、住居跡の北部約1/2を調査した。本住居跡の付近から東方に向、地山(ローム)が緩やかに傾斜して、溺れ谷状の地形を造っている。この谷は幅約40m、現地表面からの深さ約1.5mの規模である。



第56図 5-8 住居跡 (1:60)

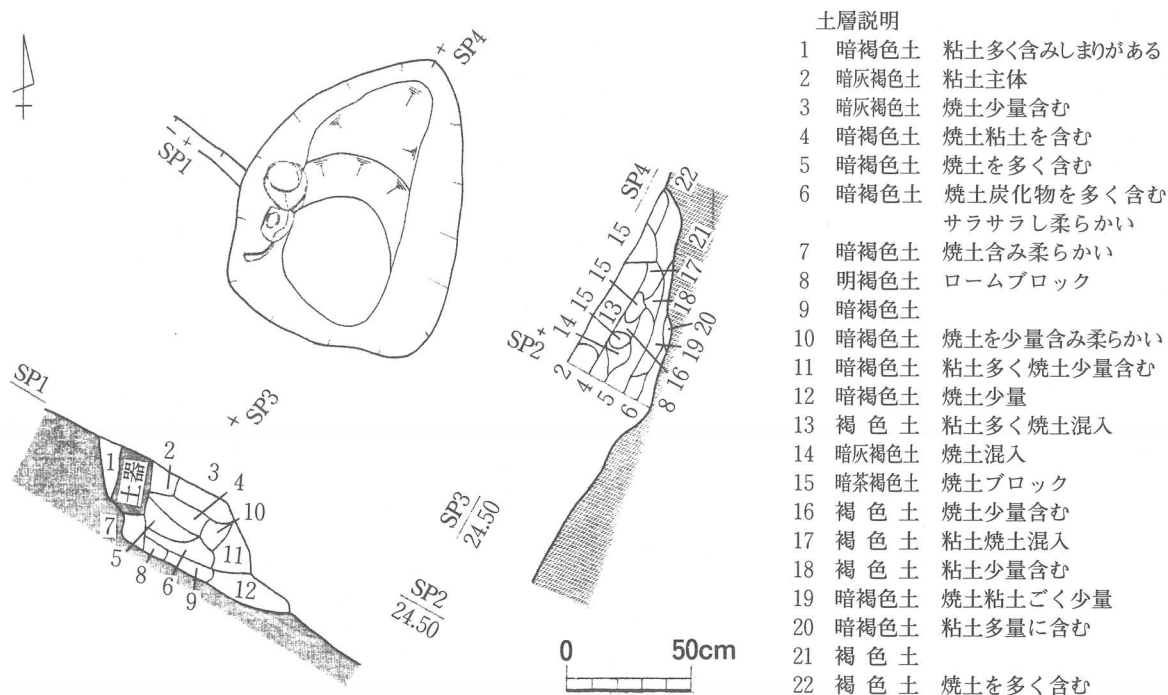
形状 東西4m、南北1.50mまで測り、掘り込みの深さは33cmである。平面形は方形を呈し、主軸方向はN-23°-Eである。床は良好な保存状態である。壁は直立している。壁周堀等は検出されていない。ピットは3ヶ所で検出されている。P2を除いて柱穴として使用されていたか不明である。カマドは北壁を穿って構築されている。

5-8住居跡ピット一覧表

(単位=cm)

No.	径	深	形状	備考	No.	径	深	形状	備考	No.	径	深	形状	備考
1	38×30	15	楕円		2	60×20	18	楕円		3	30×33	10	楕円	

カマド (第57図) カマドは住居跡北壁を穿って造られている。全長122cm、幅92cmを測り、住居跡北壁を75cm掘り込んでいる。燃烧部は床面を僅かに掘り込み、約7cmの段を持って煙導部に至る。煙導部はやや急な傾斜を有して立ち上がっている。カマドの構築材には粘土が用いられ、カマド左袖部には甕形土器が補強材として用いられている。袖部補強材は、甕形土器の1/2個体と底部破片及び胴部破片の3体が用いられ、カマド奥から手前に向い直線的に並んでいる。



第57図 5-8カマド (1:30)

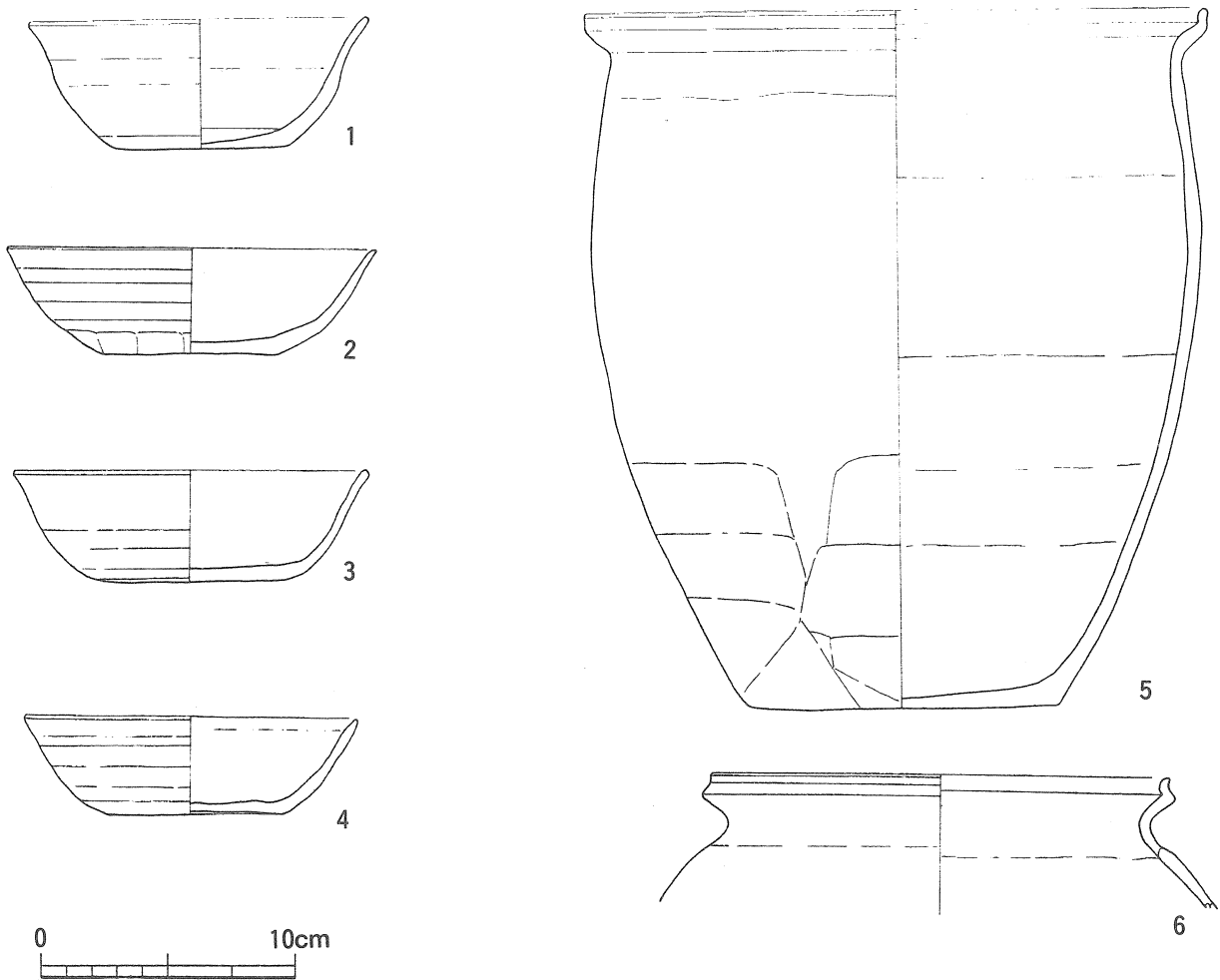
出土遺物 (第58図) 住居跡からは土師器を中心に土器片が出土している。遺物の多くがカマド周囲からの出土である。図示した坏形土器は、すべてロクロを使用している。

表-14 5-8住居跡出土遺物観察表

(単位=cm)

No.	器種	法量	形態・成形手法	調整方法	胎土・色調	備考
59-1	須恵器 坏	口径 13.4 器高 5.1	ロクロ使用、ヘラ切り 口縁部やや外反する		色調やや白色、底部黒褐色 胎土小石をやや多く含む、焼成良	3/4欠損 カマド内出土
59-2	土師器 坏	口径 14.7 器高 4.3	ロクロ使用、糸切り後 ヘラ調整	内面ヘラミガキ	外面褐色、内面黒色、 胎土雲母をやや多く含む、焼成良	口縁部、 底部一部欠損

No.	器種	法量	形態・成形手法	調整方法	胎土・色調	備考
59 -3	土師器 坏	口径 14.0 器高 4.5	ロクロ使用、ヘラ切り	内面ヘラミガキ	外面褐色～暗橙褐色、内面暗橙褐色、胎土雲母含む 焼成良	1/3欠損
59 -4	土師器 坏	口径 13.3 器高 4.0	ロクロ使用、ヘラ切り	内面ヘラミガキ	外面橙褐色、内面暗褐色～黒色 胎土雲母混入 焼成良	1/3欠損
59 -5	土師器 甕	口径 25.0 器高 27.8	口縁部稜を持って直立する	口縁部ナデ、胴部下 半大きなヘラ削り	色調褐色～暗褐色、胎土に小石を多く雲母を少量含む、焼成良	1/2欠損 カマド左袖部に使用
59 -6	土師器 甕	口径 18.6 器高 -	口縁部「く」字形に屈曲する	口縁部ナデ	色調橙褐色、胎土小石と少量の雲母、焼成良	1/3欠損 カマド内出土



第58図 5-8出土遺物(1:3)

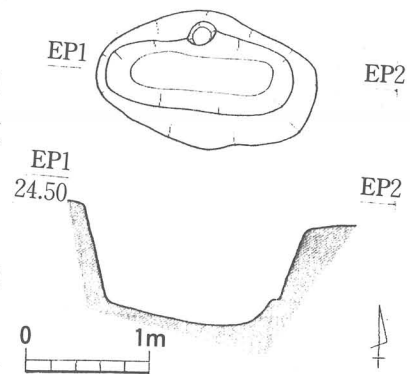
II 土坑

有田東遺跡からは24ヶ所の土坑が検出されている。その多くは造られた時代や性格等が不明な土坑であるが、幾つかの土坑はその形状等から土坑の性格等を推定される。縄文時代のいわゆる「落とし穴」と形状が類似する土坑や、古墳時代に造られたであろう土坑などである。

1. 縄文時代の土坑

縄文時代に属すると推定される土坑は2ヶ所である。

1-10 (第34図) 調査区1区の南部に位置する。平面形は長楕円形を呈し、規模は長軸1.44m 短軸84cm 深さ90cmを測る。壁は垂直に立ち上がり、底部は僅かに丸みを帯びるが、概して平坦である。覆土は暗褐色土を中心部に置き、周囲に褐色土、黄褐色土が堆積し、やや堅くしまった覆土である。堆積は自然の様相を示している。遺物は発見されていない。



2-4 (第59図) 調査区2区のほぼ中央部に位置する。平面形は長楕円形を呈し、規模は長軸1.80m 短軸1.10m 深さ91cmを測る。壁は垂直に立ち上がり、底部は僅かに丸みを帯びているが、概して平坦である。覆土は1-10土坑と類似し、褐色土、黄褐色土を主体とし、堅くしまった堆積をしている。遺物は出土していない。

第59図 2-4土坑 (1:60)

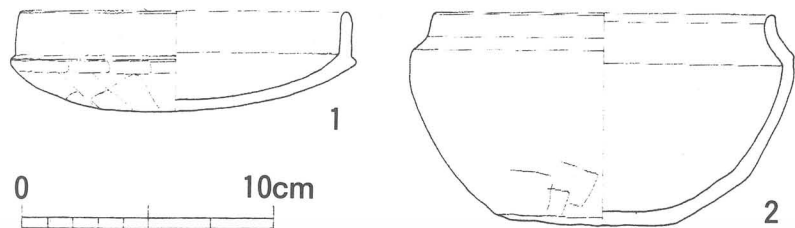
2ヶ所の土坑は、覆土の状態や形状が極めて良く類似しており、同一の性格を有する土坑である。2ヶ所の土坑は形状等から、土坑底に小ピットこそ検出されていないが、いわゆる縄文時代の「落とし穴」であると推察される。

2. 古墳時代の土坑

古墳時代に属するであろう土坑は、調査区5区から検出された5-1Aと5-6及び5-7土坑である。

5-1A (第50図)

5-1A土坑は調査区5区の最も西に位置する5-1住居跡と重複する。5-1住居跡の東に接し、住居跡床を切って掘り込まれている。形状



第60図 5-1A出土遺物 (1:3)

は円形を呈し、土坑底は丸みを帯びている。住居跡から張り出す様に径約180cm、深さ14cmの掘り込みがあり、さらに径78×85cm、深さ62cmの規模で掘り下げられている。

出土遺物 (第60図) 土坑の覆土中から土師器坏形土器と椀形土器が出土している。

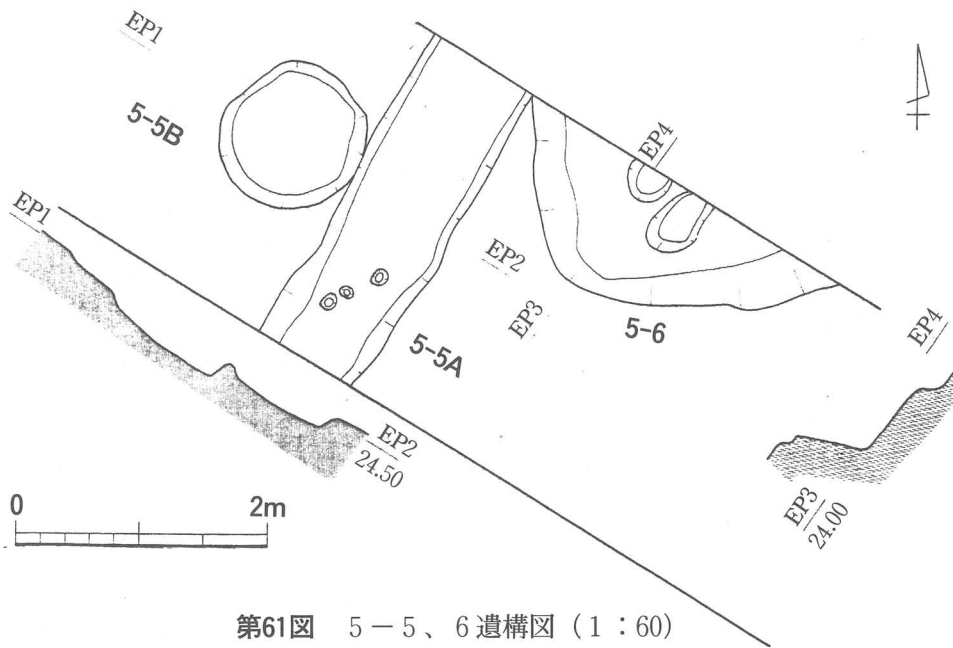
表-15 5-1A出土遺物観察表

(単位=cm)

No.	器種	法量	形態・成形手法	調整方法	胎土・色調	備考
60-1	土師器坏	口径 13.1 器高 3.9	口縁部下に稜を持つ 口縁部は直立する	口縁部ナデ、底部ヘラ削り、内面ナデ	内外面ともに黒色胎土 胎土小石雲母少量含む、焼成良	土坑内出土 内外面ともに丁寧な仕上げ
60-2	土師器椀	口径 13.8 器高 8.5	平底、口縁部湾曲する	口縁部ナデ、胴部やや雑なヘラ削り、内面ナデ	外面は褐色、内面及び口縁部は黒色、胎土雲母混入、焼成良	土坑内出土

5-6 (第61図) 5-6は調査区5区の中央部に位置する。遺構の南部を斜に調査したものである。東西2.84m、南北1.10mまで測る。掘り込みの深さは51cmである。平面形は方形を呈するであろう。壁は直立し、底部は平坦であるが、踏み固められた様相は認められなかった。床や壁周堀等を確認す

ることができなかったが、住居跡である可能性も残されている。土坑からは土師器小破片が出土しているが、図示できる遺物は発見されていない。



第61図 5-5、6遺構図 (1:60)

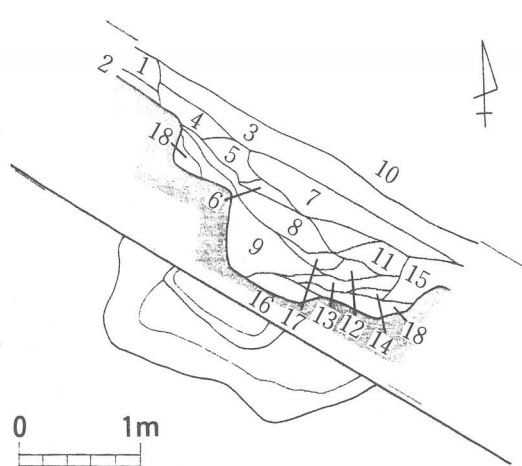
5-7 (第62図) 5-4土坑は調査区5区の東部に位置する。土坑の北側は調査区域外となっているために、土坑の南部を調査したものである。東西2.33m、南北75cmまで、深さ62cmを測る。平面形は不整形を呈する。壁は直立するが、底部は15cm程の方形を呈するであろう掘り込みがみられるなど、多少の凹凸が見られる。

出土遺物 (第63図) 土坑底近くから土師器坏形土器が出土している。

表-16 5-7土坑出土遺物観察表

(単位=cm)

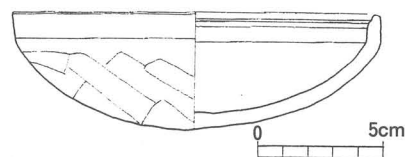
No.	器種	法量	形態・成形手法	調整方法	胎土・色調	備考
63-1	土師器 坏	口径 14.5 器高 4.7	口縁部小さく直 立する	口縁部ナデ 胴部ヘラ削り	色調黒褐色～褐色 胎土小石や雲母を少量含む 焼成良	



第62図 5-7土坑 (1:60)

土層説明

- 1 暗褐色土 ローム粒を含む
- 2 暗褐色土 粘土多く黒褐色土含む
- 3 暗褐色土
- 4 暗褐色土 ローム粒を含む
- 5 暗褐色土 ローム粒多く褐色土含む
- 6 暗褐色土 ローム粒混入しまりあり
- 7 暗褐色土 焼土粒ローム粒少量含む
- 8 暗褐色土 ローム粒多くしまりあり
- 9 黒褐色土
- 10 褐色土 ローム粒多く含む
- 11 褐色土
- 12 褐色土 堅くしまっている
- 13 褐色土 ローム少量含む
- 14 暗褐色土
- 15 褐色土 ローム粒多く含む
- 16 明黄褐色土
- 17 褐色土
- 18 明褐色土



第63図 5-7出土遺物 (1:3)

3. その他の土坑

4-14土坑(第70図) 東西に延びる調査区4区の西部に位置する。土坑は2/3が調査区外となっており、土坑の形状は明瞭ではないが、土坑の平面形は円形を呈すると推定される。調査した土坑の範囲は、東西3.02m南北1.20mの半円形であり、深さは28cmを測る。土坑底は平坦である。壁に沿ってピット(37×30cm、-60cm)が検出されている。

土坑は、平坦な底部や円形を呈する平面形等から、住居跡である可能性も考慮した。底部は軟弱で踏み固められた様相が観察されなかったことや、炉や壁周堀及び柱穴等が発見されていないことなどから、積極的に住居跡であると推察することに疑問が残ったものである。

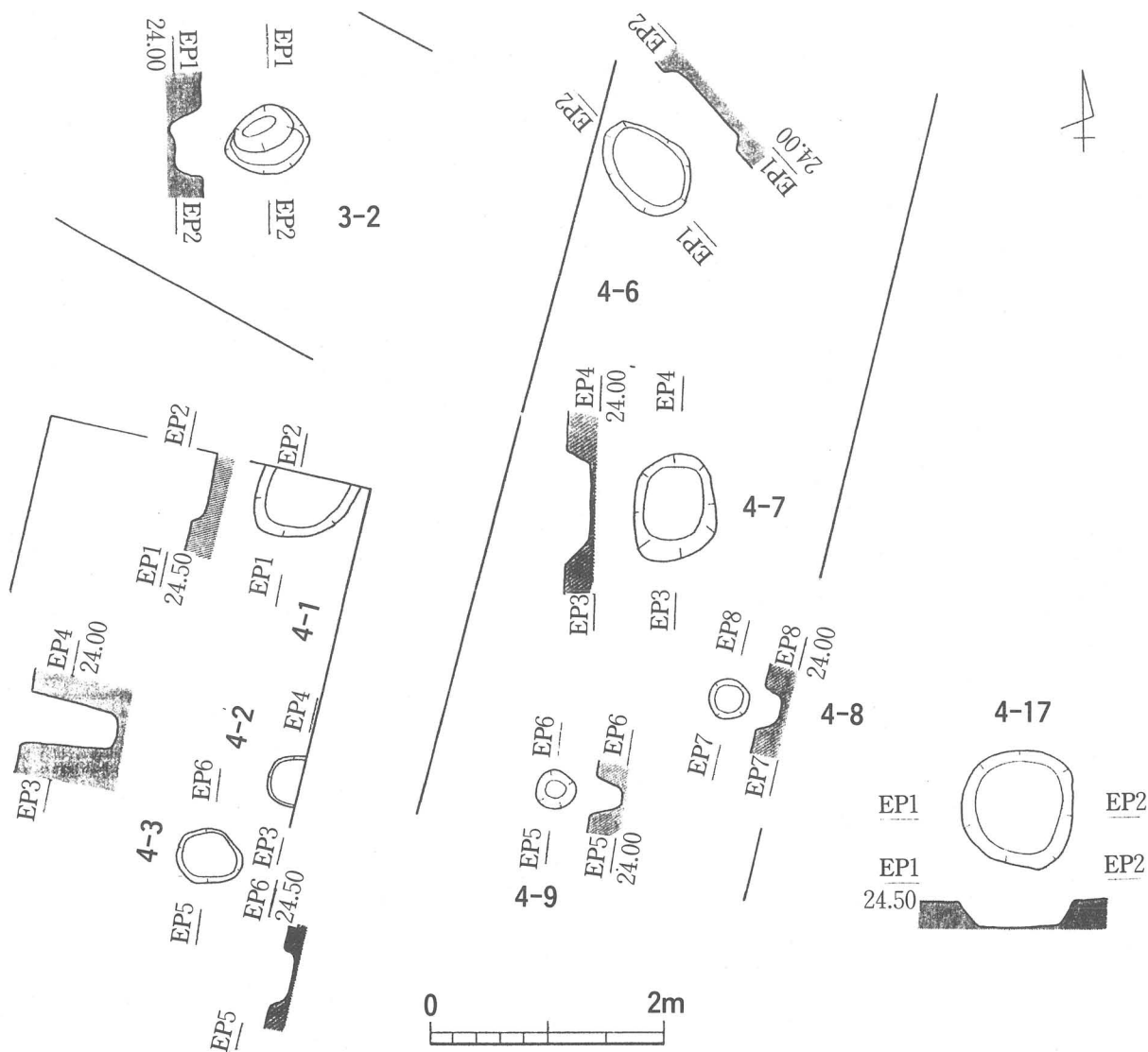
4-13A(第70図) 東西に延びる調査区4区の西部に位置する井戸である。井戸の北部1/2は調査区外となっており、南で北東に延びる溝(1-13)に切られている。崩落の危険があるために、井戸の底部まで掘り下げることができなかった。井戸は東西1.20m南北96cmまで測る。暗褐色土を主体とし、柔らかな覆土であり、自然堆積の様相を示している。遺物は発見されていない。

表-17 土坑一覧表

番号	規模	形状	出土遺物	備考
1-5	72×88,-20	円形、平坦な土坑底、覆土は褐色土主体	なし	西の一部は調査区外、1-14、5-5B土坑に類似 第69図
1-10	84×144,-89	北東に長い長楕円、丸みのある土坑底、	なし	2-4土坑に類似、縄文時代の落とし穴であろう 第34図
1-13	150×148,-25~30	2基の土坑の重複、平坦な土坑底、覆土は暗褐色土	なし	土坑の東部は調査区外 第34図
1-14	112×110,-16	円形、平坦な土坑底、覆土は褐色土主体	なし	1-5、5-5土坑に類似、 第34図
2-2	70×38,-38	円形、平坦な土坑底	なし	南1/2は調査区外 第37図
2-4	180×110,-91	東に長い長楕円形、丸みがある土坑底	なし	1-10土坑に類似、縄文時代の落とし穴であろう 第59図
2-8	115×96,-14	円形、土坑底に小ピット、覆土は暗褐色土	なし	第43図
3-2	60×60,-20~40	円形、2基の土坑の重複か	なし	第64図
4-1	86×52,-5	円形、平坦な土坑底	なし	北部は調査区外 第64図
4-2	34×45,-81	円形、覆土は暗褐色土主体	なし	第64図
4-3	50×44,-9	円形、覆土は暗褐色土主体	なし	第64図
4-6	34×90,-9	楕円形、覆土は暗褐色土	なし	第64図
4-7	96×70,-18	方形、覆土は暗褐色土	なし	第64図
4-8	36×36,-18	円形、覆土は暗褐色土主体	なし	第64図
4-9	36×36,-37	円形、覆土は暗褐色土主体	なし	第64図
4-12A	60×165,-18	楕円形、覆土は褐色土主体	なし	4-11、12溝に切られている 第69図
4-13A	120×96,-?	円形、覆土は黒褐色土及び暗褐色土、柔らかい	なし	井戸、北部1/2が調査区外、崩落の危険のため完掘不可能 第70図
4-14	302×120,-28	円形、覆土は暗褐色土	なし	住居跡か?床等は確認できない。2/3調査区外 第70図
4-15	116×45,-11	円形、覆土は暗褐色土	なし	南1/2は調査区外 第48図
4-17	98×98,-21	円形、覆土は暗褐色土	なし	第64図
5-1A	78×85,-62	円形、土坑底は丸みを帯びる、覆土は暗褐色土	土師器出土	5-1住居を切る 第50、60図
5-5B	112×118,-25	円形、土坑底は平坦、覆土は暗褐色土	なし	5-5A溝に隣接 第61図
5-6	284×110,-51	方形、底部に小ピット、覆土は暗褐色土	なし	北部は調査区外、方形の住居の可能性ある 第61図
5-7	233×70,-30~75	不整形、底部は段差がある、覆土は暗褐色土	土師器出土	北部は調査区外 第62、63図

III 溝

今回の調査では16条の溝が検出されている。溝からの出土遺物等は少なく、その性格等が不明な溝が大半を占める。その中で古墳の周濠と推定される溝が3条観られる。



第64図 3、4区土坑 (1:60)

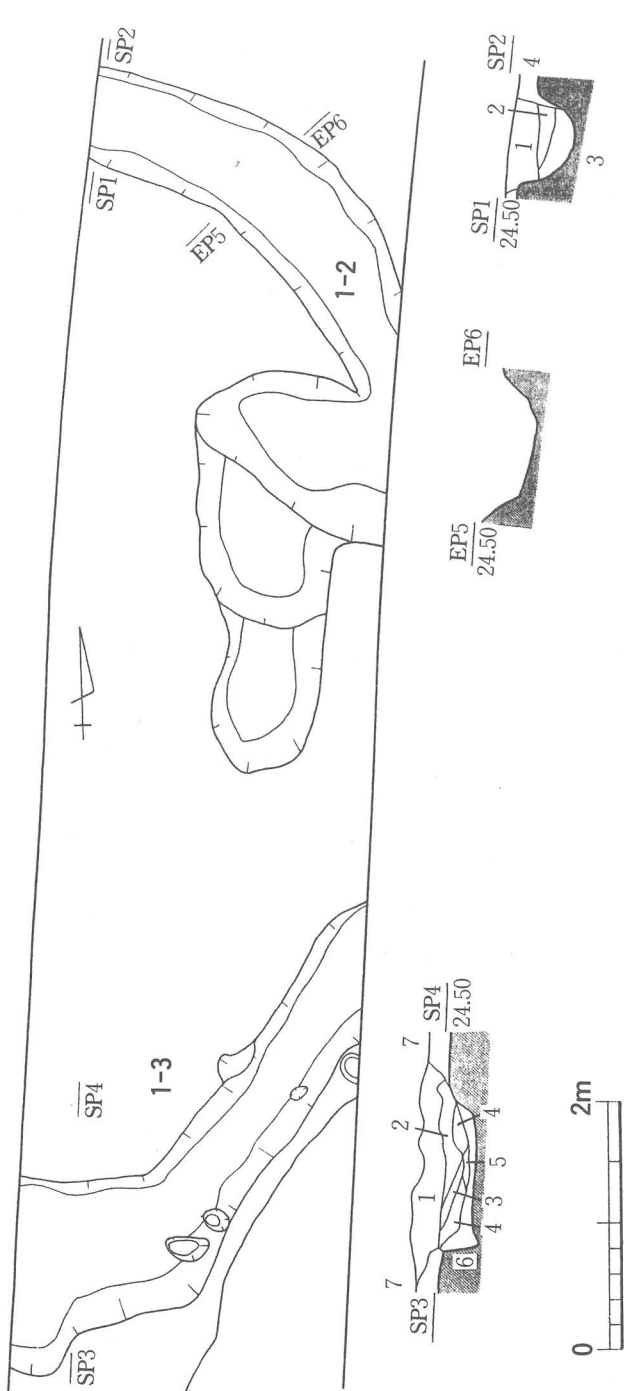
1. 古墳の周濠

古墳の周濠と推定される溝は、1-2、3、4溝の3条である。いずれもが調査区1区の北側に位置し、3条の溝は隣接して検出されている。1-4溝からは土師器坏形土器が出土している。

1-2、3溝 (第65図) 2条の溝は調査区西から東に半円形を描くように湾曲し、東部の調査区域外で連続していると推定される。1-2溝は東部で、1-3溝は西部でそれぞれ方形の攪乱を受けている。溝の規模は、1-2溝が幅75~95cm深さ35cm、1-3溝が幅75~85cm深さ39cmを測り、断面形は「U」字形を呈する。溝と溝の内側の距離は西部で7.85mである。覆土は暗褐色土を主としている。

1-2、3の2条の溝から遺物は発見されていない。

2条の規模は古墳の周濠としてはやや小規模であるが、形状等が類似していることや、円形に2条の溝が連続すると推定されることなどから、古墳の周濠であると考えられる。



土層説明 (第図 SP 1~4)

- 1 暗褐色土 2 暗褐色土 ローム粒を含む
- 3 褐色土 鈍いローム、ローム粒を含む
- 4 暗黄褐色土 鈍いローム 5 暗褐色土 6 黄褐色土
- 7 褐色土 8 暗褐色土 ローム粒を混入
- 9 暗褐色土 ローム粒多く含む 10 褐色土

第65図 1-2、3溝 (1:60)

土層説明 (第図 SP 1~2)

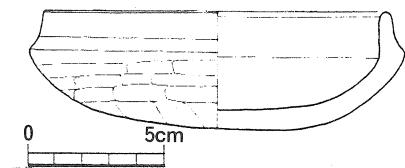
- 1 暗褐色土 ローム粒をやや多く含む 2 暗褐色土 ローム粒を含む
- 3 暗褐色土 鈍いローム少量含む 4 暗褐色土 鈍いローム多く含む
- 5 褐色土 6 暗黄褐色土 7 褐色土 鈍いロームをより多く含む



第66図 1-4溝 (1:60)

1-4溝 (第66図) 1-3溝の南に隣接し、東は調査区域外となっている。半円形に湾曲した溝の西部を調査したものであり、溝の東側立ち上がりは調査区域外となり確認できなかった。溝の規模は幅2.25m南北12mまで、深さ40cmを測る。形状は平坦な溝底に直立した壁を持ち、幅が広い「コ」字形の断面形を呈する。溝の壁や溝底に数カ所のピットが検出されているが、本溝との関係は不明である。溝底部の東側から土師器が出土している (第68図)。

本溝は湾曲した壁や平坦な溝底などから古墳の周濠であると考えられる。古墳の平面形は本周濠から推定することは困難である。周濠の浅く平坦な底部等の形状から推察すると、本周濠を伴う古墳は円墳であるよりも、前方後円墳である可能性が高いのではなかろうか。



第67図 1-4出土遺物 (1:3)

表-18 1-4溝出土遺物観察表

(単位=cm)

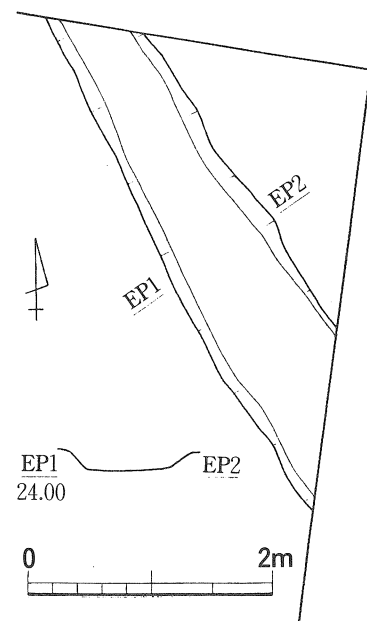
No.	器種	法量	形態・成形手法	調整方法	胎土・色調	備考
67-1	土師器 坏	口径 12.6 器高 4.4	口縁部僅かに内腕して立ち上がる	口縁部ミガキ、胴部ヘラ削り、内面ヘラミガキ	色調外面褐色、内面暗橙褐色 胎土雲母を少量含む焼成良	

2. その他の溝

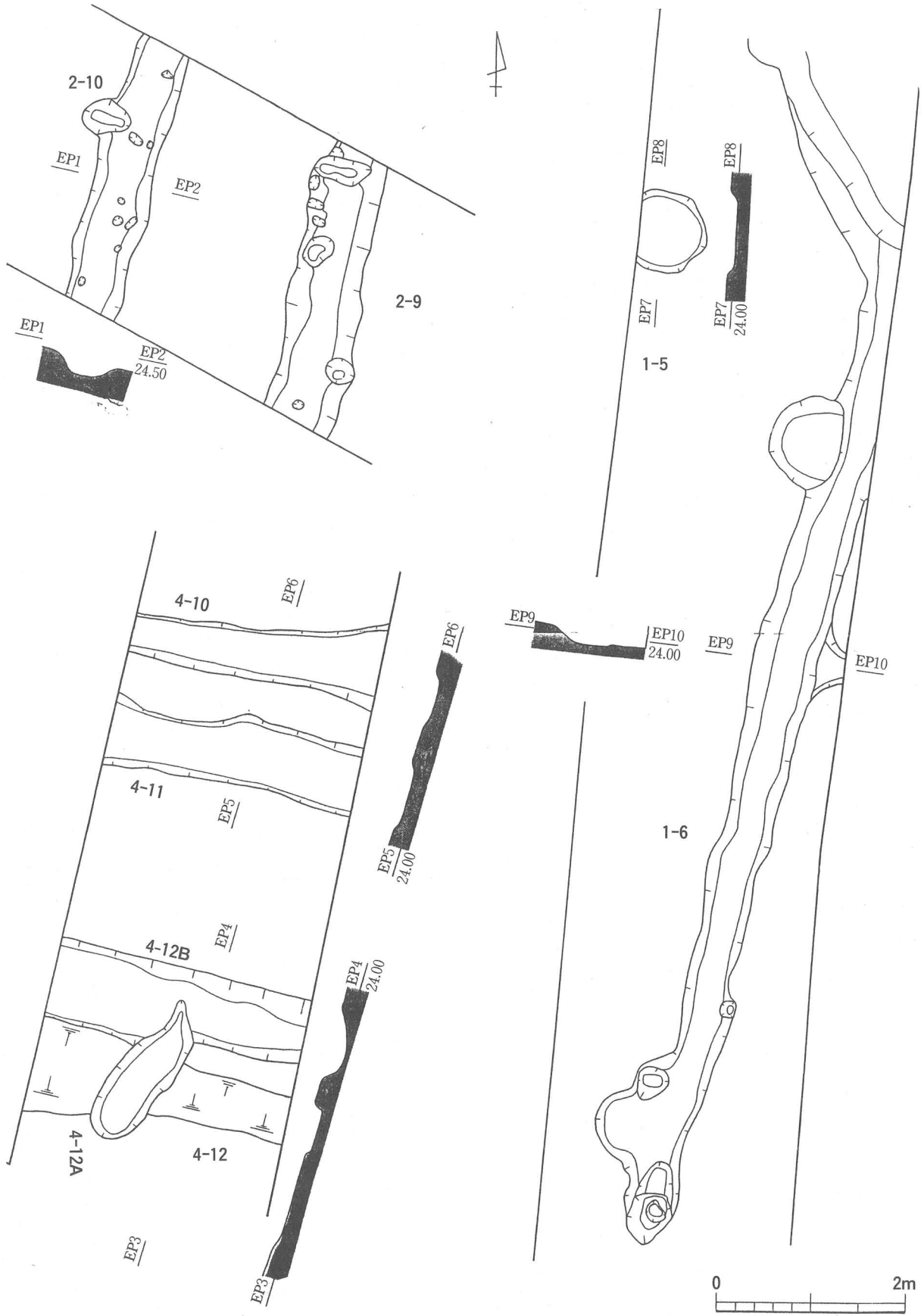
溝が造られ時代や性格等を推定する遺物等が出土していないので、溝の性格等を推測することは困難であるが、土層の観察等から溝の造られた時期は住居跡などよりも新しいことは明瞭である。溝の形状は「U」字形を呈し、幅70~100cm深さ20~40cmを測る小規模の溝が多く検出されている。また、2条の平行に走る溝も検出されている (2-9、10、4-10、11)。調査された溝の中で1-9Aと4-19その形状等が、他の溝とは異なっている。

1-9A溝 (第34図) 調査区1区の南部に位置し、1-9住居跡を切って掘り込まれている。溝は東から北西に緩やかに湾曲しているが、対応する溝は調査区域内では確認されていない。形状は「V」字形を呈し、幅50~68cm深さ40cmを測る。覆土は下層に暗黄褐色土、上層に暗褐色土が堆積し、自然堆積を示している。溝からの遺物は発見されていない。

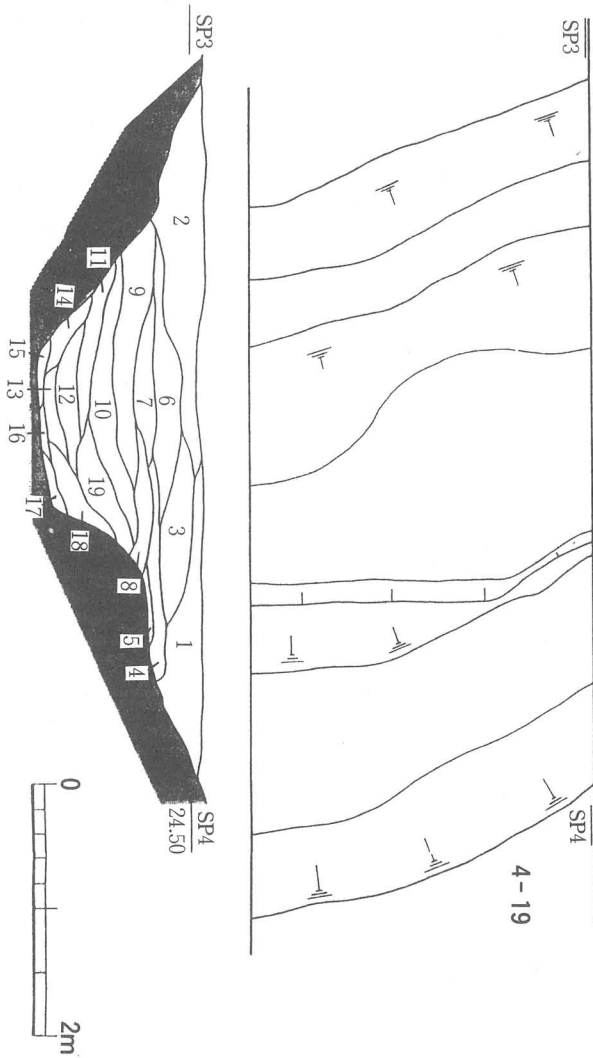
4-19溝 (第70図) 調査区4区の西部に位置する。南北に延びる溝は、やや平坦な中段を有する「U」字形を呈する。溝の規模は上端の幅5.48m中段の幅3.45~3.75m、中段の深さ35~65cm溝底までが1.43mを測る。溝はローム層を貫き、礫層上面にまで達している。溝の覆土は暗褐色土を主にしているが、溝底近くには粘性が強い暗灰褐色土や砂を多く含んだ層が観察される。土層は自然堆積を示している。溝は、有田地区の排水あるいは耕地の用水路として使用されていたことが伺われる。溝は本遺跡の北に所在する有田東1号墳東側周濠を切って南北に延びる溝と、規模や形状が類似している。溝底の標高は、古墳の東溝が23.25m、本溝が22.85mを測ることから、南に向かい流下していたものであろう。



第68図 1-1溝 (1:60)



第69図 1、2、4区土坑と溝 (1:60)

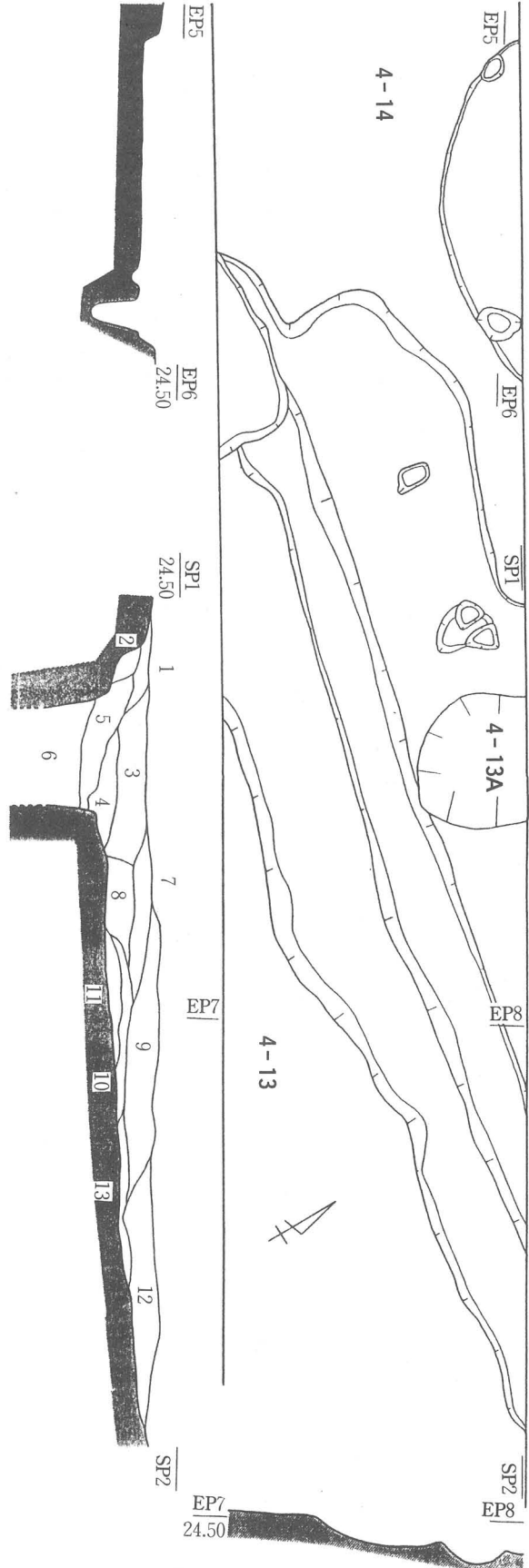


土層説明 (SP1~2)

- | | | | |
|----------|------------------|---------|------|
| 1 褐色土 | 2 黄褐色土 | ローム | |
| 3 暗褐色土 | ローム小ブロック含む | | |
| 4 暗褐色土 | ローム小ブロック多く含む | | |
| 5 暗褐色土 | 鈍いローム少量含む | 6 暗褐色土 | やや暗い |
| 7 褐色土 | ローム粒ロームブロックを多く含む | | |
| 8 褐色土 | ローム小ブロック多く含む | | |
| 9 暗褐色土 | ローム小ブロックをやや多く含む | | |
| 10 暗黄褐色土 | ロームブロック主体 | 11 暗褐色土 | |
| 12 暗褐色土 | ロームブロックやや多い | | |
| 13 暗褐色土 | ロームブロック混入 | | |

土層説明 (SP3~4)

- | | | | |
|---------|----------------|---------|-------------|
| 1 暗褐色土 | ローム粒粘土粒混入 | | |
| 2 暗褐色土 | ローム粒ローム小ブロック | | |
| 3 暗灰褐色土 | 粘土粒粘土ブロック多い | | |
| 4 暗灰褐色土 | 粘土ブロック多い | | |
| 5 暗灰褐色土 | 粘土ブロックと暗褐色土 | | |
| 6 褐色土 | 粘土粒ブロック | | |
| 7 褐色土 | 粘土粒ブロックをやや多い | | |
| 8 褐色土 | 粘土ブロック多い | 9 暗褐色土 | |
| 10 暗褐色土 | やや灰褐色を帯びる | | |
| 11 暗褐色土 | 灰褐色帯びロームブロック含む | | |
| 12 暗褐色土 | ロームブロック少量含む | | |
| 13 暗褐色土 | 砂を混入 | 14 褐色土 | ローム粘土ブロック含む |
| 15 灰褐色土 | 砂層 | 16 暗褐色土 | 17 暗褐色土砂多い |
| 18 灰褐色土 | 砂層 | 19 褐色土 | 鈍いローム多い |



第70図 4-13、14、19土坑と溝 (1:60)

表-19 溝一覧表

(単位=cm)

番号	規模	深さ	形状	出土遺物	備考
1-1	70~100	-18	北西に延びる「U」形、覆土は暗褐色土	なし	調査区を斜めに横断する 第68図
1-2	75~95	-35	西から南東に湾曲、「U」形、覆土は暗褐色土	なし	1-3と対応し、古墳の周濠 第65図
1-3	75~85	-39	西から北東に湾曲、「U」形、覆土は暗褐色土	なし	1-2と対応し、古墳の周濠 第65図
1-4	224、南北1195	-40	壁は直立し、底は平坦	土師器	古墳周濠の西部 第66図
1-6	48~65 L=1100	-17	北東から南西に延びる、「U」形、覆土暗褐色土	なし	第69図
1-9M	50~65	-40	東から北西に湾曲、「V」字形、覆土暗褐色土	なし	対応する溝は検出されない 第34図
1-12	50	-23	東西に延びる、「U」形、覆土は暗褐色土	なし	第34図
2-9	76	-24	南北に延びる、「U」形、覆土は暗褐色土	なし	2-10と平行する 第69図
2-10	65~70	-15	南北に延びる、「U」形、覆土は暗褐色土	なし	2-9と平行する 第69図
4-10	46~98	-5~9	東西に走る、「U」形、覆土は暗褐色土	なし	4-11と平行する 第69図
4-11	80	-8	東西に走る、「U」形、覆土は暗褐色土	なし	4-10と平行する 第69図
4-12	68~86	-19	南西に走る、「U」形、覆土は暗褐色土	なし	4-12Bと平行する、4-13溝と同一であろう 第69図
4-12B	52~104	-6	南西に走る、「U」形、覆土は暗褐色土	なし	4-12と平行する、4-13溝と同一であろう 第69図
4-13	110~165	-12~36	南西に走る、「U」形、覆土は暗褐色土	なし	4-12、4-12Bと同一の溝であろう 第70図
4-19	548 (345~375)	-143 (35~65)	南北に走る、「U」字形、溝底は平坦、覆土は暗褐色土を主とし、底部に粘土及び砂層がある	なし	有田東1号墳東周濠を切る溝と類似する。 第70図
5-5A	82~91	-15	南北に延びる、「U」形、覆土は暗褐色土	なし	5-5B、5-6と接する 第61図

第九章 有田東1号墳

有田東1号墳は、茨城県真壁郡明野町大字有田196番地の北に所在する（古墳は小さな堤の一部を形成しているために無番地である）。

有田東1号墳は、有田東遺跡が営まれている微高地の北縁に位置し、微高地の北を西から東へ入り込んだ小さな谷の最深部に構築されている。古墳は形状を変えて、微高地北縁に築かれている小さな堤の一部として利用されている。微高地は標高約25mを測る。

有田東1号墳は、微高地北縁に築かれている堤が「U」字形に南方へ屈曲した頂点にある。堤は微高地の北縁を東西に延びて、微高地と低地の境界を形作っている。堤が南に屈曲した先端部は他の堤と異なった形状を示している。先端部南側は、耕作等により「コ」字形に区画され、北側は堤の曲線に合わせて「U」字形に湾曲し、先端部の北東部と北西部で堤に連続している。

有田東1号墳は、本調査に先立って行われた確認調査時に、埴輪片や内部主体に利用されていたと思われる切石を採取したことから古墳であろうと推定したものである。古墳の調査は、内部主体や周濠の所在を確認するために、直交する4本のトレンチを設定して行った。古墳に伴う周濠と多数の埴輪破片を発見し、古墳であると確認したものである。

I 墳丘と周濠

1. 墳丘 (第72図) 墳丘の現状は南側が方形、北側が「U」字形に削り取られ、墳頂部は比較的平坦である。南方からは「座布団」を敷いたように見える。墳丘は周囲を農地に囲まれ、また墳丘が墓地として利用された痕跡が認められるなど、墳丘が大きく変貌していることは容易に推定できる。墳丘の規模は、直径19.5m (周濠内壁)、高さは南側耕作面から1.30m 北側水田面から2.3m を測る。墳丘の標高値は最高点で26.32m である。

墳丘に交差する4本のトレンチを設定し、東から右廻りに第1～第4トレンチと呼称した。第1～第3トレンチにおいては、旧表土や墳丘盛土の一部が観察されているが、第4トレンチからは墳丘盛土と認められる土層は観察されなかった。第72図の10層 (SP1～3) 及び6層 (SP4～5) が旧表土であり、8、9、13層 (SP1～3) 及び3～5層 (SP4～5) が墳丘盛土の一部であろう。黒褐色土あるいは暗褐色土を主体とし、ロームブロックを混入してしまりがあある土層である。墳丘は後世における攪乱を受けており、古墳構築当時の墳丘を復元することは困難であろう。墳丘は一時期墓地としても利用されており、墳丘中央部から西部に、石塔宝珠等や蔵骨器、石塔礎石などが、直線的に検出されている (第78図)。

有田東1号墳の墳丘は大半を削平されて小さな高台となっていたであろう、中世あるいは近世に墓地として一時期利用され、微高地北縁を巡っている小さな堤に再び利用され、現在の墳丘として残っていたものであろう。小さな堤の構築時には墳丘上に墓地が所在し、あるいは墓地の所在が認識されていたのであろう。墓地の所在が堤を屈曲して構築させたものと考えられる。

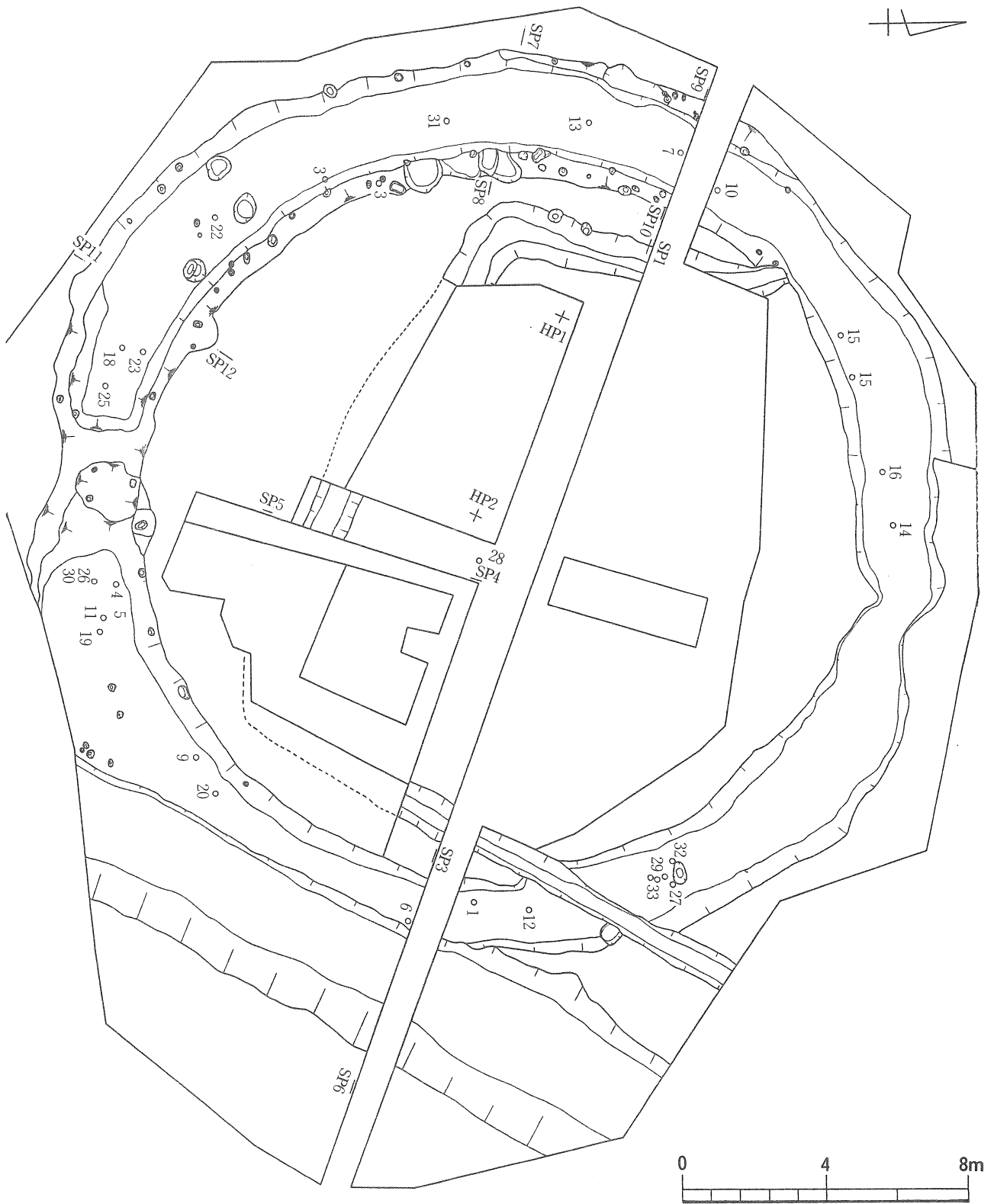
墳丘に沿って幅1.3～2.2m 深さ50～60cmの溝が巡っている。この溝は堤の南側に沿って掘り込まれた溝である。見かけの墳丘はこの溝の北に所在している。

2. 内部主体 内部主体を確認するために、墳丘にトレンチやグリッドを設定した。しかし、前述したように墳丘の盛土は既にその大半を削平されており、内部主体を検出することはできなかった。

3. 周濠 (第71、73図) 周濠は古墳を円形に全周する。周濠の東部は南北に走る大きな溝に切られ、北部は水田によって周濠上部を削平されている。周濠東部の溝は、幅4.6m 溝底幅2m 深さ1.08m を測り、溝底が平坦である。壁は「ハ」字形に開いて立ち上がる。溝の土層からは、粘土や粘性が強い土層等が観察されており、溝は用水路等として使用されていたものであろう。溝は有田東遺跡4-19溝と連続する可能性が伺える。周濠の肩部等にピットや窪みが検出されているが、周濠との関わりは不明である。後世の攪乱も多く観察されている。

周濠は幅3.35～3.75m 深さ65～80cm を測る。周濠の北部は水田により削平され、幅2～2.85m 深さ30～40cm を測りやや狭くなっている。周濠底の標高値は23.5～23.7m で、周濠底は一定した深さを保っている。周濠内壁の直径は19.5m を測る。周濠の壁は外壁が直立し、内壁はやや緩やかに立ち上がる。底部は僅かに丸みを帯びるが、概して平坦である。断面形は「U」字形を呈する。

周濠南部にいわゆる「ブリッジ」と呼ばれる、周濠が浅くなった場所が検出されている。周濠外壁が緩やかに湾曲し、周濠底部は緩やかな傾斜で浅くなっている。ブリッジの最も狭い場所の幅2.3m 深さ25cm (標高値24.26m) である。ブリッジ東側には径1.6×1.8m 深さ60cm を測り、皿状に掘り込まれた円形の窪地がみられる。ブリッジの東と西側の対称的な位置から、人物埴輪の頭部が各1体出土している。



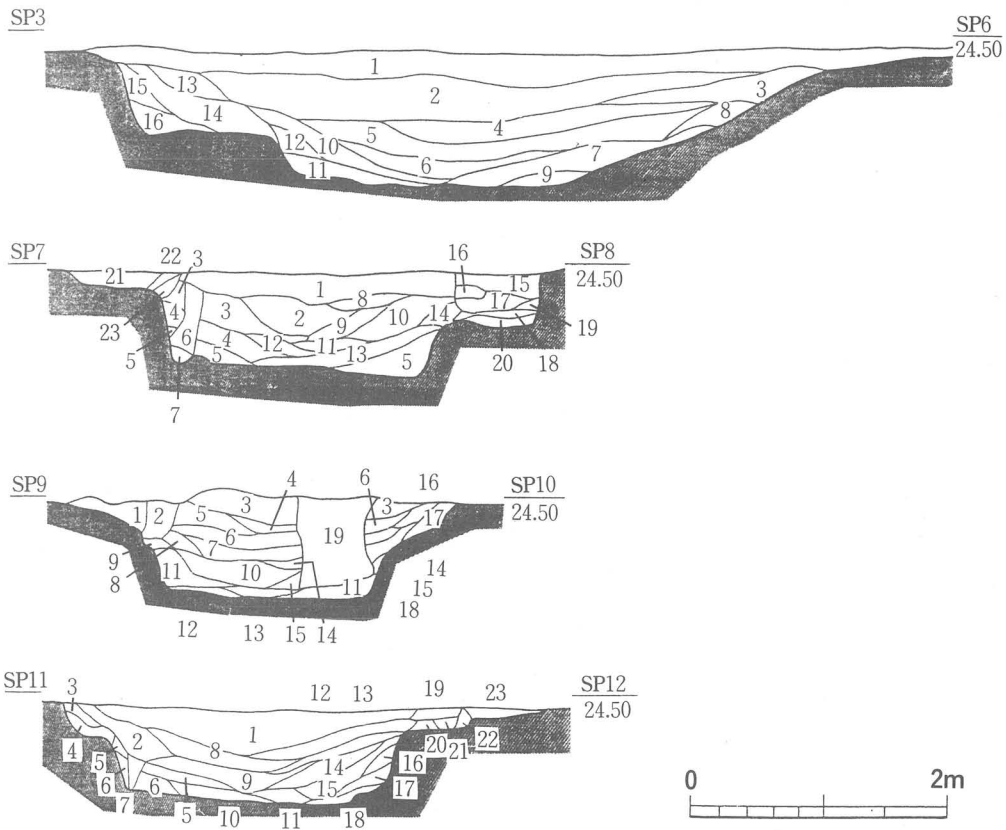
第71図 有田東1号墳 (1 : 160)



土層説明 (SP1~3) 1 暗褐色土 ローム粒含む 2 暗褐色土 粘性に富む 3 暗褐色土 ややしまりがある
 4 暗黄褐色土 5 暗褐色土 柔らかい 6 暗褐色土 やや暗い 7 暗褐色土 やや暗く柔らかい
 8 褐色土 ロームブロック多くしまりがある 9 黒褐色土 ローム粒を少量含む 10 黒褐色土 旧表土
 11 明褐色土 12 褐色土 13 暗褐色土 柔らかい 14 暗褐色土 ロームブロック黒色土ブロックしまりがある
 15 褐色土 大型ロームブロック水田の土か 16 暗褐色土 柔らかい 17 暗褐色土 黒色土と水田の土
 18 褐色土 ローム粒を主体 19 褐色土 鈍いローム主体 20 暗褐色土 黒色土少量含む
 21 暗褐色土 やや灰褐色を帯びる 22 暗褐色土 ややしまりがある 23 暗褐色土 鈍いロームブロック含む
 24 暗褐色土 やや暗い 25 暗褐色土 耕作土に類似 26 暗褐色土 灰褐色を帯びるロームブロック含む

土層説明 (SP4~5) 1 暗褐色土 2 暗褐色土 ロームブロック多い 3 暗褐色土 ロームブロック黒色土ブロック
 4 暗黄褐色土 ロームブロック多い 5 暗褐色土 鈍いロームブロック含む 6 黒褐色土 旧表土 7 明褐色土
 8 暗褐色土 柔らかい 9 明黄褐色土 ロームブロック 10 褐色土 鈍いローム 11 黒褐色土
 12 暗褐色土 鈍いロームブロック含む 13 灰褐色土 14 黒褐色土 ローム粒含む 15 灰褐色土 粘性がある 16 褐色土

第72図 墳丘土層図 (1:60)



- 土層説明 (SP 3～6) 1 暗褐色土 ローム粒含むややしりがある 2 暗褐色土 ローム粒多くロームブロック混入
 3 暗褐色土 ロームブロック多く含む 4 暗褐色土 ロームブロック灰褐色土混入 5 暗灰褐色土 粘性に富む
 6 褐色土 ロームブロック多い暗灰褐色土混入 7 暗褐色土 ローム粒含む黒色土混入 8 暗灰褐色土
 9 暗黄褐色土 ロームブロック主体粘土混入 10 暗黄褐色土 ローム粒ロームブロック主体
 11 暗黄褐色土 ロームブロック主体粘土多く含む 12 暗褐色土 ローム粒黒色土混入 13 暗褐色土 ローム粒やや多い
 14 暗褐色土 ローム粒黒色土多い 15 暗褐色土 鈍いローム混入 16 暗黄褐色土 ローム小ブロック主体(1～12溝,13～16周濠)
 土層説明 (SP 7～8) 1 暗褐色土 ローム粒少量 2 黒褐色土 ローム粒含む 3 暗褐色土
 4 暗褐色土 鈍いロームをやや多く含む 5 暗黄褐色土 ロームブロック主体 6 黒褐色土 7 黒褐色土 ロームブロック多い
 8 暗褐色土 ローム粒多い 9 暗褐色土 ローム粒やや多い 10 褐色土 ローム粒少量含む
 11 暗褐色土 ローム粒黒色土混入 12 褐色土 鈍いローム多い 13 褐色土 鈍いローム多い
 14 褐色土 ロームブロックローム粒混入 15 暗褐色土 ローム小ブロック混入 16 暗黄褐色土 ロームブロック主体黒色土混入
 17 褐色土 ローム粒多量に含む 18 黄褐色土 ロームブロック 19 暗黄褐色土 ロームブロック主体黒色土混入
 20 暗黄褐色土 鈍いローム 21 暗褐色土 22 暗褐色土 やや明るい 23 暗褐色土 ローム粒混入(1～5層,8～14層が周濠)
 土層説明 (SP 9～10) 1 暗褐色土 ローム粒鈍いローム混入 2 暗褐色土 (カクラン) 3 暗褐色土 ローム粒少量
 4 暗褐色土 ローム粒鈍いローム多い 5 暗褐色土 ローム粒多量に含む 6 褐色土 ローム粒鈍いローム多い
 7 黒褐色土 ローム粒少量含む 8 暗褐色土 やや明るい 9 暗褐色土 鈍いロームブロック含む
 10 暗褐色土 ローム粒含む 11 暗黄褐色土 12 褐色土 鈍いローム黒褐色土含む 13 暗褐色土 やや暗い
 14 暗褐色土 ローム粒多く含む 15 暗褐色土 ローム粒をやや多く含む 16 暗褐色土 17 褐色土 ロームブロック含む
 18 暗褐色土 鈍いローム含む 19 カクラン
 土層説明 (SP11～12) 1 暗褐色土 ローム粒多い 2 暗褐色土 ローム粒少ない 3 褐色土
 4 明褐色土 鈍いロームブロックやや多い 5 暗褐色土 ローム粒ロームブロックを含む
 6 暗黄褐色土 ローム粒主体サラサラする 7 暗褐色土 8 黒褐色土 ローム粒少量含む
 9 暗褐色土 ローム粒やや多い柔らかい 10 明褐色土 ローム粒粘土を主体 11 明褐色土 鈍いロームブロック主体
 12 褐色土 ローム粒鈍いロームを多く含む 13 暗褐色土 ローム粒粘土粒を含む 14 褐色土 鈍いローム主体
 15 暗黄褐色土 16 暗黄褐色土 鈍いローム 17 暗黄褐色土 ロームブロック多量に含む 18 黒褐色土 19 暗褐色土
 20 明黄褐色土 ローム 21 褐色土 22 明黄褐色土 地山 23 暗茶褐色土 新しい焼土

第73図 周濠土層図 (1:60)

Ⅱ 出土遺物

周濠からは多数の埴輪と土師器が発見されている。埴輪等の遺物は、周濠中央部より内側に偏り、周濠底から10～25cm程浮いて出土している。墳丘上に設置されていた埴輪等が、周濠に流れ落ちた状態を示している。

出土遺物は円筒埴輪が多数を占めている。埴輪は須恵質の円筒埴輪や形象埴輪、土師器は坏形土器や壺形土器等が出土している。

1. 円筒埴輪 (第74、75図) 最も多く出土している埴輪である。円筒埴輪は橙褐色の還元色を呈するもの、灰褐色の須恵質を呈するものがある。橙褐色を呈する埴輪は、須恵質の埴輪よりも大柄に造られているものが多く、須恵質埴輪には歪みが観られるものが多い。橙褐色を呈する埴輪は縦方向のハケメを施した後に、粘土紐を張り付けてタガを造っている。タガは中央部が窪んだ「M」形と台形の断面形を呈するものがあり、「M」形のタガが多く認められる。タガは3段の埴輪と4段の埴輪が出土している。タガの周囲と口縁部両面はヨコナデにより整形している。ハケメは縦方向が主であるが、第1タガより上部では斜めのハケメも観察される。内面には横方向或いは斜めのハケメが上位部に認められる。埴輪内面の中位部から基部には、指頭によるオサエ痕が観察され、特に輪積み部位には指頭によるオサエ痕が明瞭である。須恵質埴輪は、縦位のハケメを施文した後に粘土紐を張り付けてタガとし、ヨコナデにより整形している。タガは3段の埴輪が出土しており、4段のタガを有する須恵質埴輪は出土していない。タガの断面は歪んだ「M」字形をするものが多く観られる。内面の中位部から基部は、斜めのハケメが観られる。

スカシは、直径5～8cmの円形スカシがほとんどであり、1個体だけに円形スカシと楕円形スカシを対にした埴輪が発見されている(74-3)。

橙褐色を呈する埴輪と須恵質の埴輪は、混然と混じって出土しており、2種類の埴輪を意図的に分けて設置した様相は観られなかった。

2. 形象埴輪 (第76図) 形象埴輪であろうと思われる破片が数十片出土している。いずれも形象埴輪の形態を復元できるものではなく、形象埴輪の一部分である。形態を推定できる形象埴輪は人物埴輪だけであるが、人物埴輪以外の埴輪破片もあることから、数種類の形象埴輪が設置されていたものと推定される。形象埴輪はすべて橙褐色を呈する埴輪である。円筒埴輪片と思われる中にも形象埴輪の基部が存在することも考えられる。

人物埴輪 頭部破片が4点、腕部破片が数点出土している。腕部は小さな破片で、丸い筒状のものや、手の一部と推定される小破片である。第76図18～20は頭部破片、22は左腕部、21は人物埴輪の頭部破片であろう。18はブリッジ西側から、19はブリッジ東側から出土している。頭頂部の髪飾りは破損しているが、撥形に前後に突出し、さらに直交する長方形の飾りを乗せていたであろう。耳には2つの丸い耳飾りがつながり、小さな孔が上部耳飾りの中央に穿たれている。目と口はヘラ状工具により切り込まれており、目や口の両端は鋭角である。額中央には円形の飾りを張り付けた痕跡が観察される。顔面は赤色塗彩の痕跡が僅かに観察されるが、赤色塗彩の範囲は明瞭ではない。20は左目から口にかけての小破片である。赤色塗彩の痕跡が観察されるが、その範囲は明瞭ではない。20の人物埴輪の目や口等の様相は、18、19の人物埴輪と良く類似している。21は明確ではないが、人物埴輪の頭部破片であると思われる。23と24は形象埴輪の基部であろう。

表-20 埴輪観察表

(単位=cm)

No 種別	法 量	各段の幅	凸帯(タガ)	ハケメ(本/cm) 孔(スカシ)形状	形態・整形・調整方法	胎土・色調	備 考
74-1 円筒	器高 — 口径43.5 底径 —	第2段 — 第3段 9.9 第4段 13.4 口縁段 15.7	タガ数は 4段? 形態は台形 幅1.9~1.5	ハケメ 3/cm 孔の形状 楕円形 孔の径 8.6×7.1 6.5×6.5	体部から口縁部に緩やかに開く。 口縁は外に屈曲し、端面は僅かに 凹む。外面は縦方向のハケメ、最 上段はやや斜めのハケメが交差す る。内面上部はココハケメ、体部 は輪積み痕と指頭痕が明瞭に残る。	小石を含む 焼成は良好 褐色	体部~口縁部 破片 1/3欠損
74-2 円筒	器高 — 口径 44 底径 —	最下段 — 第2段 — 第3段 — 口縁段 15	タガ数は 不明 形態は 「M」形 幅 1.5	ハケメ 3~4/cm 孔の形状 楕円形 孔の径 7.9×6.7	体部から口縁部に緩やかに開き、 口縁部は小さく外反する。口縁は 端部を外に向け、僅かに凹む。最 上段はタテハケメ、第3段はタテ ハケメに斜めのハケメが交差す る。内面は斜めのハケメ。	小石・雲母含む 焼成は良好 明褐色	口縁部 1/2欠損
74-3 円筒	器高 — 口径52.8 底径 —	最下段 — 第2段 — 第3段 16.1 口縁段 10	タガ数は 不明 形態は つぶれた台形 幅 2~2.4	ハケメ 5~6/cm 孔の形状 円と長楕円が対 孔の径 8.8×8.8 9×6	最上段の区割りが狭い。口縁部は 小さく外反する。口縁は端部を外 に向け、僅かに凹む。最上段は外 面はヨコハケメ、と下部にタテハ ケメ。口縁部内面はヨコハケメ。	小石含む 焼成は良好 淡橙褐色	
74-4 円筒	器高 — 口径 38 底径 —	最下段 — 第2段 — 第3段 — 口縁段 12.6	タガ数は 不明 形態は 「M」形 幅 2.3	ハケメ 5~6/cm 孔の形状 円形 孔の径 9.5×8.7	タガ部で僅かに湾曲し口縁部へ立 ち上がる。口縁は上方を向き、端 部は僅かに凹みを持つ。最上段は タテハケメ、第3段はタテハケメ に斜めのハケメが混じる。 内面はヨコハケメ。	小石含む 焼成は良好 暗橙褐色	口縁部 1/2欠損
74-5 円筒	器高 — 口径 37 底径 —	最下段 — 第2段 — 第3段 — 口縁段 13.1	タガ数は 不明 形態は 「M」形 幅 2.0	ハケメ 5~6/cm 孔の形状 円形 孔の径 9.5×8.5	タガ部で僅かに湾曲し口縁部へ立 ち上がる。口縁は上方を向き、端 部は僅かに凹みを持つ。口縁内面 に「U」字形の浅い稜を持つ。外 面はタテ、内面はヨコから斜めの ハケメ。輪積み痕、ユビオサエあり。	小石含む 焼成は良好	口縁部 1/2欠損
74-6 円筒	器高 — 口径44.5 底径 —	最下段 — 第2段 — 第3段 12.6 口縁段 16.1	タガ数は 不明 形態は 「M」形 幅2.1~2.3	ハケメ 4/cm 孔の形状 円形 孔の径 7.5×8.0	体部で僅かに湾曲し、緩やかに口 縁部へ立ち上がる。口縁端部は上 方を向き、僅かに凹む。外面はタ テハケメ、口縁内面はヨコハケメ、 輪積み痕とユビオサエを残す。	小石を多く含む 焼成は良好 褐色	口縁部 1/2欠損
74-7 須恵質 円筒	器高 — 口径32.7 底径 —	最下段 — 第2段 — 第3段 — 口縁段 14.2	タガ数は 不明 形態は 「M」形 幅2.1~2.3	ハケメ 4/cm 孔の形状 — 孔の径 —	体部は直立し、口縁部で「ハ」字 形に開く。口縁は外を向き、端部 は僅かに凹む。外面はタテハケメ、 内面はヨコハケメからナナメハケ メ。	小石を多く含む 焼成は良好で あるが、須恵 質を帯びる 暗橙褐色	口縁部 2/3欠損
75-8 須恵質 円筒	器高 — 口径36.5 底径 —	最下段 — 第2段 — 第3段 — 口縁段 13.0	タガ数は 不明 形態は 「M」形 幅 2.4	ハケメ 4/cm 孔の形状 — 孔の径 —	体部から緩やかに立ち上がる。端 部は僅かに凹む。 外面はタテハケメ、内面はナナメ ハケメ。	小石、雲母を 含む 焼成は良好 暗灰褐色~ 橙褐色	口縁部 2/3欠損
75-9 円筒	器高 — 口径33.5 底径 —	最下段 — 第2段 — 第3段 — 口縁段 13.1	タガ数は 不明 形態は 「M」形 幅 2.5	ハケメ 4/cm 孔の形状 円形であろう 孔の径 6.5~7	体部から緩やかに立ち上がり、口 縁部が外反する。端部は外を向き、 僅かに凹む。 外面はタテハケメ、内面上部はナ ナメハケメ、下部はヨコハケメ。	小石含む 焼成は良好 褐色	口縁部 1/2欠損

No. 種別	法 量		各段の幅		凸帯(タガ)	ハケメ(本/cm) 孔(スカシ)形状	形態・整形・調整方法	胎土・色調	備 考		
	器高	口径	最下段	第2段						第3段	口縁段
75-10 円筒	—	—	—	—	—	ハケメ 3/cm 孔の形状 円形 孔の径 6.5×6.2	直立する体部から、口縁部は害反する。口縁はやや外を向き、端部は僅かに凹む。外面はタテハケメ、口縁部内面はヨコハケメ、体部はナナメハケメがみられる。表面は摩耗する。	小石、雲母を含む 焼成は良好 橙褐色			
75-11 円筒	—	—	—	—	—	ハケメ 外面 3~4/cm 内面 5~6/cm 孔の形状 円形 孔の径 7.8×8.0	直立する体部。 外面はタテハケメ、内面はナナメハケメ。 良好な整形と堅緻な焼成であり、形象埴輪の基部である可能性を持つ。	小石、雲母を含む 焼成は良好 暗茶褐色	体部破片 2/3欠損		
75-12 円筒	—	—	—	—	—	ハケメ 3~4/cm 孔の形状 楕円形 孔の径 8.0×7.3 6.5×7.5	体部は緩やかに開きながら立ち上がる。 外面はタテハケメ、内面に輪積み痕とユビオサエ痕が認められる。体部表面下部に多少の摩耗がある。	小石含む 焼成は良好 橙褐色	体部破片 1/2欠損		
75-13 須恵質 円筒	43.5 23.0 14.8	—	—	—	—	ハケメ 3~4/cm 孔の形状 円形 孔の径 8.0×7.8	須恵質の埴輪、窯変であろうか埴輪全体が歪んでいる。 最下段は大きく歪み、底部は底面に向かい肉厚となる。 体部は「く」字形に歪む。口縁部は大きく反り返る。外面はタテハケメ、内面はナナメハケメ。	小石を多く含む 焼成は良好 暗灰褐色~ 暗褐色			
75-14 須恵質 円筒	—	—	—	—	—	ハケメ 4~5/cm 孔の形状 円形 孔の径 6.0×6.2	直立した体部から、緩やかに口縁部が開く。口縁端部は僅かに凹む。外面はタテハケメ。	小石含む 焼成は良好 外面橙褐色暗褐色 内面灰褐色明褐色	口縁部破片		
75-15 須恵質 円筒	—	—	—	—	—	ハケメ 外面 3~4/cm 内面 5~6/cm 孔の形状 — 孔の径 —	底部は底面に向かい肉厚になりながら開く。 外面はタテハケメ、内面はナナメハケメ。 窯変であろうか歪みがある。	小石含む 焼成は良好 灰褐色	底部破片 1/2欠損		
75-16 須恵質 円筒	—	—	—	—	—	ハケメ 5~6/cm 孔の形状 — 孔の径 —	底部は緩やかにしまりる。 外面はタテハケメ、摩耗が観られる。 内面は上部にナナメハケメ、下部は指頭による整形。	小石を多く含む 焼成は良好 暗褐色	底部破片 2/3欠損		
75-17 須恵質 円筒	—	—	—	—	—	ハケメ 6~7/cm 孔の形状 円形 孔の径 5.0×5.3	底部は底面に向かい肉厚になる。底面は平らである。 外面はタテハケメ、内面はナナメハケメ。 底面は歪みがあり、楕円形に近い形状を呈する。	小石含む 焼成は良好 灰褐色	底部破片 1/2欠損		

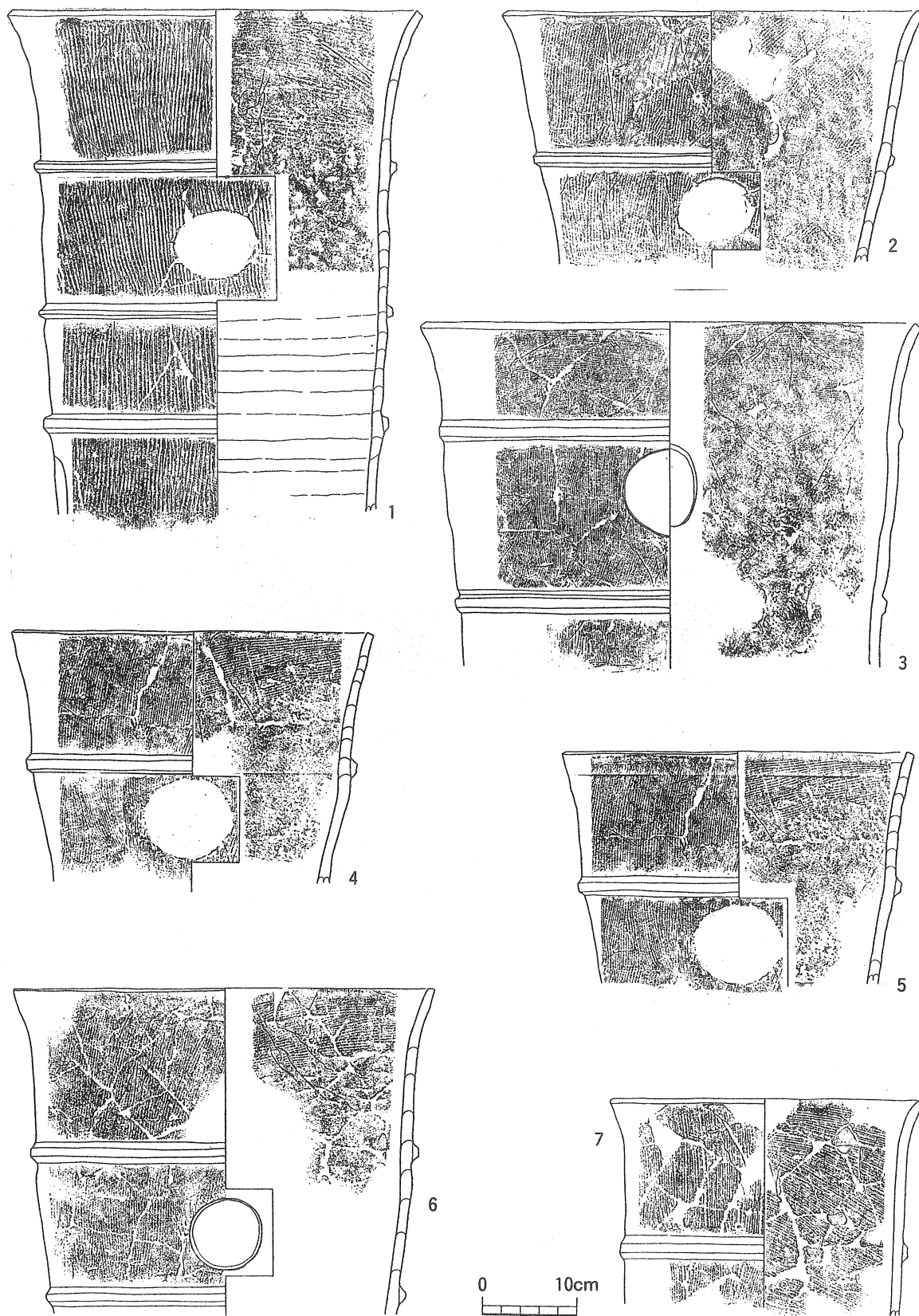
No 種別	法 量	各段の幅	凸帯(タガ)	ハケメ(本/cm) 孔(スカシ)形状	形態・整形・調整方法	胎土・色調	備 考
	76-18 人物 頭 部	顔面、高さ12.5、幅10.5、奥行き11.1、目2.3×0.6、口2.6×0.6 耳飾り、幅0.5~0.7、厚さ0.6の粘土紐を径2.0に丸めて、上下2段に貼り付ける。上部耳飾りの中央に孔(径0.3)を穿つ。 髪飾り、撥形の上に形状は不明であるが、飾りが付随する。額部飾り、径1.2の飾りを付着した痕があるが、形状は不明。 赤色塗彩の痕跡が一部に認められるが、塗彩の範囲は明瞭ではない。					小石、雲母を少量含む 焼成は良好 明褐色
76-19 人物 頭 部	顔面、高さ11.5、幅10.5、奥行き9.7、目2.4×0.7、口2.5×0.7 耳飾り、幅1.1~0.7、厚さ0.7の粘土紐を径2.8に丸めて、上下2段に貼り付ける。上部耳飾りの中央に孔(径0.2)を穿つ。 髪飾り、撥形の上に形状は不明であるが、飾りが付随する。額部飾り、径1.2×2.4の楕円形に飾りを付着した痕があるが形状は不明。 赤色塗彩の痕跡が一部に認められるが、塗彩の範囲は明瞭ではない。					小石含む 焼成は良好 明褐色	ブリッジ東部から出土 頭頂部及び頸部下を欠損する 鼻は欠損
76-20 人物 頭 部	人物埴輪の破片である。 目3.0×0.8?、口2.5×0.8?。赤色塗彩の痕跡があるが、塗彩の範囲は明瞭ではない。					小石雲母を含む 焼成は良好 明褐色	目、鼻、口部の破片
76-21 人 物	人物埴輪の頭頂部、髪飾りの一部であろう。 1.8×5.5、高さ1.8の粘土を貼り付け、脇に径0.5の孔を穿っている。					焼成は良好 明褐色	
76-22 人 物	人物埴輪の左腕。長さ15.0径3.0の円筒形を呈し、上腕部には埴輪体部との接続のための棒状のホゾが認められる。 手部は親指を直角に広げた形をする。					小石を含む 焼成は良好 褐色	
76-23 形 象	体部径 34.5 括れ部径 13.4		タガの数は不明 形態はくずれた三角形、体部が台形	ハケメ 3~4/cm 孔の形状 — 孔の径 —	形象埴輪の基部であろう。円筒形の基部から大きく括れ、形象埴輪が形成される。外面はタテハケメ、内面体部はナナメハケメ。	小石をやや多く含む 焼成は良好 褐色	
76-24 形 象	「く」字に屈曲した破片。体部と形象部の接合部であろう体部に孔(スカシ)が認められる。 埴輪全体の形状は不明。			ハケメ 外面2~3/cm 内面4~4/cm 孔の形状 円形 孔の径 —	屈曲部に2.6×2.5、先端が「M」形に凹む粘土を貼り付け部の整形はナデ。 外面はタケハケメ。	小石を含む 焼成は良好 暗茶褐色	

表-21 古墳出土遺物観察表

(単位=cm)

No	器種	法量	形態・成形手法	調整手法	胎土・色調	備考
77-25	土師器壺	口径 23.5 高さ 30.4 胴部径28.0	口縁部は頸部から湾曲しながら開いて立ち上がる。底部は高台上をする。最大径は胴部中央にある。	口縁部はナデ、胴部上半はハケ、胴部下半はハケの上にヘラミガキ。	小石、雲母含む。焼成は良好。色調は橙褐色、外面に大きな黒斑あり。	
77-26	土師器壺	口径 9.8 高さ 13.0 頸部高 4.5 胴部径11.5	口縁部は丸みのある胴部から「ハ」字形に湾曲しながら開いて立ち上がる。底部は平底であるが、僅かに歪みが認められる。	口縁部はナデ、胴部はヘラミガキ。胴部と口縁部の接合痕が明瞭に観察される丁寧な整形をしている。底部はやや肉厚である。	小石、雲母を少量含む。焼成は良好。色調は褐色、外面に黒斑あり。	
77-27	土師器壺	頸部径10.8 胴部径 14.5 現在高 9.2	扁平な胴部から口縁部が「く」字形に鋭角に立ち上がる。底部は丸底。	口縁部から胴部はミガキ。	小石、雲母を少量含む。焼成は良。色調は外面が橙褐色～暗橙褐色、内面は暗褐色～黒色。	中央部墳丘下から出土
77-28	土師器鉢	口径 10.6 器高 5.7	胴部に2条の稜を持つ。底部は中央部が僅かに凹む。	口縁部ミガキ、外面は亀裂が入るなどやや雑な整形である。底部周囲はヘラ削り。	小石と雲母を少量含む。焼成は良。色調は外面が褐色、内面が明褐色。	
77-29	土師器坏	口径 12.0 器高 5.1	胴部から湾曲し、口縁は直立する。底部は丸底。底部内面は円形に凹む。	口縁部はナデ、底部はヘラ削り。整形は全体的に外面はやや雑内面はやや良好。	小石、雲母を少量含む。焼成は良。色調は褐色。	
77-30	土師器坏	口径 14.0 器高 4.6	口縁部下に稜を持ち、開きながら湾曲して口縁部が立ち上がる。	口縁部はナデ、胴部はヘラ削り後ミガキ。胴部内面はヘラミガキ。	胎土は精選されて良好。焼成は良。色調は明橙褐色。	
77-31	土師器坏	口径 13.9 器高 4.9	口縁部下の稜から、口縁部は直立する	口縁部はナデ、胴部上半はヘラ削り後ミガキ、下半はやや雑なヘラ削り。	雲母を含む。焼成は良。色調は外面が明褐色、内面が黒色。	1/3欠損
77-32	土師器坏	口径 13.1 器高 4.6	やや平坦な底部から緩やかに立ち上がる。口縁部内面に小さな段差をもつ。	口縁部ミガキ、胴部ヘラ削り後ミガキ内面はナデ。	小石、雲母を含む。焼成は良。外面橙褐色から暗橙褐色内面褐色。	2/3欠損
77-33	土師器坏	口径 13.4 器高 4.8	ロクロ使用。糸切り後ヘラ調整。口縁は僅かに外反する。		雲母含む。焼成は良。色調は外面が褐色から暗褐色内面は黒色。	1/5欠損

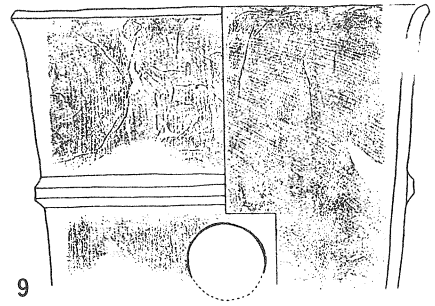
3. 土師器 (第77図) 埴輪とともに土師器が出土している。土師器の出土量は多くはない。土師器坏形土器が最も多く出土し、壺形土器や小型鉢形土器等が見られる。



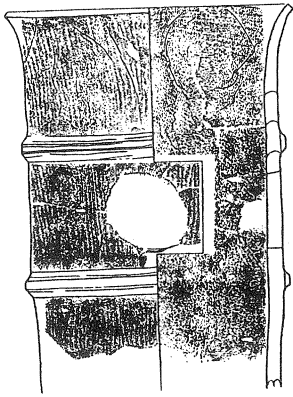
第74図 円筒埴輪 (1 : 6)



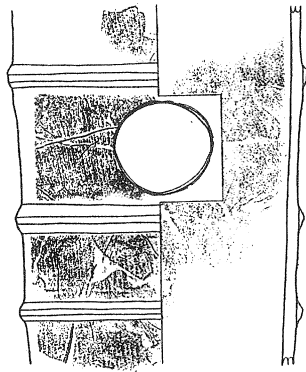
8



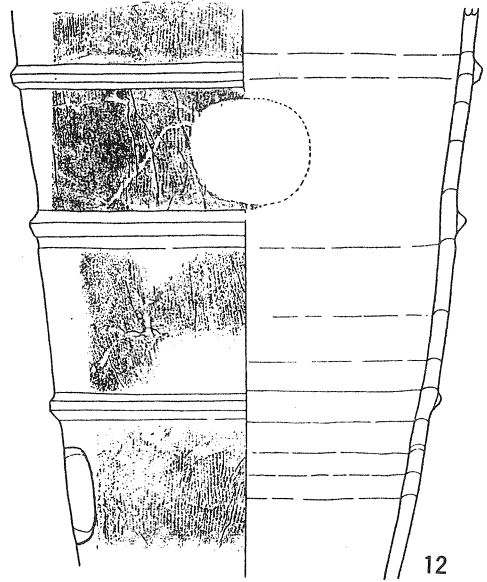
9



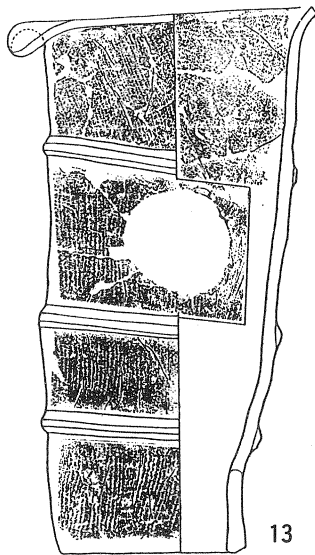
10



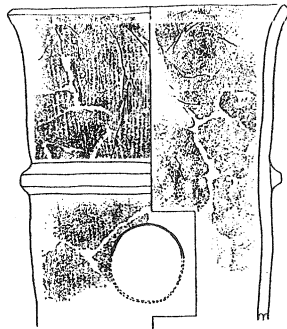
11



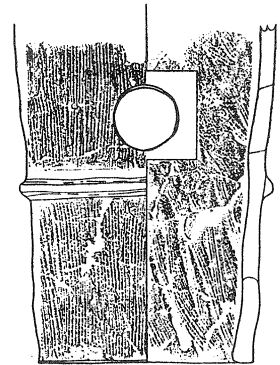
12



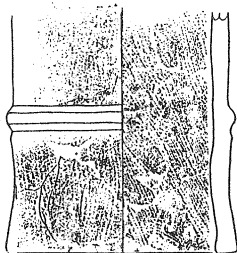
13



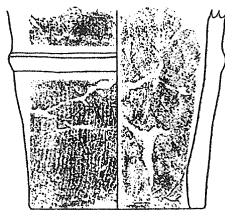
14



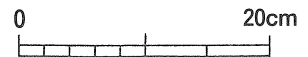
17



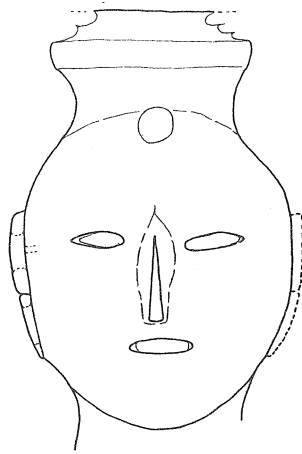
15



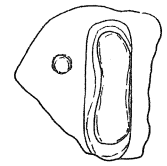
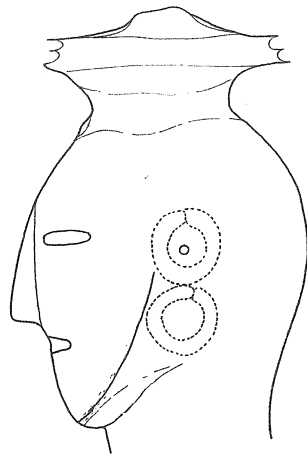
16



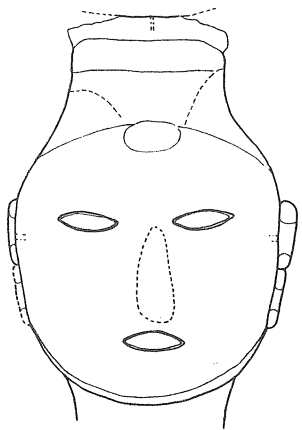
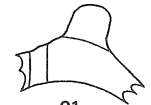
第75图 円筒埴輪 (1 : 6)



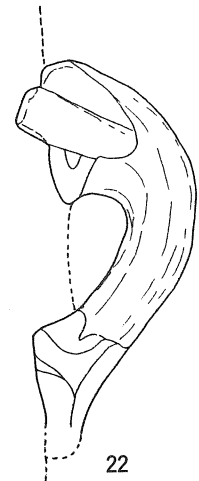
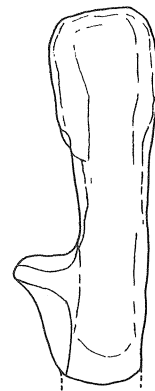
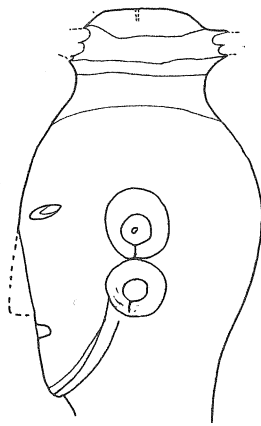
18



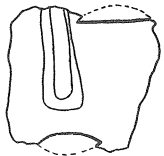
21



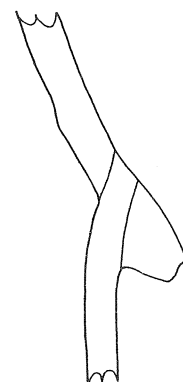
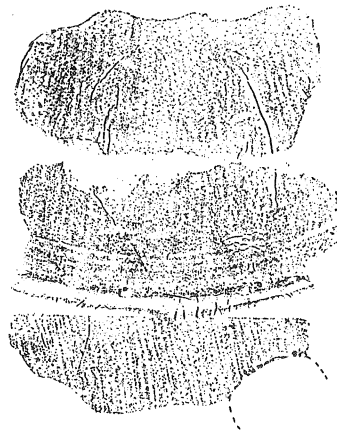
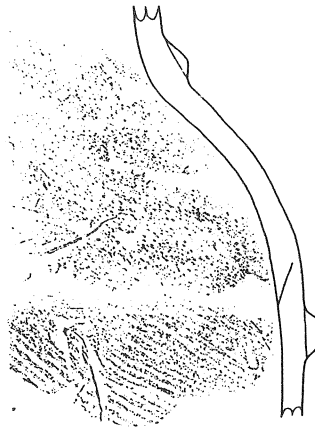
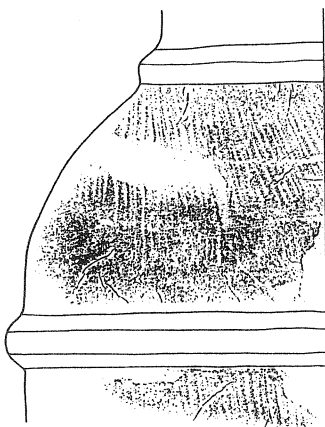
19



22



20

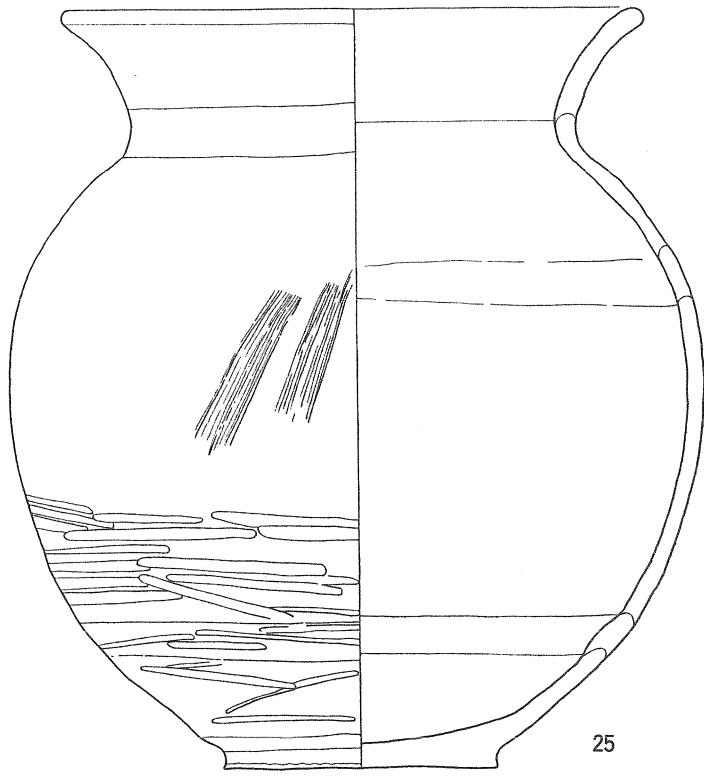


24

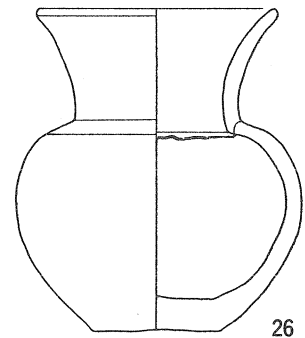
23



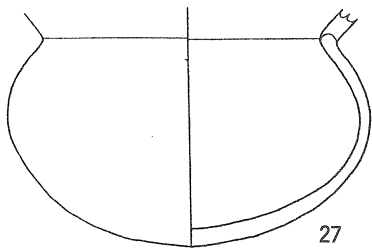
第76圖 形象埴輪 (1 : 3)



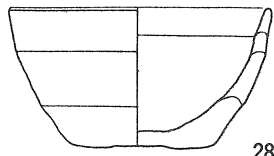
25



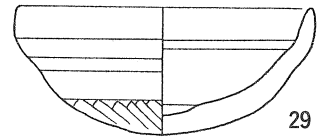
26



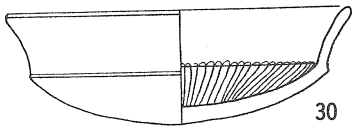
27



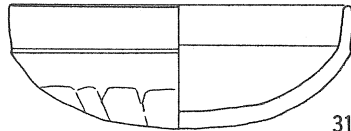
28



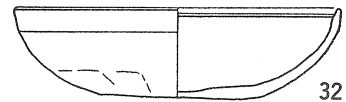
29



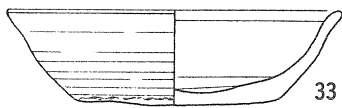
30



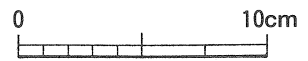
31



32



33



第77図 土師器 (1 : 3)

Ⅲ その他の遺構 (第78図)

墳頂部から北西方向に、石塔の笠石や宝珠、蔵骨器、石塔の礎石等が列をなして発見されている。石塔の礎石と蔵骨器を除いて、いずれもが散乱した土状態で出土している。石塔の部材は組み合わせても1つの石塔として復元することはできない。石塔の部材が発見された土層は墳丘の表土である。石塔の礎石は旧表土上に水平な状態で設置されており、移動された様相は認められなかった。礎石の下から遺構等は検出することはできなかった。蔵骨器は墳頂近くの表土中から発見されている。口縁部を上にして直立した状態で出土している。

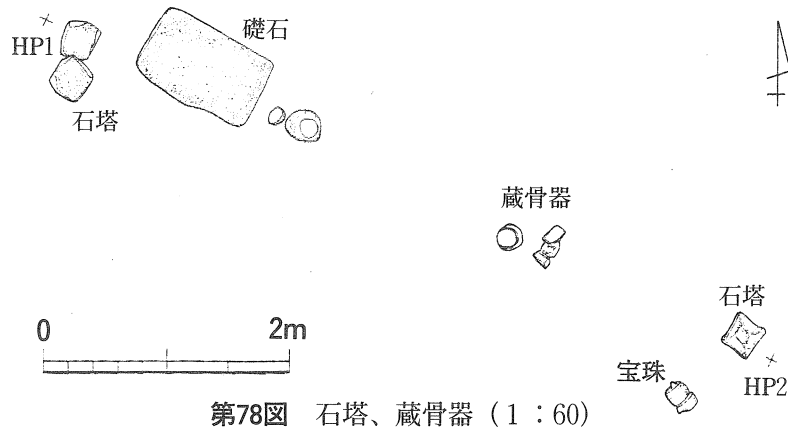
礎石の大きさは、100×65cm厚さ20cm、笠石は28×30cm高さ25cm、宝珠は径18cmを測る。材質は筑波山系から採石されている御影石である。

蔵骨器 (第79図) は墳頂部に近い場所から、口縁部を上にして出土している。蔵骨器の周辺には、蔵骨器に付随する遺構等は発見されておらず、蔵骨器が単独で埋設されている状態で出土している。蔵骨器内部は焼骨で満たされており、焼骨は1人分に相当する量であろう。焼骨の性別や年齢等は不明である。蔵骨器からは焼骨以外は発見されていない。

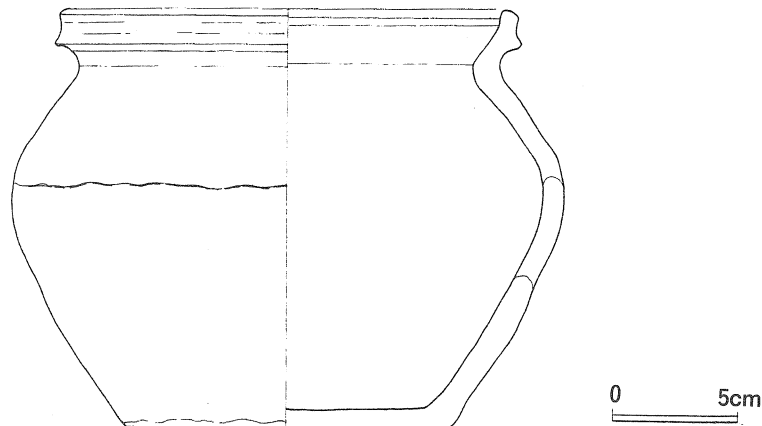
表-20 蔵骨器観察表

(単位=cm)

No.	器種	法量	形態・成形手法	調整方法	胎土・色調	備考
79 -1	陶器 甕	口径 18.0 器高 16.8 胴部径22.0	平底から立ち上がり胴部最大径は、胴部上半にある。括れた頸部から小さく開き、折り返し口縁状となる。	口縁から胴部上半はナデによる丁寧な仕上げ、胴部下半はハケ状工具による、やや雑な仕上げである。	小石を少量含む焼成は良色調は褐色	



第78図 石塔、蔵骨器 (1:60)



第79図 蔵骨器 (1:3)

第十章 まとめ

今回の発掘調査は、観音川流域県営ほ場整備に伴うものである。発掘調査は、ほ場整備事業区域内の水路工事区域に限定された幅員2.4mの調査範囲であるために、遺跡はもとより遺構の全容を把握することも困難な状況であった。

今回発掘調査を実施した3ヶ所の集落跡「下宮遺跡」、「有田北遺跡」、「有田東遺跡」と1基の古墳「有田東1号墳」の成果を記載し、本報告書のまとめといたしたい。

I 下宮遺跡 概述したように、西方に突出した起伏に乏しい微高地上に営まれている。今回の発掘調査範囲は、微高地の緩やかな南斜面であり、斜面にトレンチを設定したような狭長な区域である。調査によって、8ヶ所の住居跡を検出することができた。8ヶ所の住居跡は、各々の住居跡で異なった構築時期ではあるが、大きく分けると古墳時代と奈良・平安時代の2時期に分けることができよう。

1-1～4住居跡からは構築時期を推定できる遺物は出土していないが、住居跡の規模や出土した土師器小破片等から、奈良・平安時代に相当する住居跡であろう。住居跡の規模は、約3mを測り、形状は方形を呈する。1-4住居跡はやや大きく約4.5mを測る。カマドは1-2、4住居跡で確認されているが、他の住居跡においても設置されていたであろう。カマドの設置位置は、1-2住居跡が西、1-4住居跡が北であるが、1-1住居跡は西、1-3住居跡は北に設置されていたものと制定される。これらの住居跡は調査区の西に偏って検出されており、微高地の中央部に近く、奈良・平安時代の集落が形成されていたことが伺える。

1-5、7～9住居跡は、6.7～7.6mの規模を測り、形状は方形を呈する。住居跡の構築時期は、いずれも古墳時代（和泉期～鬼高期）に属する住居跡である。住居跡に伴う出土遺物等から、1-9住居跡は和泉期、1-5、7、8住居跡は鬼高期に構築時期を推定することができる。1-5、7住居跡は、貯蔵穴の存在や粘土が散乱しているなどカマドが所在する可能性を伺わせ、1-9住居跡は炉を有している。古墳時代の住居跡は調査区の東に偏って検出されている。微高地の周辺部に集落が形成されていたような検出状況である。

1-9住居跡は今回の調査では唯一焼失住居である。住居の建築資材が、住居跡の中央に向かって倒れるように炭化して遺存している。焼失したことによって甑、壺、鉢、坏、高坏等の他、土玉や土錘など多くの遺物が出土している。土玉は成形等がかなり粗雑なものであることから、装飾品として利用したものではなく、土錘として利用されていたものと考えるのが妥当であろう。

II 有田北遺跡 前述したように、平坦な微高地の北縁部を調査したものである。有田北遺跡からは、2ヶ所の住居跡と2条の古墳周濠と推定される溝が検出されている。住居跡は後世の影響を多く受けており形状等明瞭でない。

2条の古墳周濠は、微高地の東部から北部に多数所在し、群集墳を形成していた古墳の一部であろう。有田北遺跡の東部には有田東1号古墳が所在し、有田北遺跡の西方には「きつね塚」と称される場所が所在すると聞いている（地元住民の話）。有田北遺跡や有田東遺跡が営まれている微高地の東

部から北部に、多数の古墳が築造されていたことを伺わせるものであろう。

Ⅲ 有田東遺跡 平坦な微高地を「L」字形に調査したものである。16ヶ所の住居跡と溝や土坑を検出している。住居跡は後世の影響を受けているものが多く、さらに出土遺物等も少ないために、住居跡の構築時期を明瞭に推定できるものは少ない。住居跡のなかには炉を有するもの（2-3住居跡）やカマドを有するもの（2-5、6、4-5、5-2、4、8住居跡）があり、また出土遺物等から、古墳時代前期から奈良・平安時代に至るまで連続と営まれた集落跡であろうと考えられる。

有田東遺跡からは、縄文時代の「落とし穴」と考えられる土坑が2ヶ所で検出されている。調査時に置いては縄文式土器等の出土は見られず、度重なる大きな水害等により流失してしまったものか、あるいは微高地が縄文時代には、狩猟の場として利用されていたものであろう。

有田東遺跡においても、2条の古墳周濠と推定される溝（1-2、3、4）が検出されている。1-2、3は「U」字形の断面形を呈し円形に巡っている。1-4は溝底が平坦であり、古墳西側の周濠部である。周濠の形状や規模等から円墳の周濠ではなく、むしろ前方後円墳の周濠と考えることが妥当であろう。周濠からは坏形土器が1点出土している。

Ⅳ 有田東1号古墳 微高地の北縁に位置し、微高地北縁を北東に走る小さな堤の一部として所在した古墳である。従って後世の影響を多く受けており、墳丘盛土の大半が攪乱を受け、内部主体は検出できなかった。周濠は「U」字形の断面形を呈し円形に一周している。周濠からは多量の遺物（円筒埴輪、形象埴輪、土師器）が出土している。遺物は周濠底部よりやや高く、周濠の墳丘よりに偏って出土している。墳丘上に設置されていた埴輪等が、墳丘の崩壊とともに周濠に流れ落ちた出土状態を呈している。円筒埴輪は、須恵質の埴輪と橙褐色埴輪とが混然として出土している。須恵質埴輪はやや小さく、タガが3段の埴輪が主体である。橙褐色埴輪は、タガが4段を有しやや大きい埴輪が観察されている。形状が推定できる形象埴輪は、人物埴輪だけである。人物埴輪は、「巫女」を連想させる埴輪であり、周濠南部のブリッジを挟んで対称的な位置から出土している。ブリッジから内部主体前庭部に至り、前庭部の両脇に設置されていたことを伺わせる出土状況である。土師器は埴輪と混在して出土している。土師器は坏形土器や壺形土器であり、鬼高式土器の範疇に含まれるものである。

今回は有田東1号古墳を調査したが、有田北遺跡や有田東遺跡からも古墳周濠が検出されている。古墳は円墳が主体として所在していたと思われるが、有田東遺跡1-4周濠のように、前方後円墳を想定できる周濠も検出されている。微高地の東部から北部に沿うように多くの古墳が点在して群衆墳を形成していたものであろう。有田東遺跡1-4周濠が前方後円墳であると仮定すると、群衆墳は微高地の東部、桜川堤防敷地から堤外（桜川河川敷）を中心として、微高地の北縁に沿って西に延びるように形成されていたことが推定される。桜川河川敷にも、茅等の雑草が生い茂り確認することはできなかったが、1、2ヶ所の小高い部分が所在するようであり、古墳である可能性も考えられる。

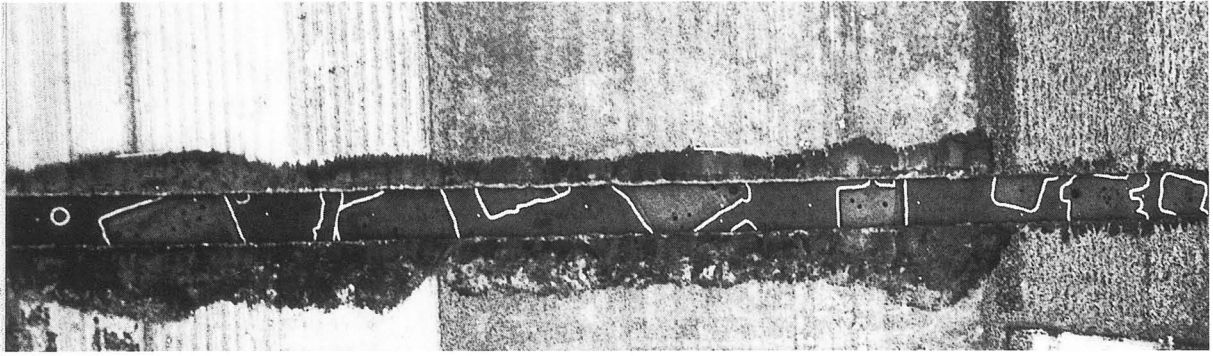
墳丘には中世に埋設されたであろう墓地在が発見されている。蔵骨器に焼成骨を満ち、石塔を建立したものであると思われる。石塔はすでに崩壊し、礎石と笠石や宝珠が散乱した状態で発見されている。

報 告 書 抄 録

ふりがな	しものみやいせき、ありたきたいせき、ありたひがしいせき、ありたひがしいちごうこふん							
書 名	下宮遺跡、 有田北遺跡、 有田東遺跡、 有田東1号古墳							
副 書 名	茨城県真壁郡明野町埋蔵文化財発掘調査報告書							
巻 次	第 集							
シリーズ名								
編 著 者 名	渡邊久生							
編 集 機 関	明野町埋蔵文化財発掘調査会							
所 在 地	茨城県真壁郡明野町海老ヶ島2120-7 (明野町教育委員会)							
発行年月日	平成10(1998)年3月25日							
所収遺跡	所 在 地	コ ー ド		北緯	東経	調査期間	調査面積	調 査 原 因
		市町村	遺跡番号					
下 宮	明野町押尾878番地外			36度	140度	19961001	235㎡	土地改良事業に伴う埋蔵文化財発掘調査
有 田 北	明野町有田299番地外			14分	03分	～	535㎡	
有 田 東	明野町有田157番地外			21～	37～	19970704	815㎡	
有田1号墳	明野町有田196番地隣り			29秒	49秒		440㎡	
種 別	主な時代	主な遺構	主な遺物			特 記 事 項		
散布地 集落跡 古 墳	古墳時代前期～ 奈良・平安時代	集落、25ヶ所 溝24条 井戸1ヶ所 土坑26ヶ所	土師器、円筒埴輪、 形象埴輪					



全影写真（西から）

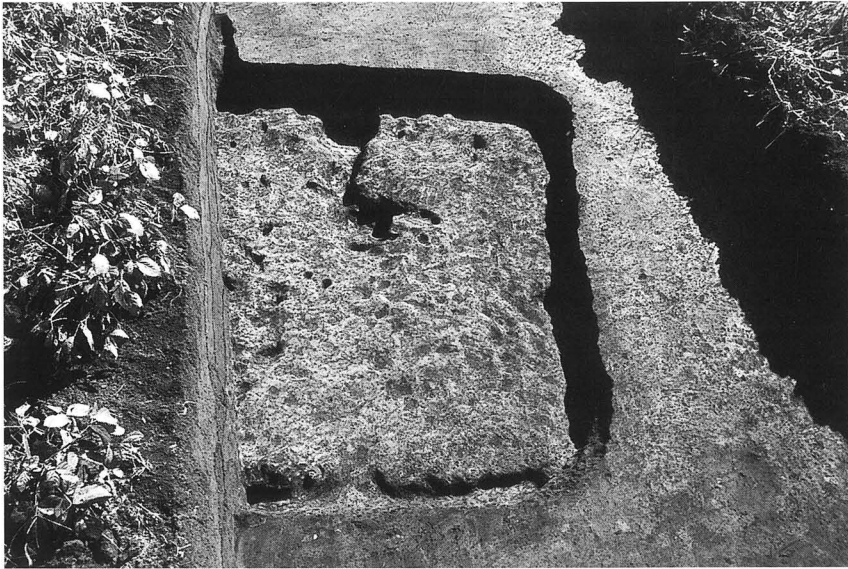


下宮遺跡

1-1 住居跡 (西から)



1-2 住居跡 (西から)



1-3 住居跡 (西から)

1-4 住居跡 (西から)

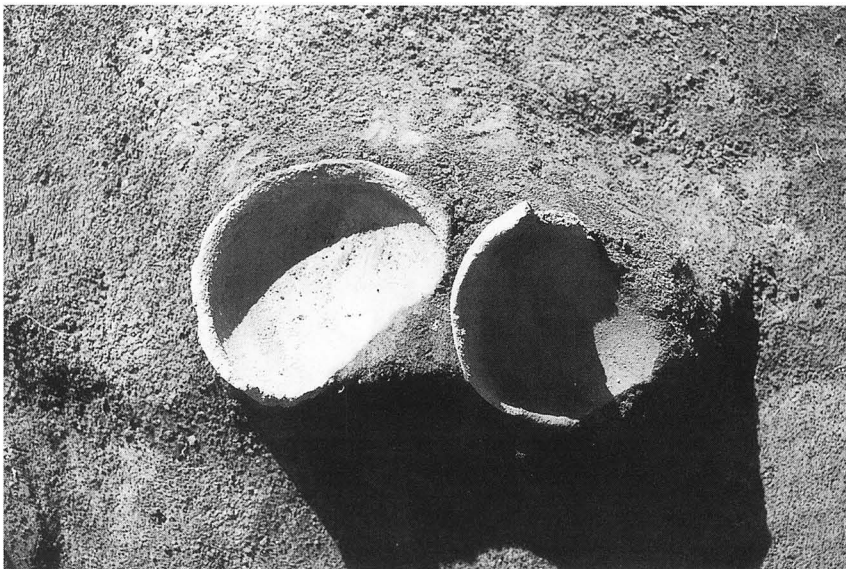


1-4 住居跡カマド
(南から)

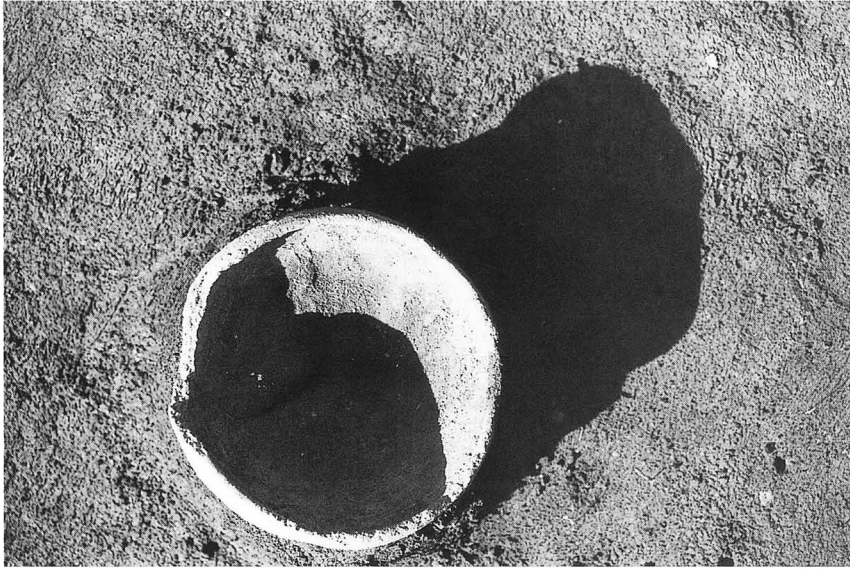


1-5 住居跡 (西から)

1-5 住居跡貯蔵穴

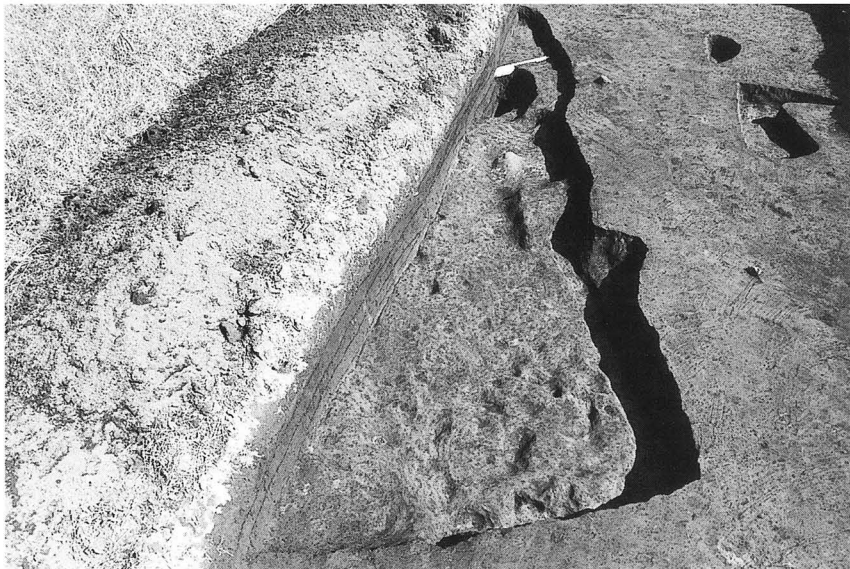


1-5 遺物出土状況
(11-2 (右)、3 (左))

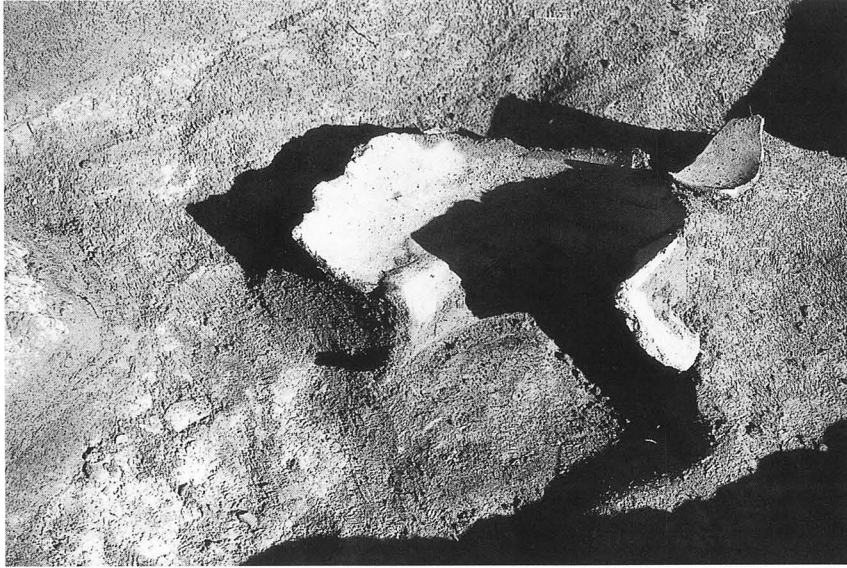


1-5 遺物出土状況
(11-5)

1-5 遺物出土状況
(11-6)

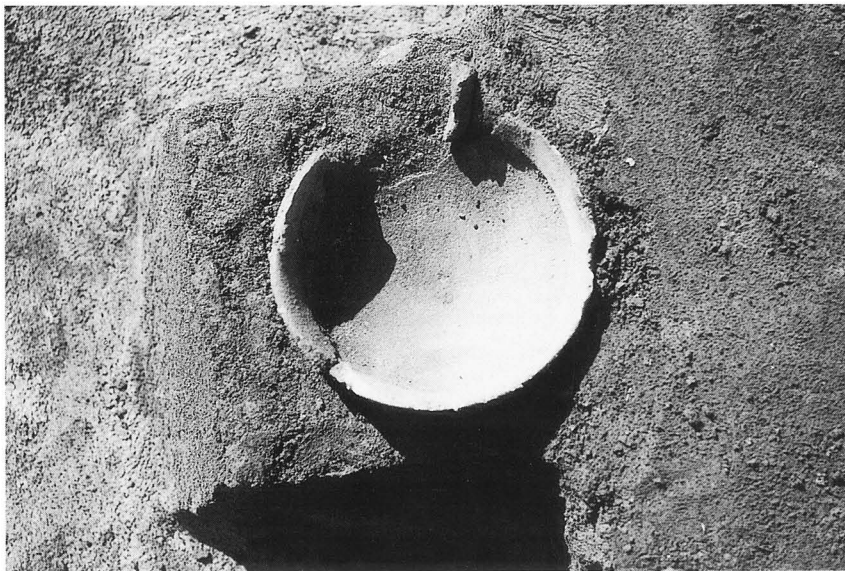


1-7 住居跡（西から）

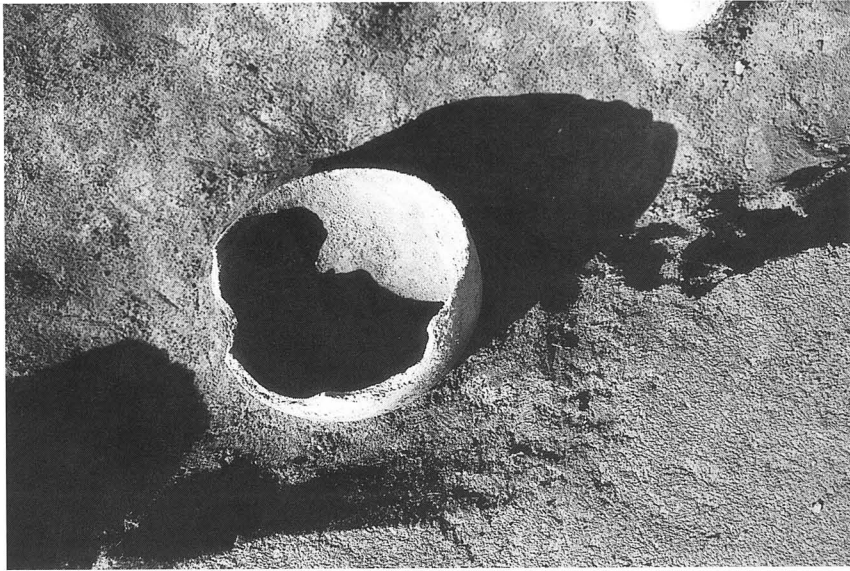


1-7 遺物出土状況
(13-2)

1-8 住居跡 (東から)



1-8 遺物出土状況
(15-3)



1-8 遺物出土状況
(15-6)

1-8 遺物出土状況 (15-7)



1-8 遺物出土状況
(15-10)

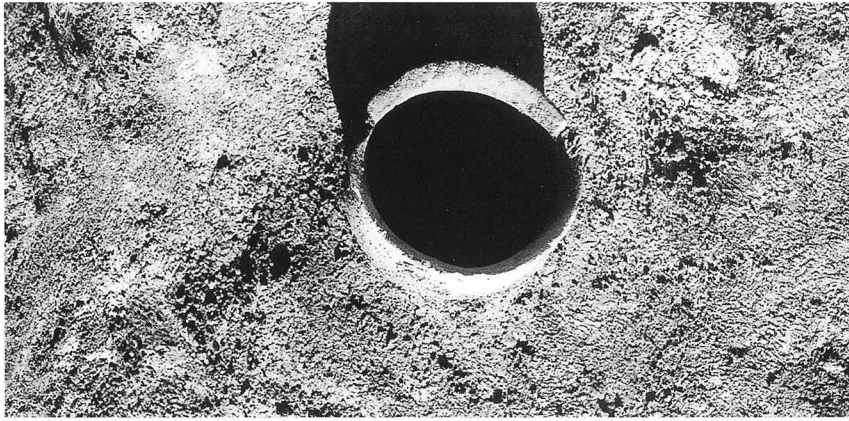


1-9 住居跡
(東から)

1-9 炭化材



1-9 遺物出土状況
(18-1)

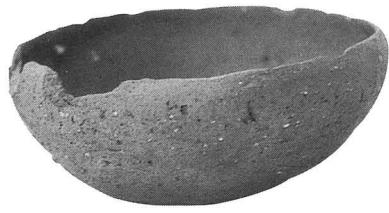


1-9 遺物出土状況
(18-3)

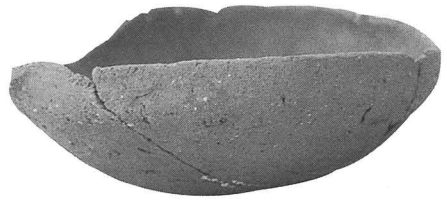
1-9 遺物出土状況
(18-5)



1-9 遺物出土状況
(19-11(右)、12(左))



1



2



3



4



5

1-5 出土遺物



1



2

1-7 出土遺物



1



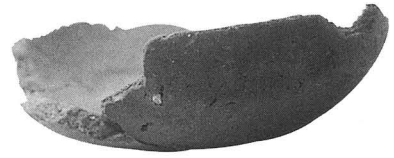
2

1-8 出土遺物

下宮遺跡出土遺物



3



4



5



6



7



8



9

1 - 8 出土遺物



10

1 - 9 出土遺物



1



2

下宮遺跡出土遺物



3



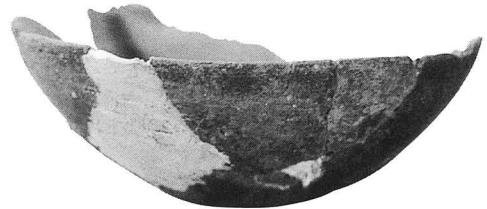
5



6



9



10



11



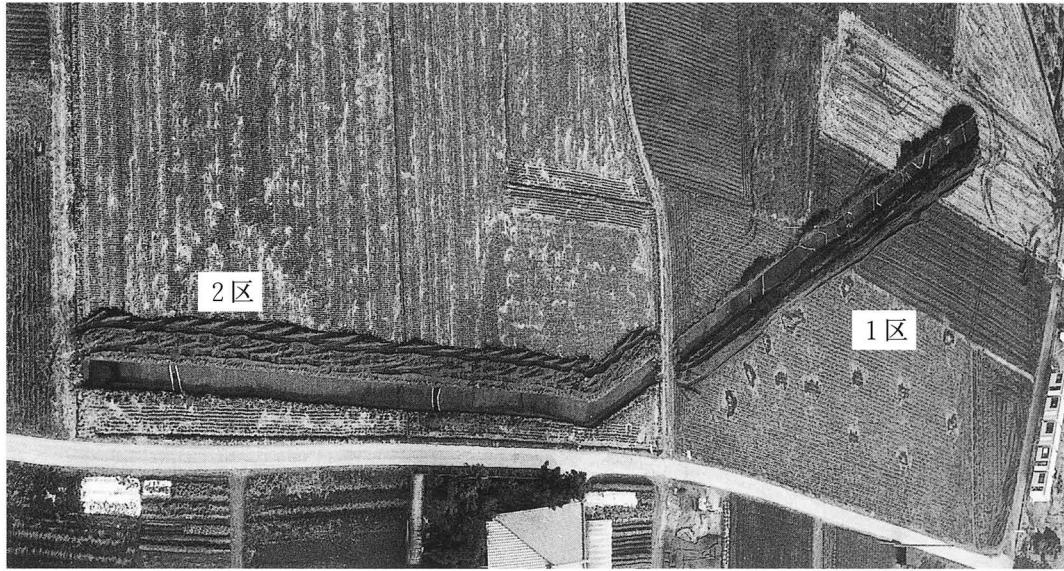
12



13~23

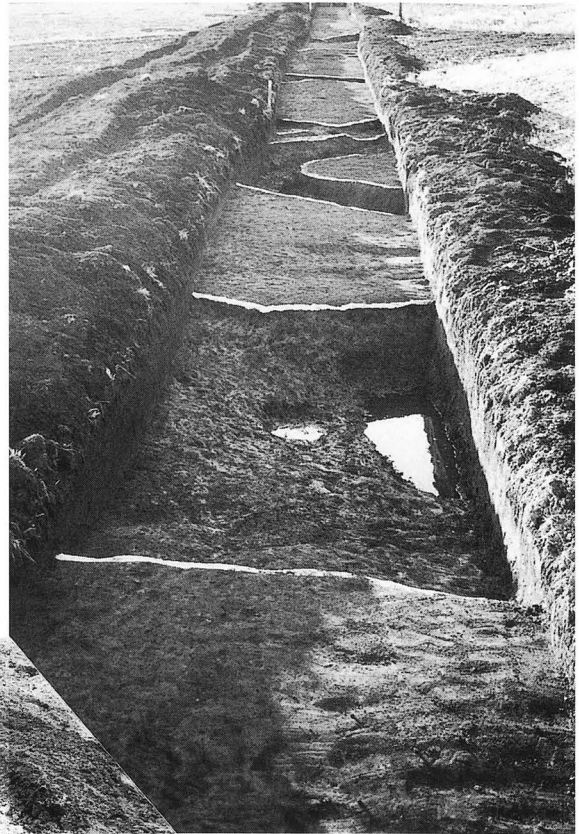
1-9 出土遺物

下宮遺跡出土遺物



有田北遺跡 (西から)

有田北遺跡1区
(東から)



1-4 住居跡 (東から)

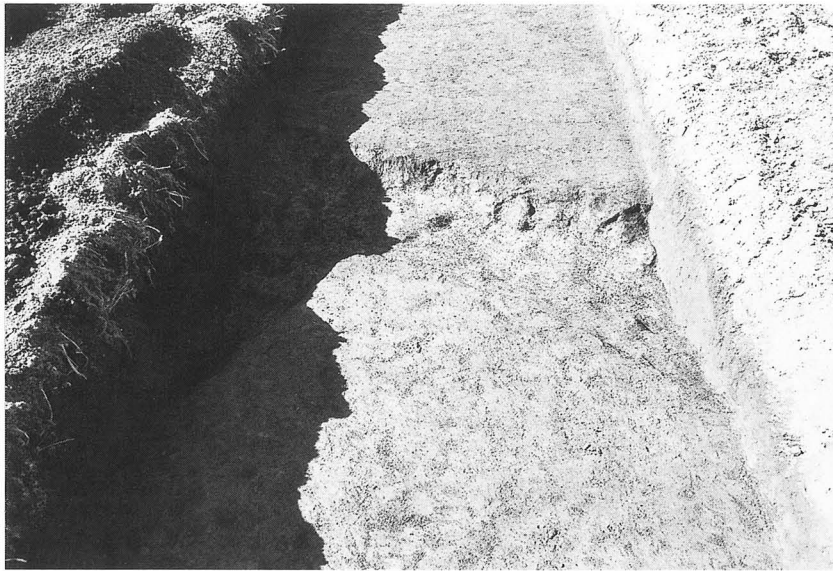


1-5 住居跡 (東から)

1-1 溝 (東から)



1-2 溝 (東から)



1-3 溝 (東から)

1-6 溝 (東から)



1-2 出土遺物



1-5 出土遺物



有田東遺跡 有田東1号墳（東から）



有田東遺跡 4区 (西から)

有田東遺跡 5区 (東から)

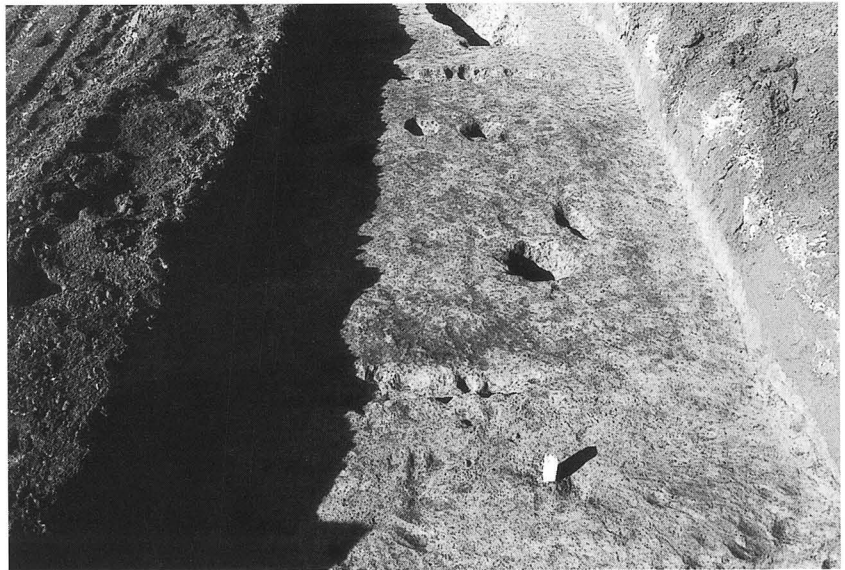


1-7 住居跡 (北から)



1-9 住居跡、溝（西から）

2-3 住居跡（東から）

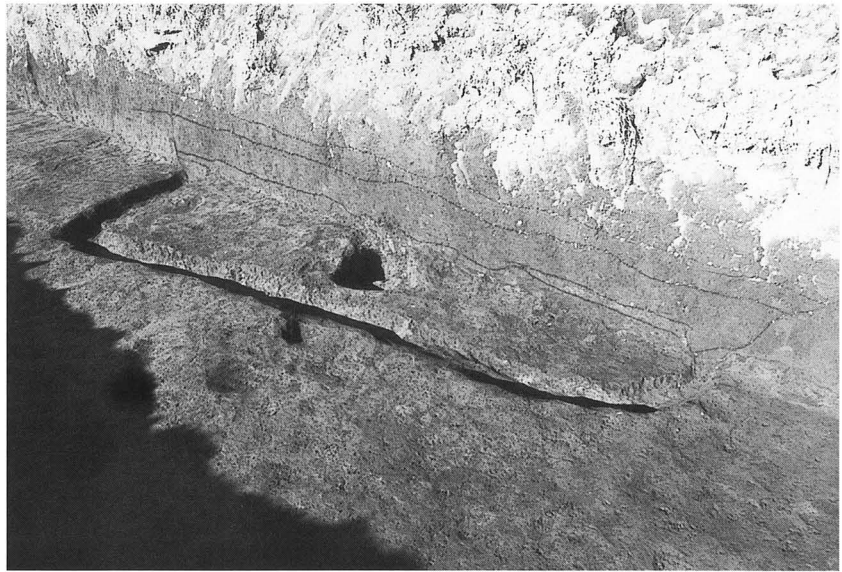


2-5 住居跡（西から）

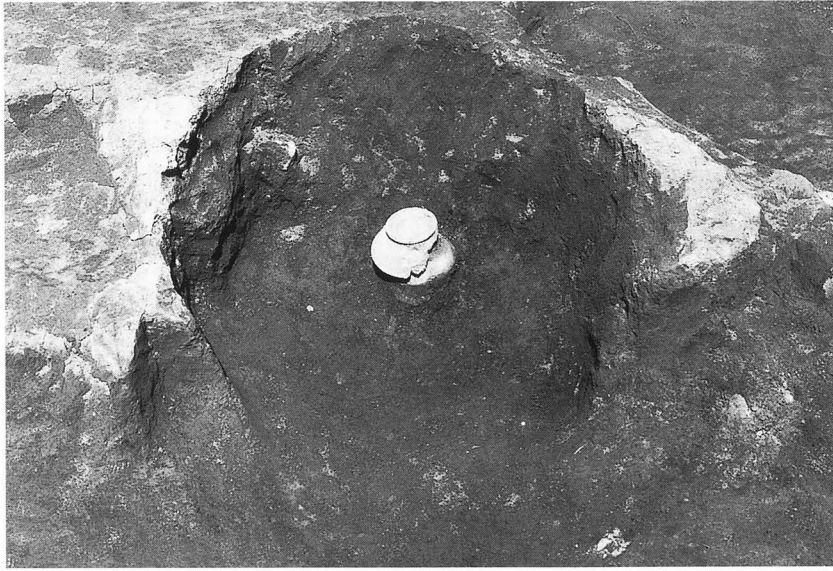


2-6 住居跡（西から）

3-1 住居跡（東から）

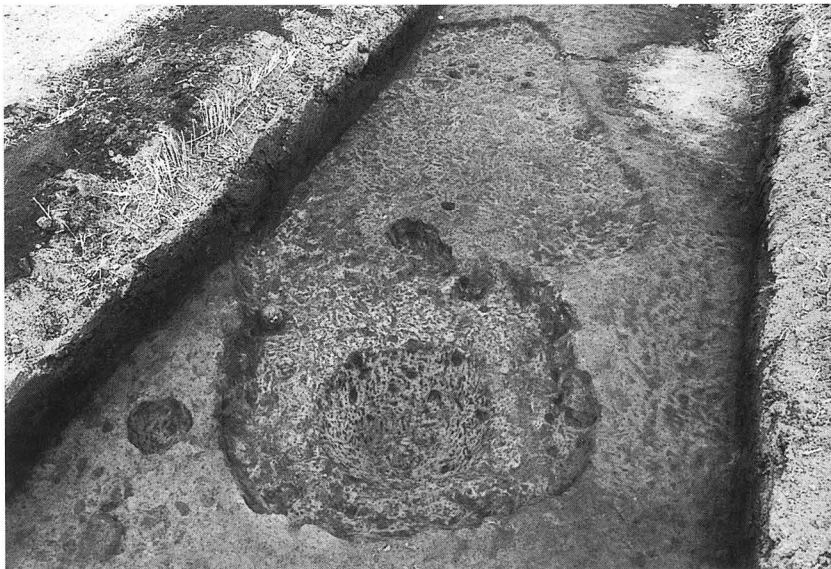


4-5 住居跡（西から）



4-5 カマド (東から)

4-16 住居跡 (東から)



5-1 住居跡、土坑 (東から)



5-2 住居跡（西から）

5-4 住居跡（東から）



5-4 遺物出土状況



5-8 住居跡 (東から)

5-8 住居跡カマド (南から)



1-10 土坑 (東から)



2-4 土坑 (西から)

5-7 土坑 (南から)



5-7 土坑、遺物出土状況



4-14 土坑 (西から)

1-2 溝 (北から)



1-4 溝 (南から)



4-19 溝 (南から)



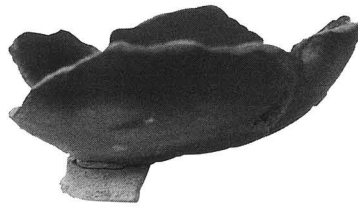
1-9 出土遺物



1

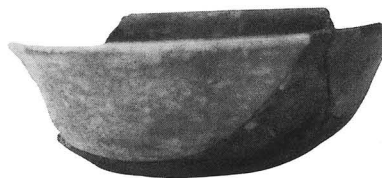


1



2

2-6 出土遺物



2



3

4-5 出土遺物



5-2 出土遺物



5-4 出土遺物



2



3



8



4

5-8 出土遺物



1

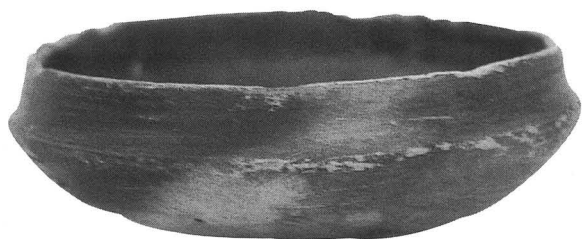
5-1 A 出土遺物



2



5-7 出土遺物



1-4 出土遺物



有田東1号墳

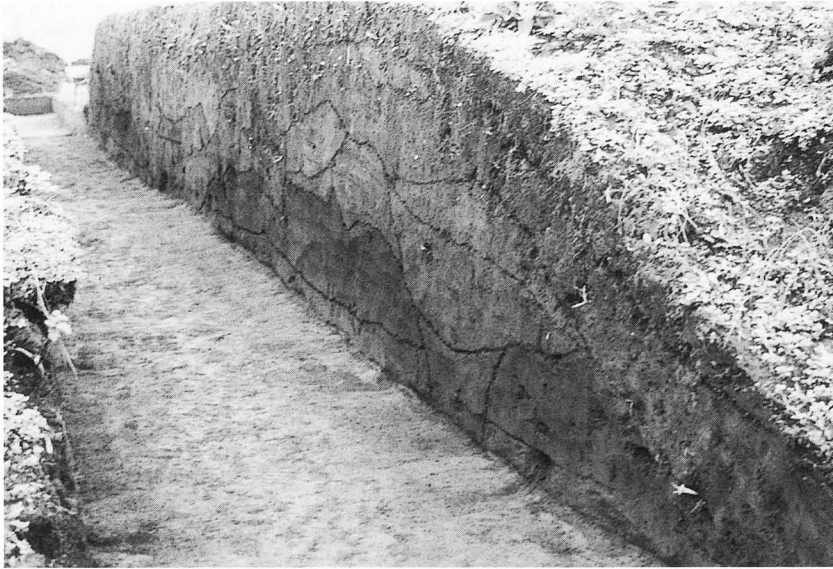


有田東1号墳（南から）

有田東1号墳（西から）



有田東1号墳（東から）



墳丘土層（東から）

周濠土層

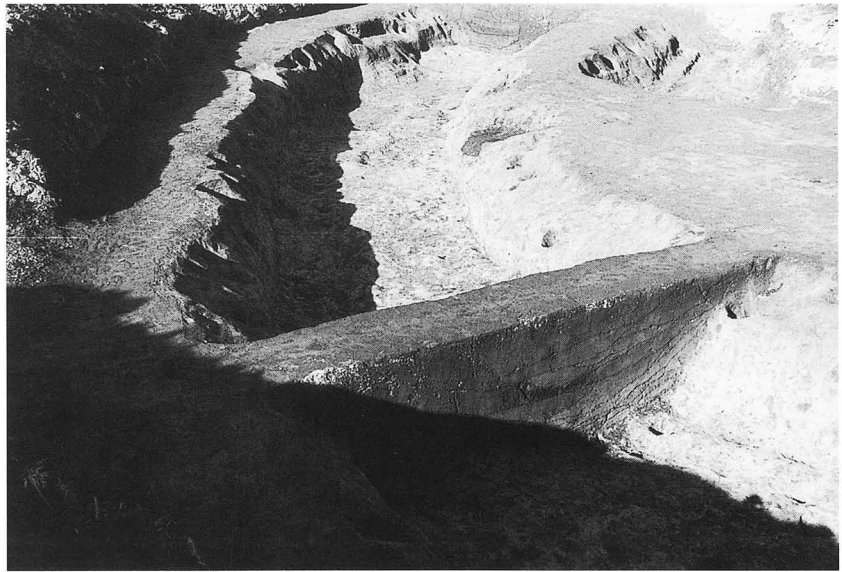


周濠土層（SP 7～8）



周濠、溝地層（SP3～6）

周濠南西部（東から）

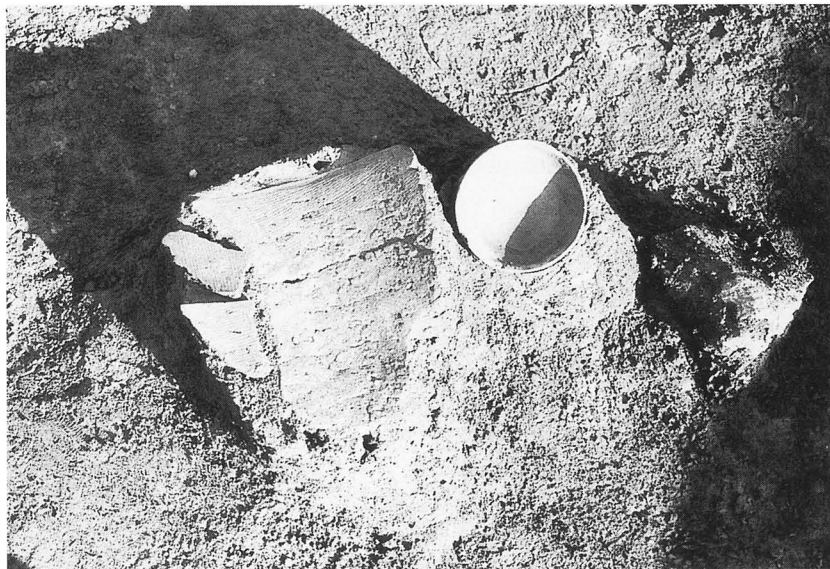


周濠ブリッジ部（西から）



埴輪出土状況 (74-1)

埴輪出土状況 (74-3)



埴輪、杯出土状況
(74-4、77-29)

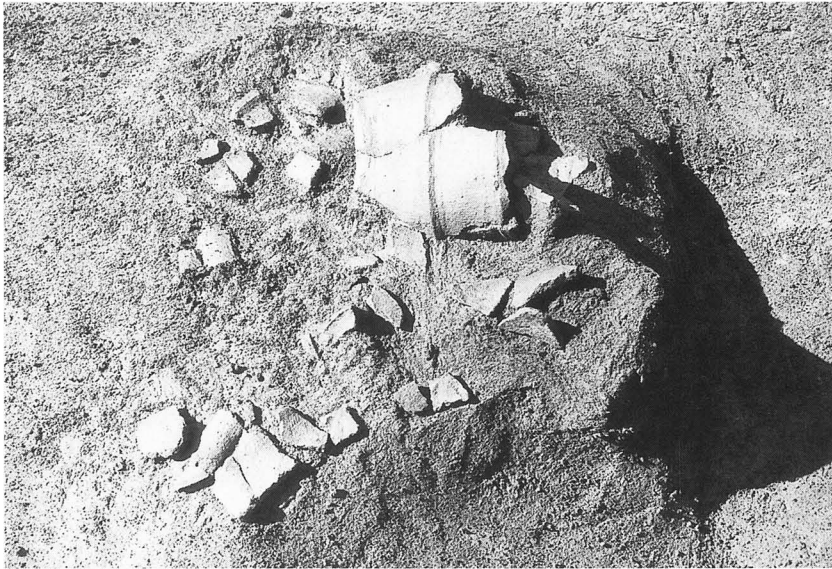


埴輪出土状況 (74-6)

埴輪出土状況 (75-9)

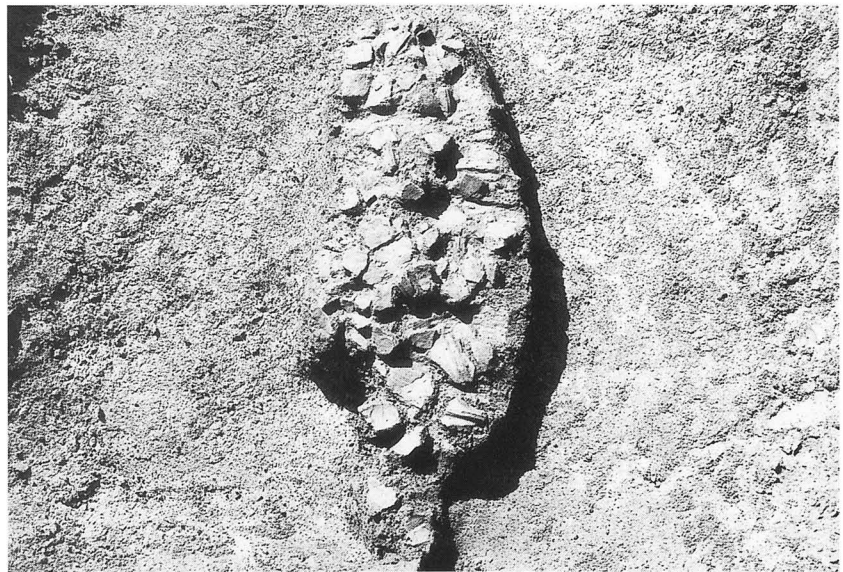


埴輪出土状況 (75-12)



埴輪出土状況 (75-13)

埴輪出土状況 (75-17)



埴輪出土状況 (76-18)

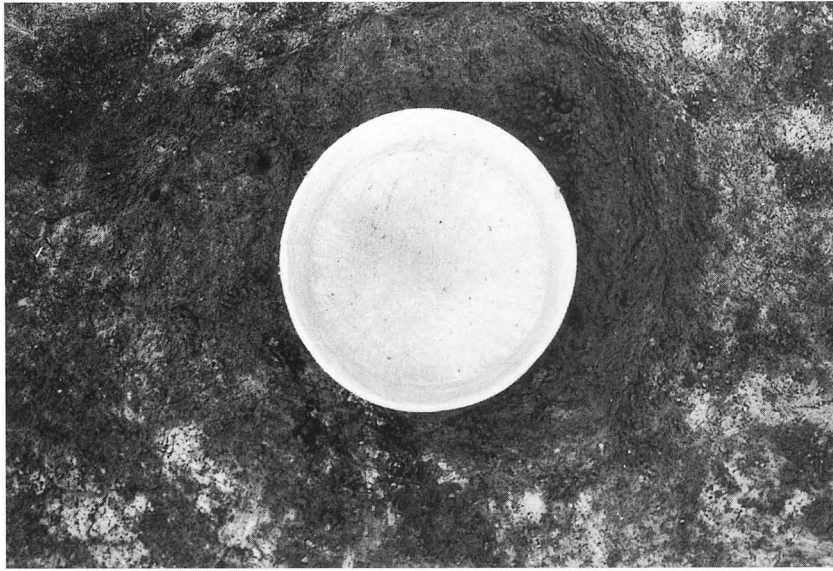


埴輪出土状況 (76-19)

遺物出土状況 (77-25)



遺物出土状況 (75-26)



遺物出土状況 (77-30)

遺物出土状況 (77-33)



礎石出土状況 (東から)



蔵骨器出土状況（南から）



1



2



3



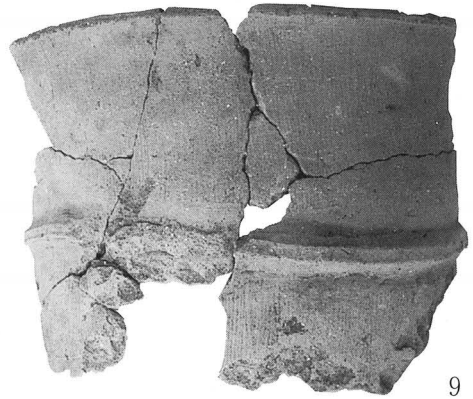
4



5



6



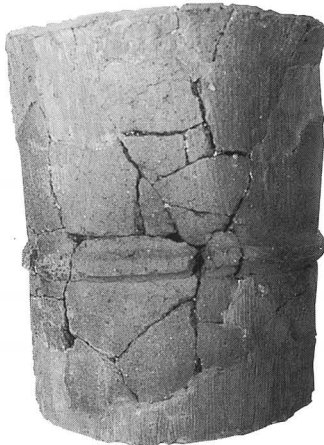
9



11



10



14



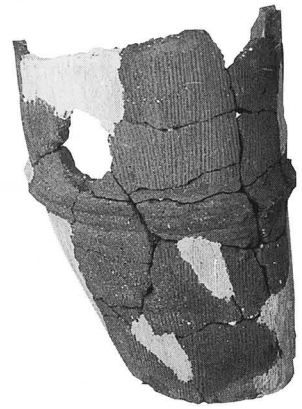
12



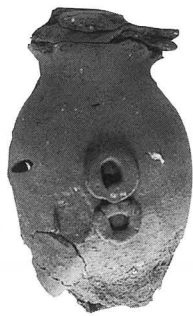
13



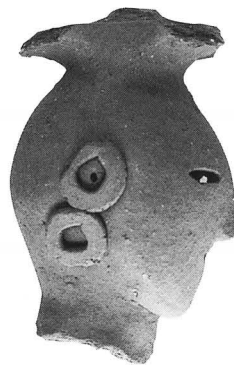
16



17



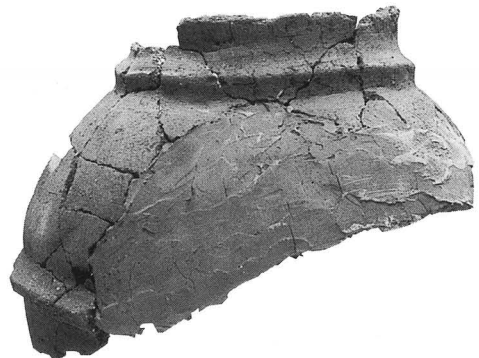
18



19



21



23



25



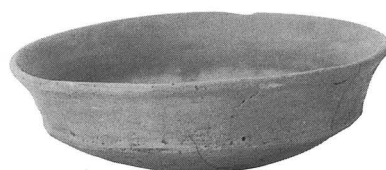
26



28



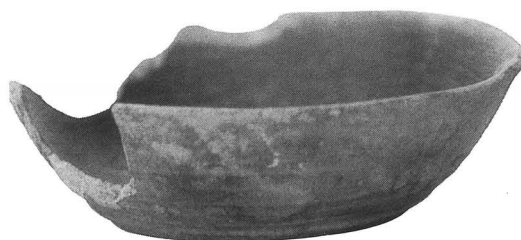
29



30



31



33

下宮・有田北・有田東遺跡・
有田東1号古墳発掘調査報告書

平成10年3月10日印刷

平成10年3月25日発行

発行 茨城県真壁郡明野町教育委員会
明野町埋蔵文化財発掘調査会

印刷 タグチ企画

明野町海老ヶ島724

TEL 0296(52)6693